

2022 年 7 月

食料安全保障月報

(第 13 号)



令和 4 年 7 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2022 年 7 月食料安全保障月報（第 13 号）

目 次

概要編

I	2022 年 7 月の主な動き	1
II	2022 年 7 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報 ウクライナ情勢下での米国と世界の穀物生産・輸出動向 （資料）	5
1	穀物等の国際価格の動向	9
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	10
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	11
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	13
5	食品小売価格の動向	17
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	18
7	FAO 食料価格指数	20

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る	
	＜カナダ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ 5 割以上増加	
	＜豪州＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4% 下回るも 30.0 百万トンの見込み	
	＜EU27+英国＞ EU27 の生産量は前月予測に比べ 5.8 百万トン下方修正	
	＜中国＞ 冬小麦は収穫が終了。生産量は対前年度 0.4% 増の 131.9 百万トン	
	＜ロシア＞ 輸出関税がルーブル建てに変更され、関税額は実質低下	
	＜ウクライナ＞ 生産量は、前月予測から 2.0 百万トン下方修正の 19.5 百万トン	
2	とうもろこし	9
	＜米国＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し	
	＜ブラジル＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し	
	＜アルゼンチン＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続	
	＜中国＞ 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し	
	＜ウクライナ＞ ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し	
3	コメ	15
	＜米国＞ 収穫面積が減少。中・短粒種は 1985/86 年度以来の生産量に	
	＜インド＞ 7 年連続史上最高を更新見込みも作付け遅れ	
	＜中国＞ 1～5 月の輸入量は、飼料用を含め対前年同期比 3 割増	
	＜タイ＞ 主要生産地である北東部の土壌水分量は改善	
	＜ベトナム＞ 国内価格の高騰により、輸入量が上方修正	

Ⅱ 油糧種子	
大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
＜米国＞収穫面積は下方修正されたものの、生産量は史上最高、輸出減の見通し	
＜ブラジル＞2021/22 年度の収穫終了、高温・乾燥で減産見通し	
＜アルゼンチン＞2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続	
＜中国＞ 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し	
＜カナダ＞ 収穫面積・単収の減少により減産、輸出量は増加見通し	

(参考) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23 年度)・・・ 27

特別分析トピック

「我が国と世界の肥料をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：カナダ・アルバータ州の小麦（6月27日撮影）
天候に恵まれ順調に出穂期を迎えている。

(概要編)

I 2022 年 7 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2022/23 年度の作況については、北半球の冬小麦は収穫期を、その他の作物は、生育期を迎え、南米では、今後作付けが開始される。

品目別にみると、7 月の米国農務省（USDA）の需給報告では、世界の小麦については、生産量は前年度より減少する見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、国際相場は 3 月には過去最高を更新した。今後も注視が必要。

また、とうもろこしについては、世界の生産量は前年度より減少する見通し。一方、大豆については、前年度乾燥で減産となった南米を中心に世界で増産となる見通しである。いずれも期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視していく必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数（最新値：6 月）については、肉類（123→125）が過去最高、乳製品（144→150）が上昇したものの、穀物（174→166）、植物油（229→212）が下落した影響により、5 月より下落（158→154）した。

海上運賃について、バルチック海運指数（穀物輸送に主に使用される外航ばら積み船の運賃指数）は、昨年 10 月に直近 5 年間の最高値を記録。それ以降は下落していたが本年 2 月から上昇に転じ、直近では再び下落傾向で推移。

早期注意段階の継続について

現状において、我が国の食料の安定供給に懸念は生じていないものの、上記の状況を踏まえ、2021 年 7 月から適用を開始した、緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、7 月も引き続き適用。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/ampo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

ウクライナ農業政策食料省の7月15日プレスによると、冬作物に関し、作付面積の10%相当にあたる120万ヘクタールが収穫され、冬小麦は170万トン収穫された。

とうもろこし等の夏作物は現在生育期を迎えている。

米国農務省（USDA）によれば、2022/23年度のウクライナの小麦生産量は、ロシアの侵攻の影響を受け、収穫面積が引き下げられたことから6月見通しから200万トン下方修正され対前年度比41%減の1,950万トン、輸出量は6月見通しから変更なく、対前年度比47%減の1,000万トンの見通し。

一方、とうもろこし生産量については、ロシアの侵攻が継続しており、6月見通しから変更なく、対前年度比41%減の2,500万トン。輸出量は、対前年度比で63%減の900万トンで据え置かれている。この結果、期末在庫量は積み上がり、小麦ととうもろこし計で1,700万トンを超える見通し。

なお、ウクライナ、トルコ、ロシア、国連の4者でウクライナ産穀物の黒海からの輸出再開に関する協議が行われ、7月22日には輸出航路の安全確保で合意した。今後、オデーサ港など3港からの輸出が再開されるとみられる。ただし、穀物輸出に係るインフラが被害を受けており、実際の穀物の輸出再開までには相当程度の時間がかかると見られている。

1 カナダの小麦播種面積は対前年度比8.7%増加の見通し

カナダ統計局が7月5日に作付面積調査結果を公表した。主に西部のプレーリー（平原3州）で栽培される小麦の播種面積は、作付け時期の小麦の国際価格が高水準であったため、対前年度比8.7%増の1,030万ヘクタールで過去10年間で最高水準となった。一方、同様にプレーリーで栽培される菜種は、小麦へのシフトから播種面積は4.7%減の870万ヘクタールとなっている。また、東部で栽培される大豆の播種面積は、対前年度比0.9%減の210万ヘクタールの見通し。

カナダ農務農産食品省の7月見通しによれば、小麦の生産量は、前年度の干ばつの影響から大きく回復し、播種面積も増加することから、対前年度比56%増の3,370万トンの見通し。菜種は、播種面積が前年度より減少したものの、単収が回復することから、対前年度比46%増の1,840万トン、大豆は、単収の改善見通しにより、対前年度比1%増の640万トンの見通し。

2 ロシアの小麦生産量は前年度より8.4%増、輸出枠は解除

ロシアの小麦は7月以降、冬小麦が収穫期を迎えている。USDAによれば、前年度と比較して冬枯れ被害が少なかったため、前年度比8.4%増の8,150万トンの見通し。ロシアの農業関係者の中では2017/18年度の過去最高を更新するとの見方もある。

7月に入り、穀物の輸出税については、米ドル建てからルーブル建てに変更され、穀物輸出枠については、小麦800万トン、とうもろこし等の輸出枠300万トンが解除されたことから、対露経済制裁を科していない中東・アフリカ諸国向けを中心に、今後輸出が増加する見通し。

3 EUの乾燥による穀物生産量下方修正

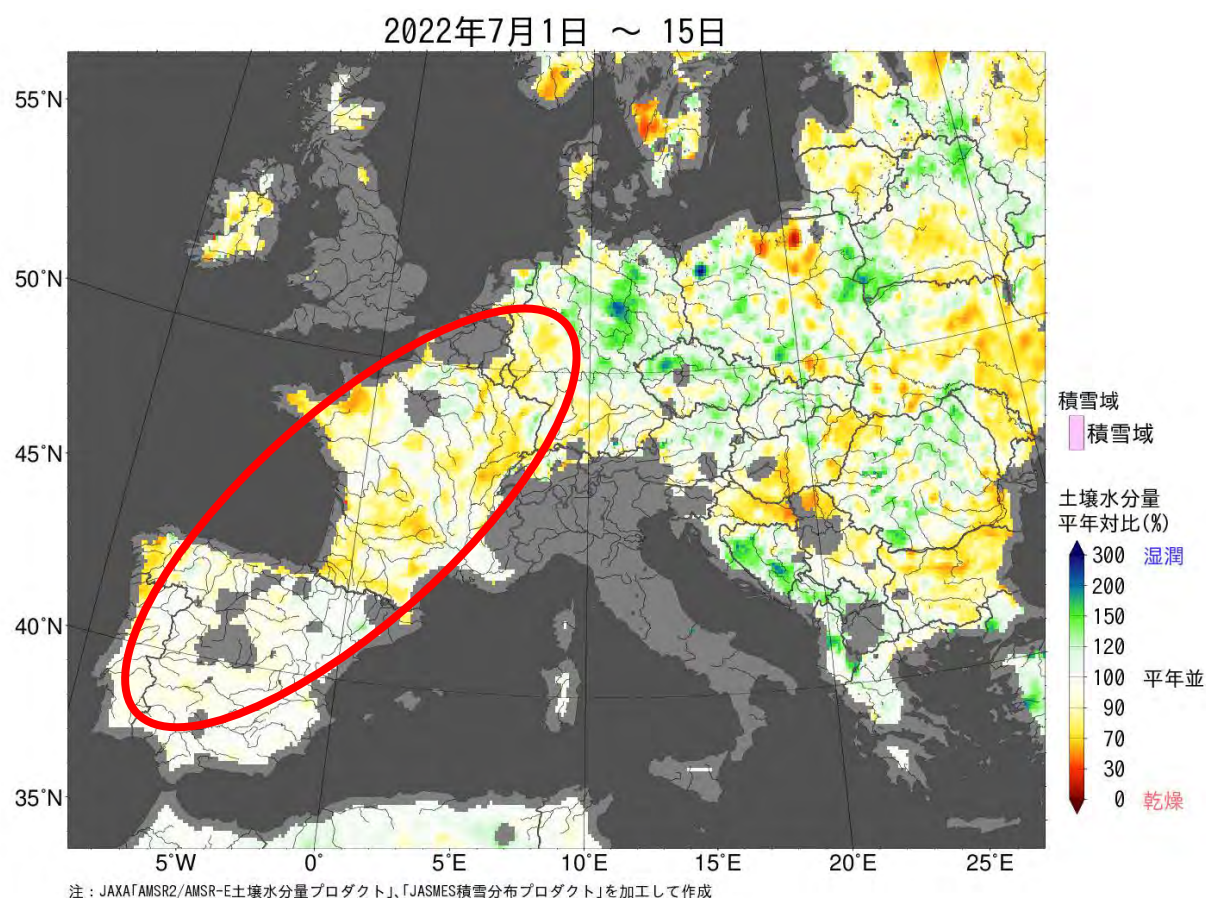
EUでは、小麦等冬穀物は収穫期、とうもろこし等夏穀物は生育期を迎えているが、報道等によると、6月から、南欧を中心に欧州の多くの地域で高温乾燥となっており、7月には地域によっては40度を超え、イタリア北部では70年ぶりの干ばつともいわれている。この乾燥の影響を受け、USDAによれば、小麦の生産量は200万トン下方修正され1億3,410万トン、夏作物のとうもろこしの生産量は25万トン下方修正され6,800万トン、イタリア、スペインなどで栽培されているコメの生産量は28万トン下方修正され146万精米トンの見通し。

なお、小麦については収穫期を迎えており、影響は少ないという見方もあるが、とうもろこしについては、受粉期に入るため、作柄への影響が懸念されるとの見方もある。

図 欧州の6月の土壌水分量の平年対比（JASMAI より）

スペインからフランス、ドイツ南部にかけて土壌水分量は平年より少ない

※イタリア等灰色の地域に関してはセンサーの特性上、土壌水分量の観測ができないために欠損となっている。



II 2022 年 7 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、6 月末、310 ドル/トン台後半で推移。7 月に入り、世界的な景気後退懸念から 290 ドル/トン台前半に値を下げたものの、EU での乾燥による生産減見込み等から 320 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、各国の冬小麦の収穫の進展や、ウクライナ、トルコ、ロシア、国連でのウクライナ産穀物輸出再開に向けた協議への期待感等から値を下げ、7 月下旬現在、280 ドル/トン台前半で推移。

とうもろこしは、6 月末、290 ドル/トン台前半で推移。7 月に入り、米国中西部の高温・乾燥に伴う作柄悪化懸念等から一旦 300 ドル/トン台後半まで値を上げた。その後、米国中西部の一部での降雨予報やウクライナ産穀物輸出再開に向けた 4 者協議への期待感等から大幅に値を下げ、7 月下旬現在、220 ドル/トン台後半で推移。

コメは、6 月末、440 ドル/トン前後で推移。7 月に入り、一時バーツ高となったものの、再びバーツ安に転じたことと、軟調な輸出需要から値を下げ、7 月下旬現在、価格は 420 ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、6 月末、610 ドル/トン台半ばで推移。7 月に入り、欧米を中心とした世界的な景気後退懸念に伴うその他金融市場の下落等を背景に、7 月上旬に一旦 580 ドル/トン前後まで値を下げた。その後、小麦やとうもろこし価格の上昇に追随し、600 ドル/トン台前半まで値を上げた。7 月中旬以降は、米国中西部の一部での降雨予報やとうもろこし価格の下落に追随し、大幅に値を下げ、7 月下旬現在、540 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2022/23 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月予測から 440 万トン下方修正され 27.6 億トン。消費量は、前月予測から 450 万トン下方修正され 27.8 億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を下回り 28.4%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前月予測から、小麦、コメで下方修正され、とうもろこしで上方修正も、穀物全体で下方修正され、27.6 億トンの見込み。

消費量は、前月予測から、小麦、とうもろこし、コメで下方修正され、穀物全体で下方修正され、27.8 億トンの見込み。

貿易量は、前月予測から、小麦、コメで上方修正、とうもろこしで下方修正され、4.9 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.9 億トンと前月予測から上方修正、期末在庫率は、前月予測から上方修正された。

(注：数値は 7 月の USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2022/23 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.4 億トン。消費量は前年度を上回り 6.3 億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を上回り、18.8%となる見込み。

(注：数値は 7 月の USDA 「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:ウクライナ情勢下での米国と世界の穀物生産・輸出動向

米国のとうもろこしは、7月から8月にかけて、単収の決定に大きな影響があるといわれる受粉期を迎え、大豆も開花期を迎える。6月の高温乾燥傾向から7月前半は影響が緩和されたといわれているものの今後注視が必要。一方、乾燥の影響を受けた冬小麦は収穫が終盤を迎え、生産量は対前年度比で減少。

なお、ウクライナの穀物輸出再開に向けた4者合意は行われたものの先行きが不透明であり、ウクライナからの輸出減を米国等が今後どれだけカバーでできるか注目される所。

注 文中の「2022/23年度」等は穀物年度で、ウクライナの小麦は2022年7月から2023年6月。

国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 ウクライナの生産・輸出動向

(1) 生産・輸出動向

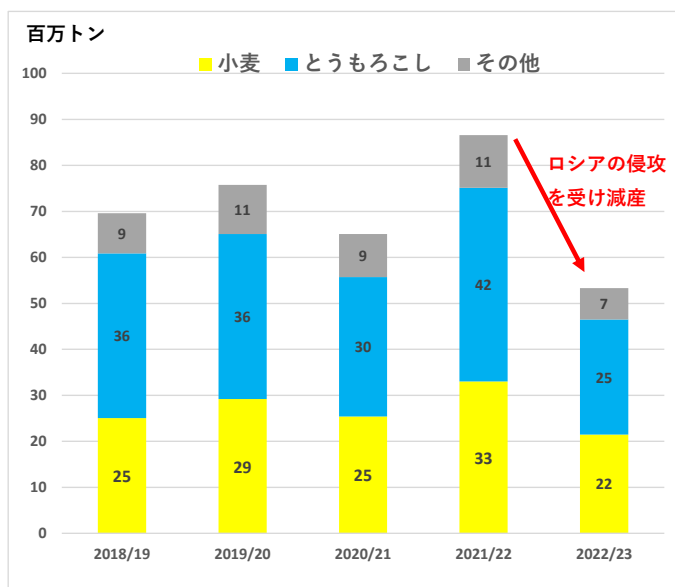
米国農務省(USDA)の2022年7月の需給見通しによれば、ウクライナの2022/23年度の小麦生産については、ロシアによる侵攻を受け、史上最高であった前年度と比べて41%減の1,950万トンで、6月見通しから、ロシア侵攻による影響を反映したウクライナ政府のデータを反映し、200万トン下方修正された。輸出についても減産に加え、インフラ等の被害や、ロシアによる黒海のオデーサ港等主要輸出港に対する封鎖により、対前年度比47%減の1,000万トンで据え置かれた。とうもろこしについては6月見通しから生産量2,500万トン、輸出量が900万トンで据え置かれている。

(2) 今後の見通しと国際相場への影響

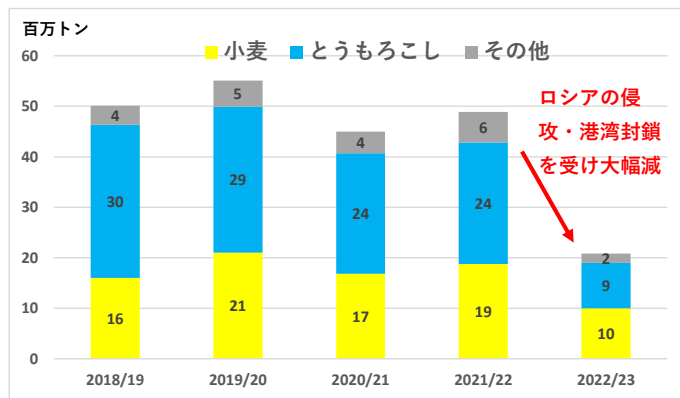
7月22日に、トルコのイスタンブールでウクライナ、ロシア、トルコ、国連の4者協議が行われ、ウクライナの黒海からの穀物輸出再開に向け合意書に署名した。オデーサ港など3港からの輸出が再開されることになっている。シカゴの小麦相場は、2月24日のロシアによる侵攻等を背景に大きく上昇し、3月7日には史上最高値(14.25ドル/ブッシェル)を更新し、その後下落し、この合意報道を受け、7月22日には7ドル台半ば(期近物)まで下落した。

図1 ウクライナの穀物の生産・輸出見通しの推移

(1) 生産量



(2) 輸出量



出典: 米国農務省 「PS&D」(2022.7)

2 米国の生産と輸出動向

(1) 作付・生育動向

2022年6月の作付面積調査によれば、肥料投入量の多いとうもろこしは、肥料価格の高騰

による影響を受けたとみられ、作付面積は前年度より 4 %減の 3,639 万ヘクタールとなった。

一方、大豆や小麦はそれぞれ 1 %増加し、3,574 万ヘクタール、1,906 万ヘクタールとなった。

6 月は土壤水分が平年より少ない傾向となっていたが、7 月に入り降雨があり緩和された。今後、とうもろこしが単収の決定に大きな影響を与える受粉期を迎え、大豆も開花期を迎えるため注視が必要である。

(2) 小麦

生産量は前年度比 8.2%増の 4,850 万トンの見通し。収穫面積及び単収の上方修正

により 6 月見通しから 120 万トン上方修正された。冬小麦については収穫が終盤を迎え、収穫進捗率は 7 月 17 日時点で 70%と過去 5 年平均 (71%) 並み。生産量は、干ばつの影響を受け、対前年度比 6 %減の 3,270 万トンの見通し。

一方、春小麦は生育期を迎えており、出穂率は同時点で 68%と過去 5 年平均の 90%と比較して遅れている。生産量は干ばつ被害のあった前年度と比較して 52%増の 1,370 万トンの見通し。デュラム小麦については、作付面積の増加から同様に前年度と比較して倍増以上の 210 万トンの見通し。

輸出量は、他の輸出国と比べて、価格競争力が乏しいことから、前年度より 0.5%減の 2,180 万トンと伸び悩む見通し。

(3) とうもろこし

生産量は、作付面積の減少から前年度比 4.0%減の 3 億 6,840 万トンとなる見通し。なお、6 月作付面積調査において、3 月の作付意向調査より作付面積、収穫面積とも上方修正されたため、生産量は 110 万トン上方修正された。

輸出量は、生産量の減少により、前年度より 2.0%減の 6,100 万トンの見通し。

(4) 大豆

生産量は、前年度より作付面積の増加から前年度比 1.6%増で史上最高の 1 億 2,260 万トンとなる見通し。しかしながら、6 月の作付面積調査において 3 月の作付意向調査時点より作付面積・収穫面積と下方修正されたため、生産量は 6 月見通しから 370 万トン下方修正された。

輸出量は、国内需要の増加により、前年度より 1.6%減の 5,810 万トンの見通し。

図 2 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積の推移

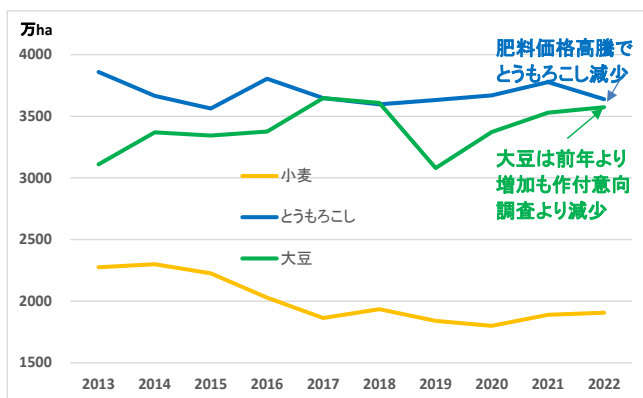
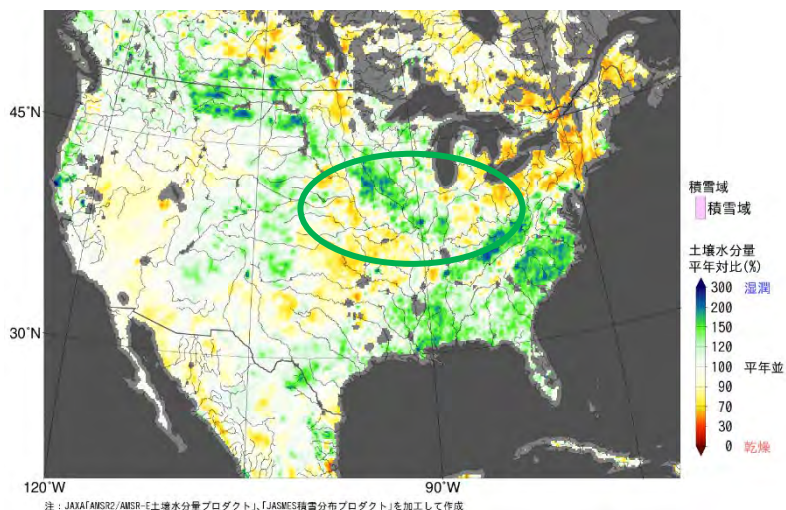


図 3 北米の 7 月前半の土壤水分量の年対比(JASMAI より)
コーンベルトの土壤水分不足は改善



3 世界の穀物貿易への影響

(1) 小麦

ウクライナの穀物輸出再開に向け、4者合意となったが、ウクライナの穀物輸出に係るインフラが戦争による被害を受けており、合意の翌23日にはロシアにオデーサ港が攻撃されたことなど、実際の穀物の輸出再開までには相当程度の時間がかかると見られている。小麦輸入国においては、7月以降、新穀の収穫が開始されるEU産、ロシア産か、3年連続豊作が予想される豪州産を中心に手当てを行うとみられる。

ロシア産については、増産により輸出増が見込まれており、対ロシア向け経済制裁を実施していない中東、アフリカ諸国向けに引き合いが増加しているとみられる。6月末には小麦、大麦で100ドル/トンを上回る水準に上昇した可変輸出関税は、7月以降はルーブル建てに変更され、ドル換算では割安になるとみられていることや、6月まで設定されていた小麦800万トン等の輸出枠が解除されたことが背景にあるとみられる。

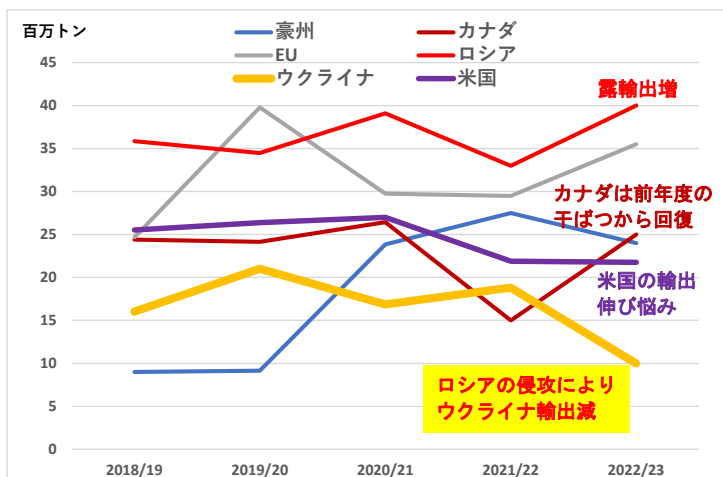
EU産は輸出増加が見込まれている。イタリアで70年ぶりの干ばつと報道されている等、7月に入り各地で高温乾燥となっているが、すでに収穫期を迎えているため、その影響はある程度免れるとみられる。

輸出が伸び悩んでいる米国では冬小麦の収穫が開始され、今後新穀の輸出が開始されるとみられる。前年度干ばつであったカナダ産も豊作が見込まれている。しかし、中東やアフリカ諸国は、北米産については輸送距離の問題から調達コストが高くなることも予想されることから、ロシア産、豪州産を中心に手当てをするのではないかとみられる。なお、豪州産穀物に関する輸出施設使用枠の確保については、米国など競合先国の輸出状況を含め、引き続き注視が必要である。

(2) とうもろこし

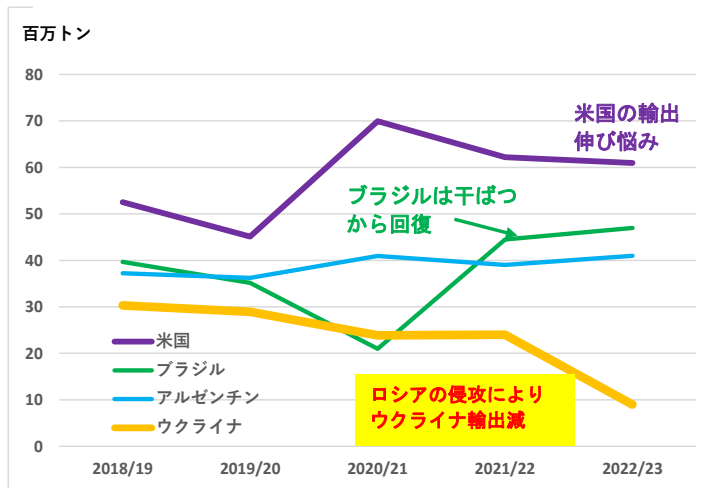
USDAによれば、2022/23年度のウクライナ産の輸出量も前年度比63%減の900万トンとなる見通し。一方で、冬とうもろこしの収穫が本番を迎え、これから輸出が開始される2021/22年度のブラジル産は史上最高の生産量(前年度比33%増の1億1,600万トン)となり、それに伴い輸出量も史上最高の4,450万トン(前年度比2.1倍)となる見込み。なお、7月に受粉期を迎えるEUのとうもろこしが高温乾燥の被害を受け、ブラジル産の輸入を増加させる可能性があるともみている業界関係者もいる。

図4 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 7)

図5 主要とうもろこし輸出国の輸出量の推移



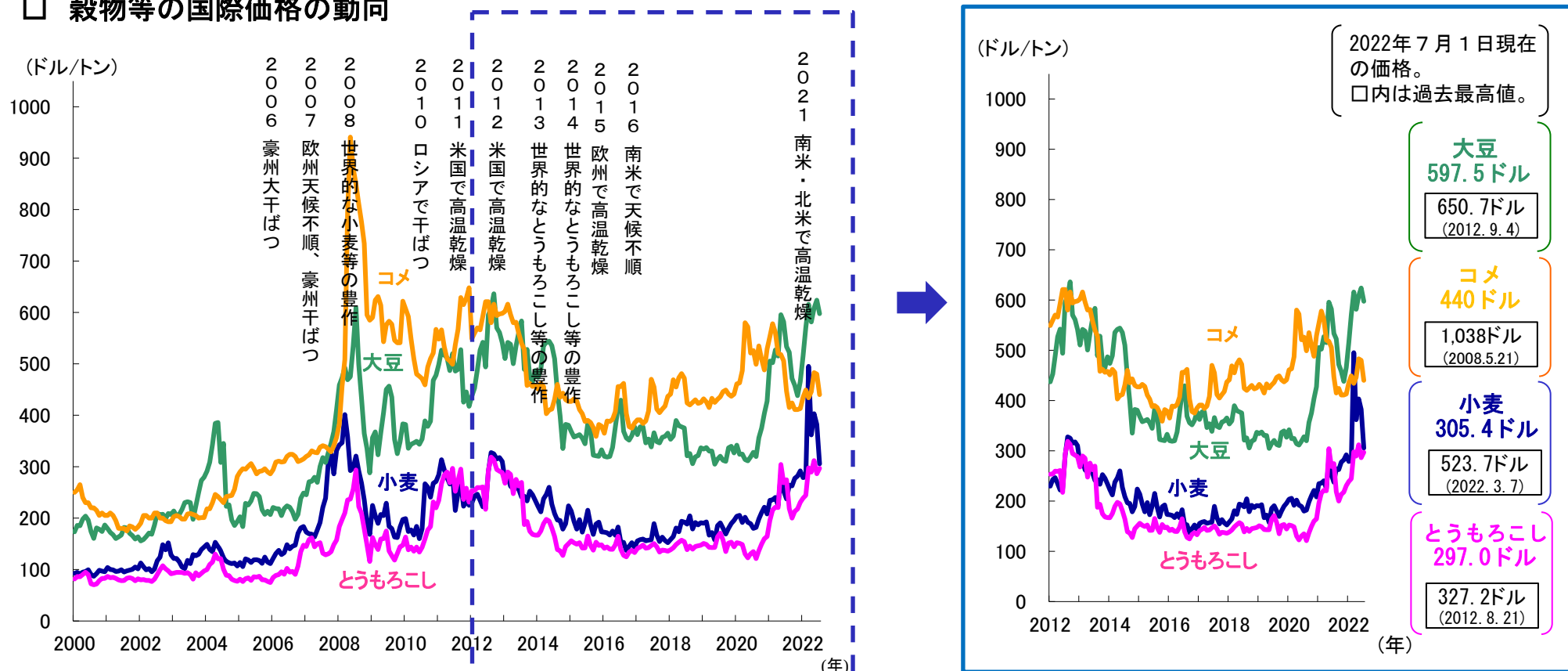
出典：米国農務省 「PS&D」 (2022. 6)

なお、今までウクライナ産を輸入していた中国は、ブラジル産輸入に関し検疫に関し合意したものの、その後の遺伝組み換えの承認手続きに時間がかかっているとみられ、当面は米国産を手当てしている模様である。作付面積減による減産から輸出量も伸び悩むとみられている米国産が、今後、どこまで輸出を伸ばすか引き続き注視していく。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2017年以降ほぼ横ばいで推移も、2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年に入り、ウクライナ情勢が緊迫化する中、さらに上昇（小麦は史上最高値を更新）。 コメは、2013年以降低下も2020年ベトナムの輸出枠設定や2021年初頭のコンテナ不足等で一時的に上昇。2021年2月半ばから海外需要低迷で低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により、2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向



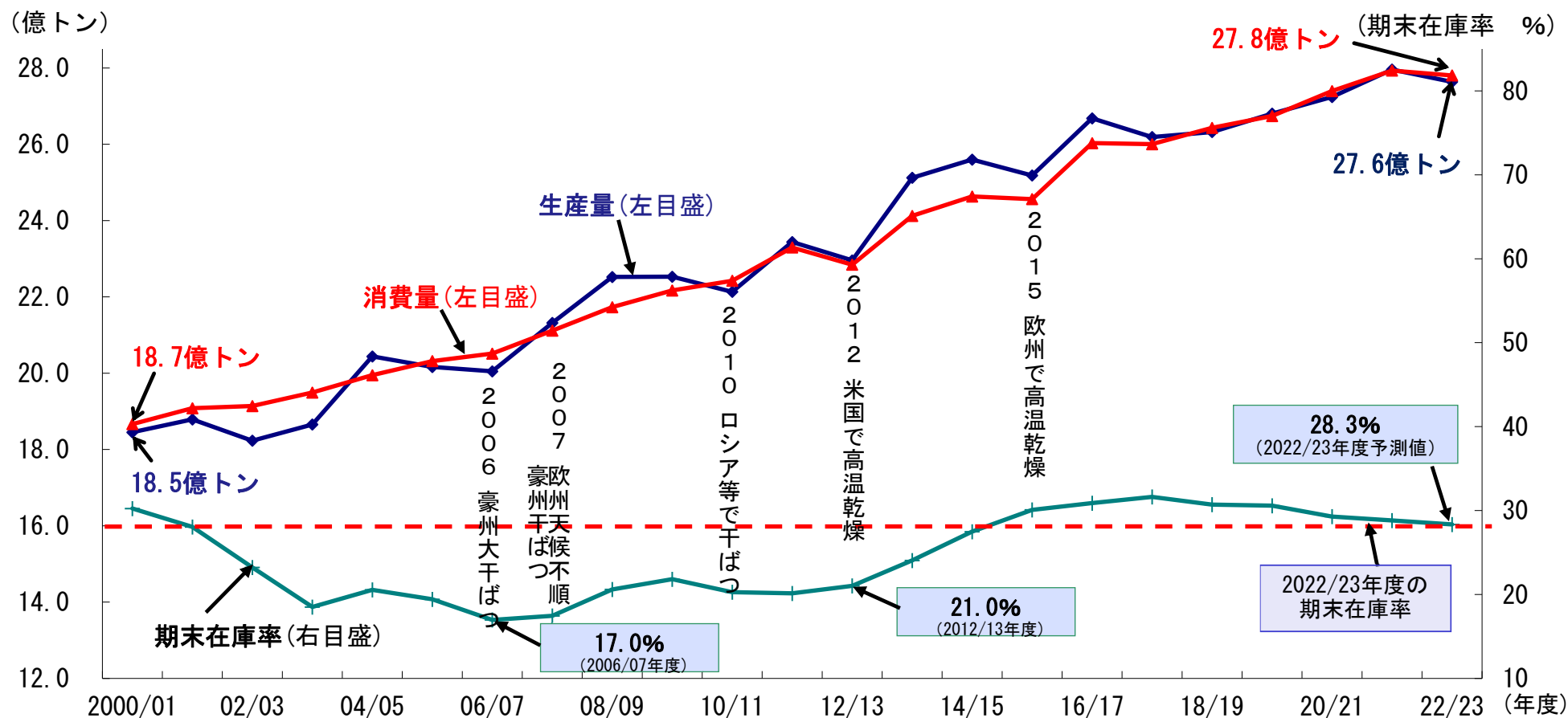
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、コメの2022年7月1日現在の価格は、6月29日の価格である。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料 2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、28.3%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

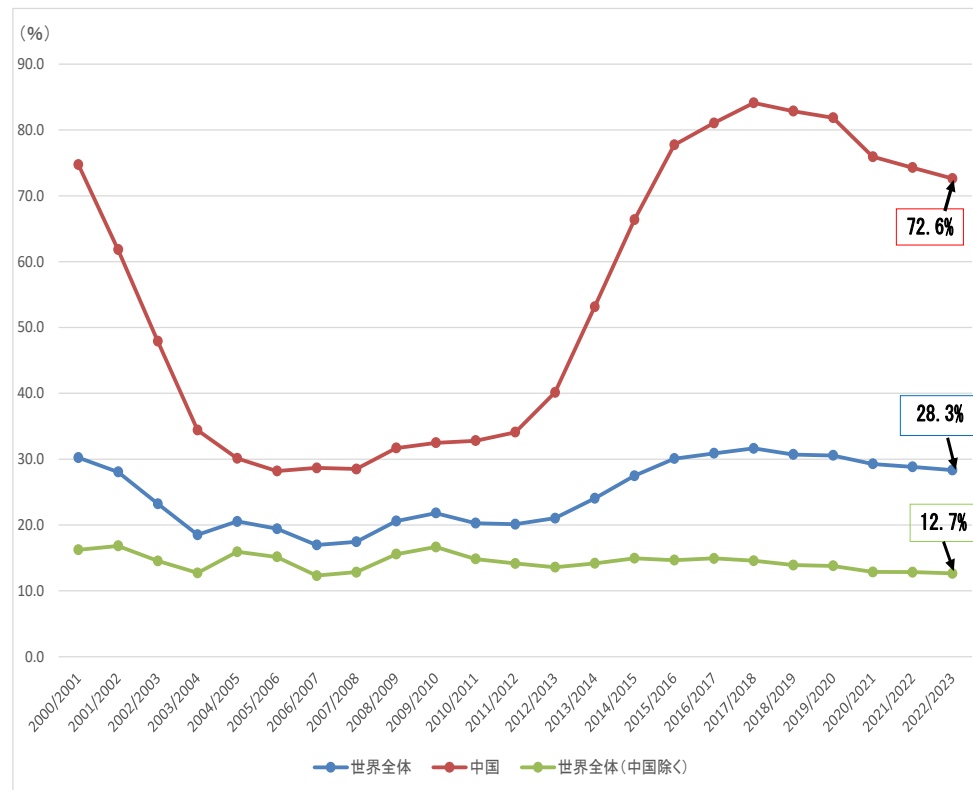


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(July 2022)、「PS&D」

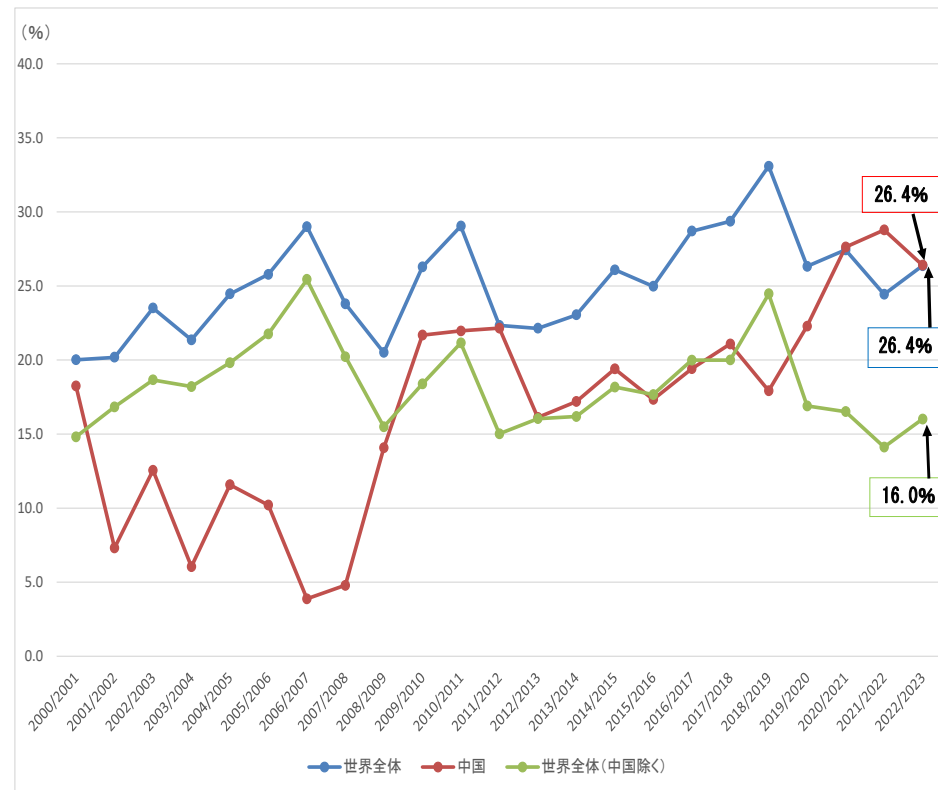
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2022)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

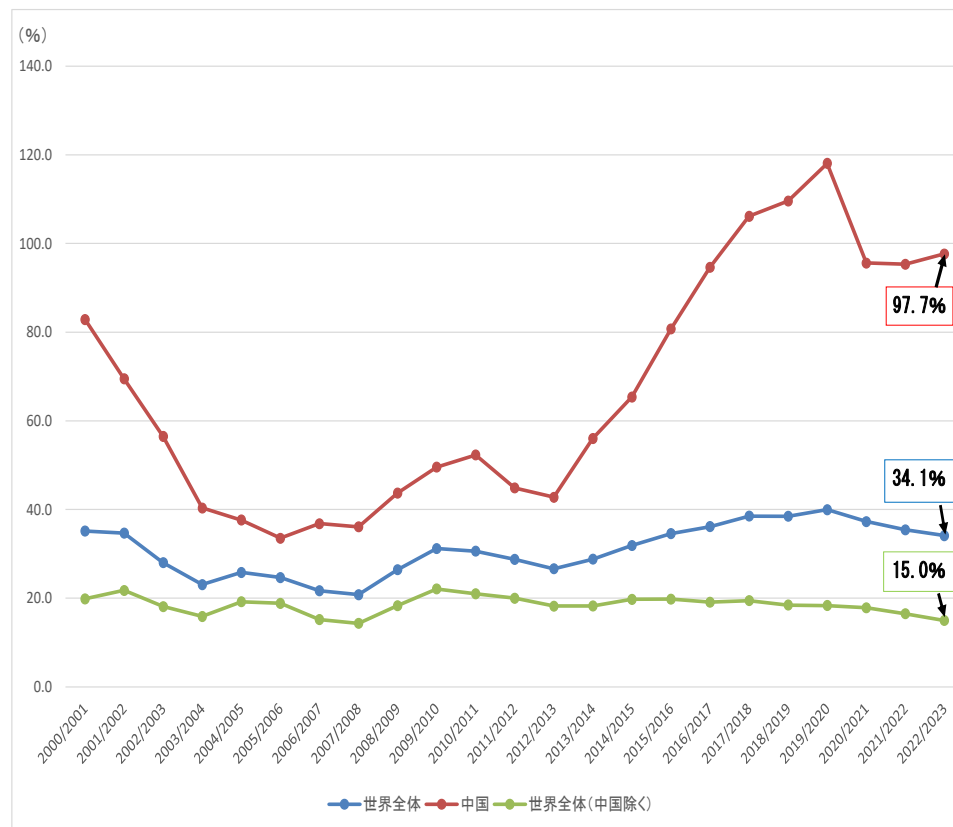
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

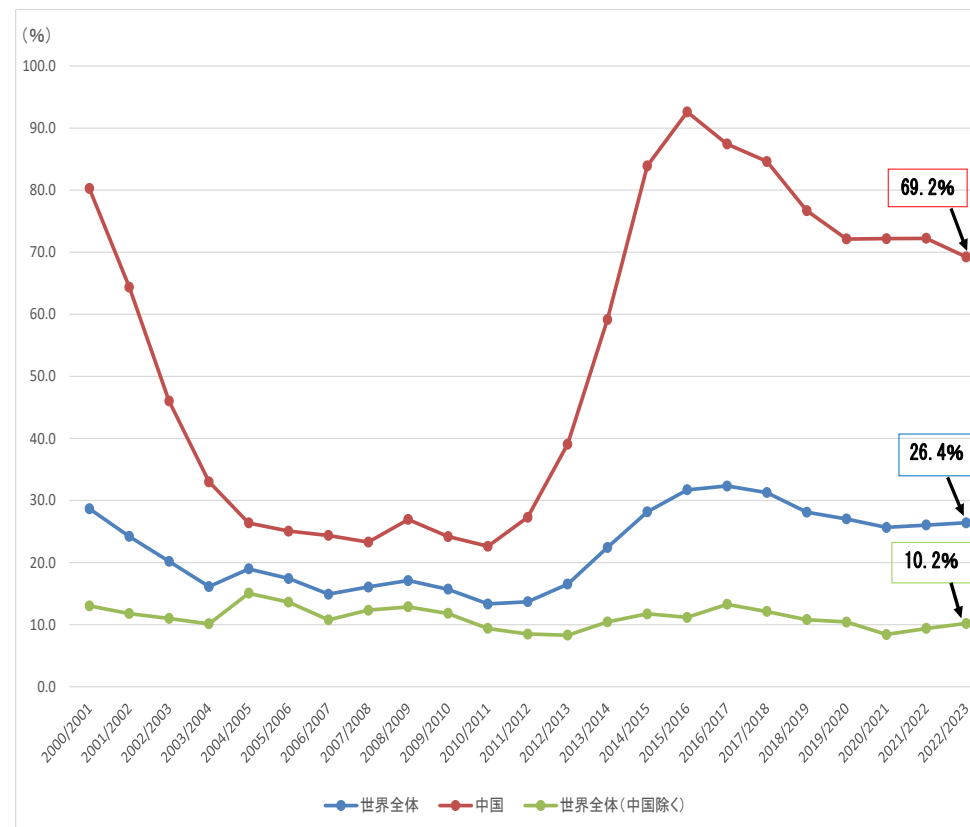
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(July 12, 2022)

注: 1) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

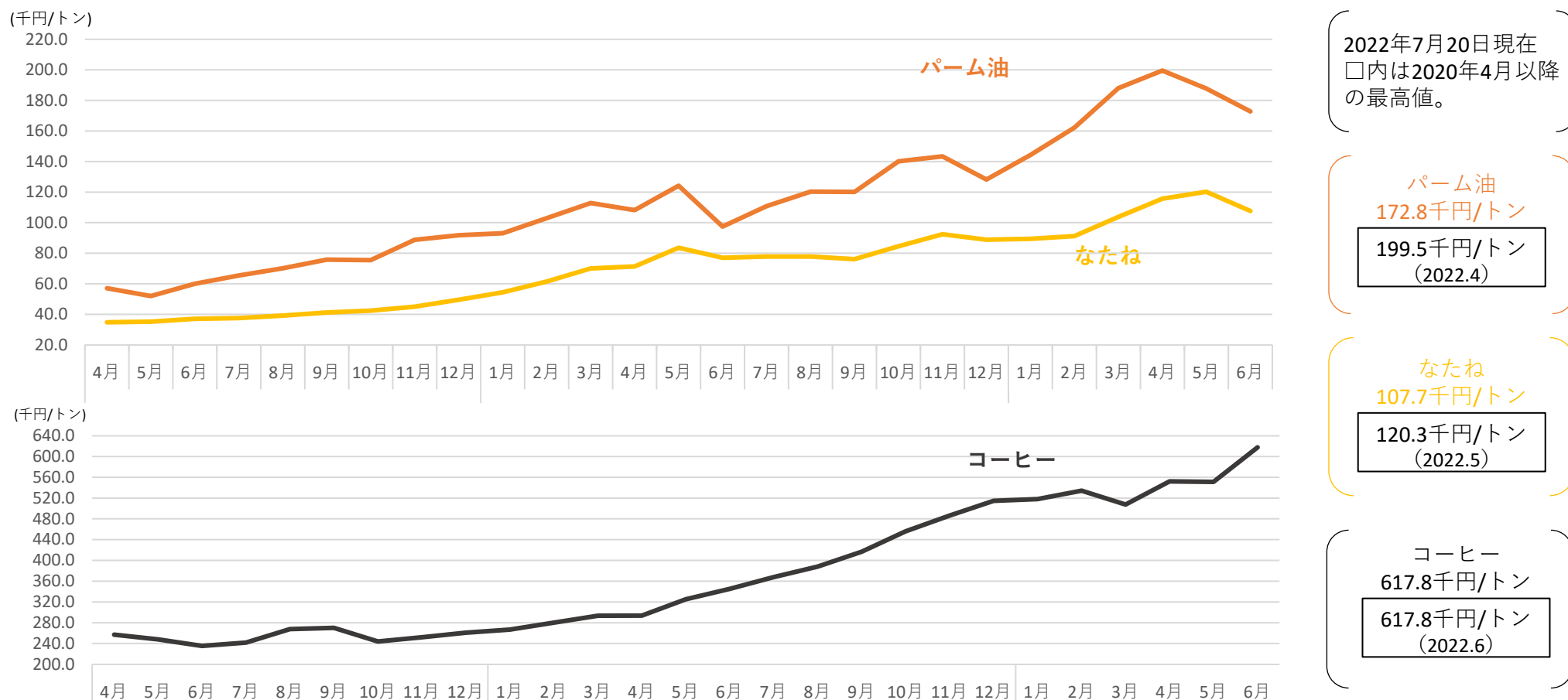
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油について、需要の面では世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加、ウクライナ情勢の影響などが価格に影響を及ぼしている。
- 供給面では、なたねについて、主産地であるカナダでの高温、乾燥の影響により、減産と品質の低下が見られる。パーム油については、新型コロナウイルスの感染拡大による労働力不足により、主産地であるマレーシアにおいて、収穫作業が進まず、減産傾向となっているほか、インドネシアによるパーム油の輸出制限（5月23日解除）が価格に影響を及ぼしている。
- コーヒーについて、世界最大の生産国であるブラジルの天候不順や世界的な物流の混乱等供給不足への懸念が強まったこと、需要面ではワクチン接種による経済活動の回復からコーヒー消費量が増加したことが価格に影響を及ぼしている。

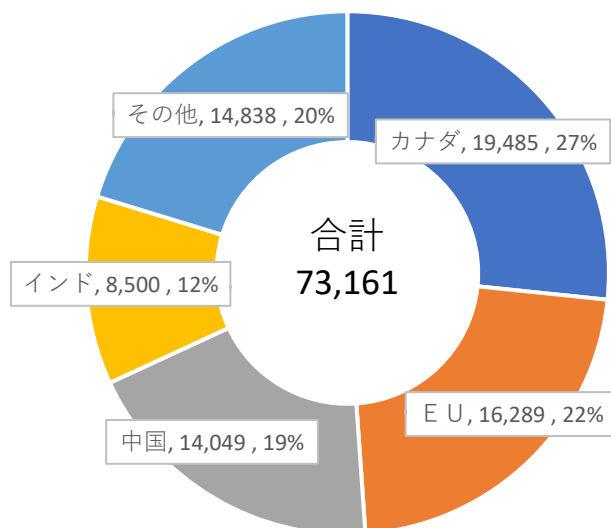


※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料４－２ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

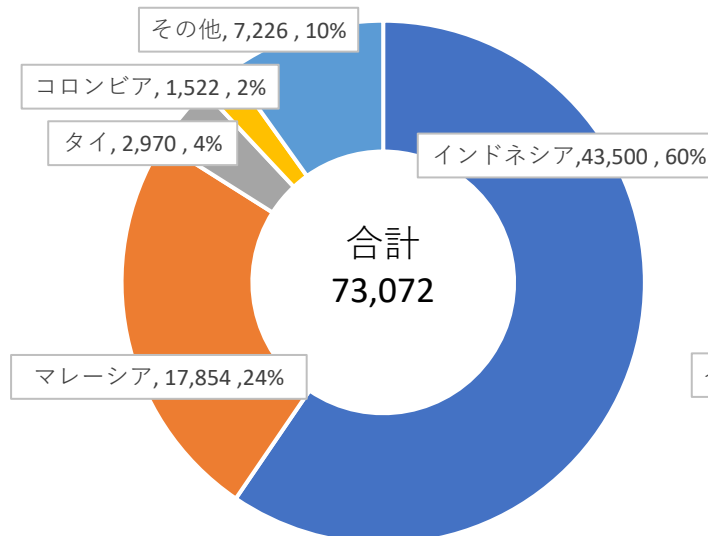
○主要生産国の生産状況

なたね生産量（2020/21）
（単位：千トン）



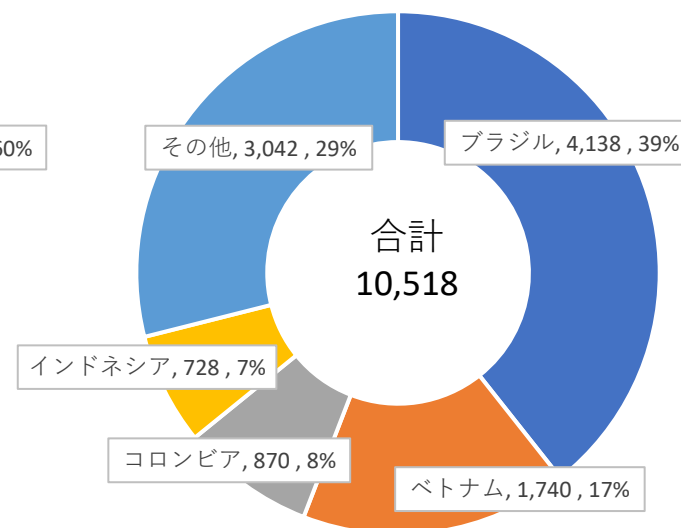
※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

パーム油生産量（2020/21）
（単位：千トン）



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）

コーヒー生産量（2020）
（単位：千トン）



※国際コーヒー機関（ICO）統計資料

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2021年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	2,124	90.7%
オーストラリア	218	9.3%
その他	0	0.0%
合計	2,342	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	418	65.4%
インドネシア	220	34.5%
その他	0	0.0%
合計	638	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	146	35.7%
ベトナム	101	24.6%
コロンビア	48	11.7%
その他	115	28.0%
合計	399	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11-22）

資料４－３ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
なたね	34.9	35.2	37.1	37.6	39.2	41.2	42.5	45.0	49.5	54.4	61.5	70.0	71.4	83.6	77.0	77.8	77.9	76.2	84.5	92.4	88.8	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7
前月比	99.7	100.9	105.4	101.4	104.2	105.1	103.0	106.1	110.0	109.9	113.0	113.9	101.9	117.1	92.2	101.1	100.0	97.8	111.0	109.3	96.2	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5
前年同月比	92.1	98.4	101.8	102.0	109.7	112.6	112.3	119.6	128.9	136.4	162.7	200.1	204.6	237.4	207.6	206.9	198.5	184.9	199.2	205.2	179.3	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2020年										2021年												2022年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	
パーム油	57.1	52.1	60.0	65.4	70.1	75.8	75.5	88.8	91.8	93.1	102.9	112.9	108.2	124.2	97.4	110.8	120.3	120.1	140.1	143.4	128.2	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	
前月比	102.1	91.1	115.3	109.0	107.2	108.1	99.6	117.6	103.4	101.4	110.6	109.7	95.9	114.8	78.4	113.8	108.5	99.9	116.6	102.3	89.4	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	
前年同月比	100.0	98.9	115.0	129.8	129.3	131.9	135.9	134.6	121.7	117.0	143.8	201.8	189.4	238.6	162.3	169.4	171.5	158.4	185.5	161.5	139.7	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料４－４ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③ コーヒー

単位（千円/トン）

	2020年									2021年												2022年					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
コーヒー	257.1	247.9	235.5	241.8	267.7	270.0	244.0	251.9	260.9	266.8	280.2	293.5	293.7	325.2	345.1	367.9	388.1	416.7	455.9	486.3	514.7	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	617.8
前月比	99.5	96.4	95.0	102.7	110.7	100.9	90.4	103.3	103.6	102.3	105.0	104.7	100.1	110.7	106.1	106.6	105.5	107.4	109.4	106.7	105.8	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	112.1
前年同月比	111.0	111.4	99.1	98.0	119.0	116.0	105.3	97.4	92.9	104.6	115.4	113.6	114.2	131.2	146.6	152.2	145.0	154.3	186.9	193.0	197.3	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	179.0

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出

2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和4年6月の国内の加工食品の消費者物価指数は99.3～139.2（前年同月比で－0.6%～36.0%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和4年1月～令和4年6月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R4						
品目	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	99.6	100.2	101.1	100.0	99.2	103.2	107.1	107.2	108.0	107.5	107.9	9.0%
即席めん	95.7	95.3	98.5	100.0	100.1	100.4	100.9	100.9	100.1	100.1	110.0	11.1%
豆腐	98.6	98.8	99.1	100.0	101.3	102.3	102.1	102.9	103.1	104.0	104.7	3.9%
食用油 (キャノーラ油)	102.7	101.5	100.9	100.0	106.9	124.6	128.4	132.2	134.8	135.4	139.2	36.0%
みそ	96.9	97.4	99.1	100.0	99.3	98.3	99.0	99.9	100.7	101.0	99.8	1.2%
マヨネーズ	102.3	100.8	100.7	100.0	105.6	112.3	113.3	120.3	123.9	126.1	125.0	25.1%
チーズ	97.3	100.9	101.3	100.0	98.7	98.5	100.2	99.3	103.0	105.3	104.0	7.8%
バター	99.3	99.5	99.9	100.0	99.9	99.7	99.9	99.7	99.1	99.5	99.3	-0.6%
生鮮食品を 除く食料	97.0	97.9	99.0	100.0	100.2	101.2	101.5	101.9	102.4	102.6	103.2	3.2%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査（農林水産省） （令和4年1月～令和4年7月）

	H29	H30	H31 (R元)	R2	R3	R3	R4							
品目	平均	平均	平均	平均	平均	12月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	97.6	97.9	101.3	100.0	98.6	98.4	105.3	104.6	105.1	104.6	105.9	109.8	3.7%	12.3%
即席めん	92.6	92.4	97.9	100.0	99.2	97.8	98.4	99.0	99.0	99.0	110.0	111.2	1.1%	12.3%
豆腐	100.8	100.1	100.9	100.0	100.6	100.7	101.1	102.0	101.6	102.4	102.9	103.3	0.4%	3.0%
食用油 (キャノーラ油)	97.9	97.9	103.5	100.0	104.1	116.3	122.9	126.4	129.6	130.8	132.7	139.1	4.8%	38.1%
みそ	91.9	96.6	100.4	100.0	99.2	97.5	98.1	98.4	99.0	99.6	98.8	99.8	1.0%	1.7%
マヨネーズ	99.1	97.9	103.1	100.0	102.2	105.6	105.9	112.1	117.2	117.2	118.3	117.2	-0.9%	12.2%
チーズ	95.2	98.6	100.9	100.0	98.1	92.1	98.6	98.6	105.0	104.5	105.0	105.0	0.0%	5.5%
バター	98.8	99.0	99.5	100.0	99.8	99.7	99.7	99.7	99.3	99.3	99.3	99.0	-0.3%	-0.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）
- 2022年8月号（7月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）1～4月の牛肉輸出量、中国と台湾向けが大幅に増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002301.html

（豪州）牛群再構築は継続も、肉牛取引価格は大幅下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002313.html

◆豚肉

（米国）豚肉小売価格の上昇により豚肉需要減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002314.html

（カナダ）1～4月の豚肉輸出量、米国向けが好調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002315.html

（EU）22年3月の豚肉生産量、前年同月比7.4%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002316.html

（中国）豚肉価格は上昇に転じるもいまだ低水準で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002317.html

◆鶏肉

（タイ）2022年に入り鶏肉価格は引き続き高値で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002318.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）生乳取引価格は上昇傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002326.html

（豪州）乳価は好調も、生乳生産量は低迷

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002319.html

（NZ）2021/22年度の生乳生産量、前年度よりやや減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002320.html

◆飼料穀物

（世界）2022/23年度の世界のトウモロコシ、期末在庫は前年度並みの見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002303.html

（世界）南米での生産回復などから大豆の期末在庫は大幅増、1億トン台に回復

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002321.html

（米国）2022/23年度の米国トウモロコシ、在庫率は9%台の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002322.html

（ブラジル）2021/22年度トウモロコシ生産量、前年度比3割増の見込み

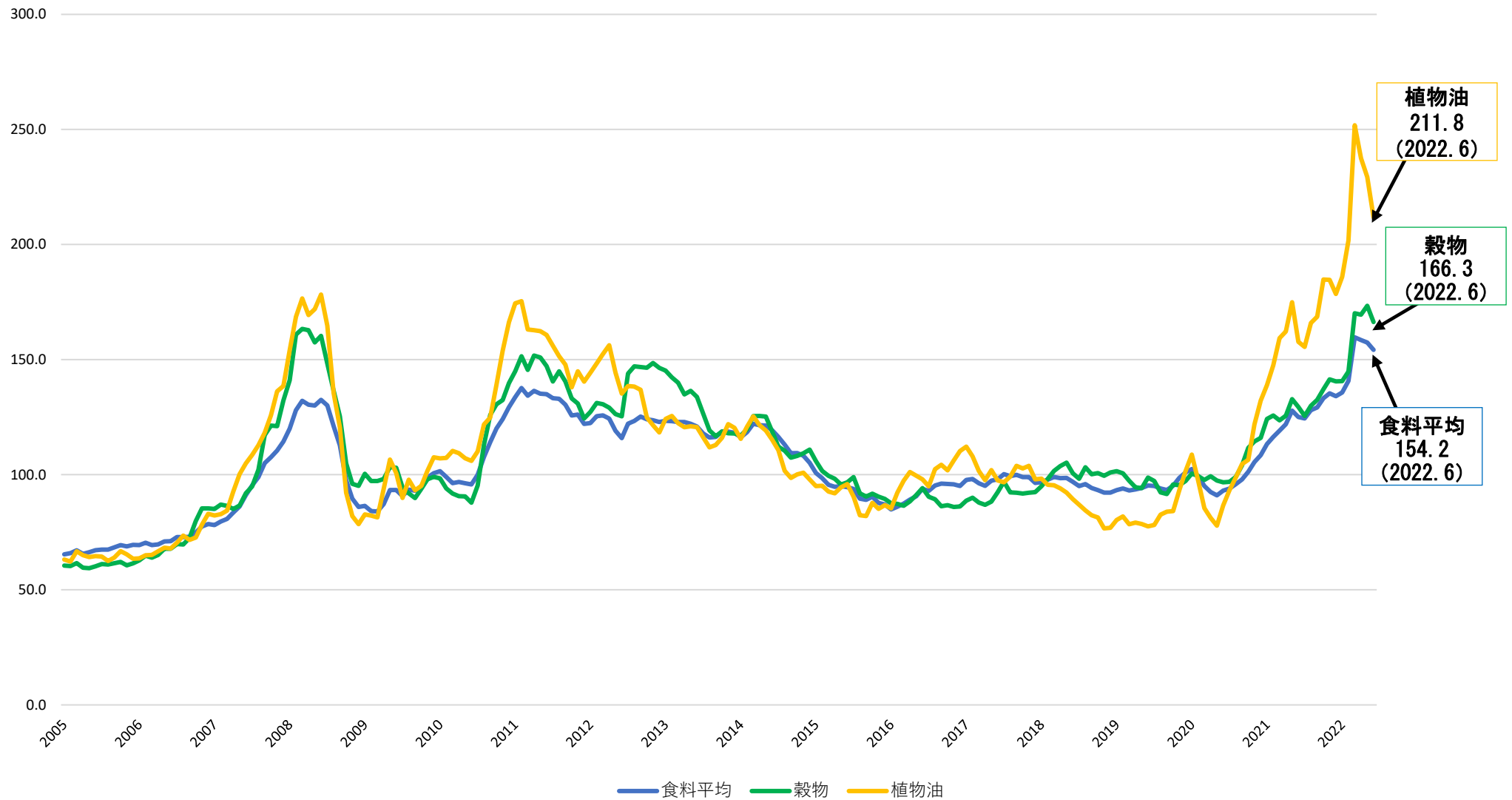
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002323.html

（中国）トウモロコシ、生産量は前年度並みも2億7000万トン台を維持

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002324.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2022.7)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・米国、カナダ等で上方修正も、ウクライナ、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

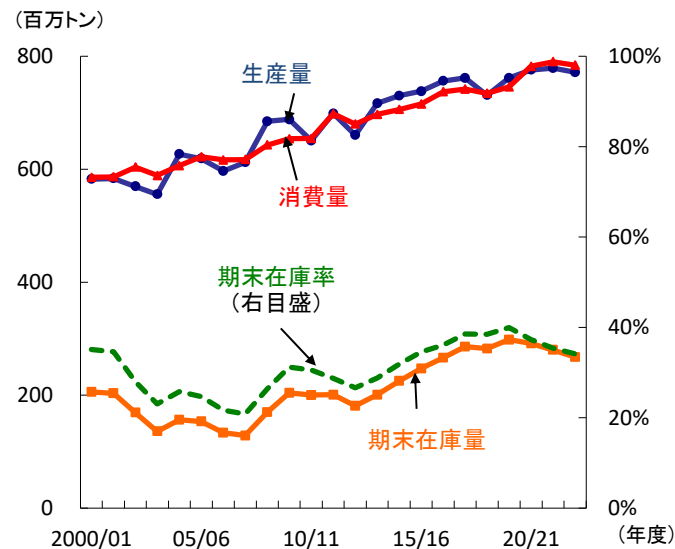
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

- ・パキスタン等で上方修正も、ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・EU 等で下方修正も、カナダ、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2022. 7. 12) をもとに農林水産省にて作成

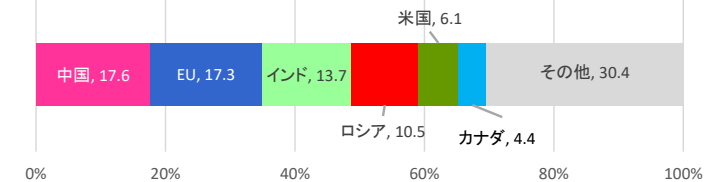
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

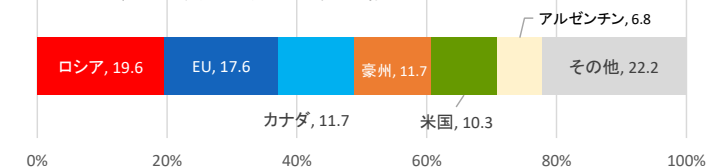
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	775.7	779.0	771.6	▲ 1.8	▲ 0.9
消 費 量	782.3	790.5	784.2	▲ 1.8	▲ 0.8
うち飼料用	158.0	161.0	151.3	▲ 1.8	▲ 6.0
輸 出 量	203.3	200.1	205.5	0.9	2.7
輸 入 量	195.4	196.5	202.7	1.3	3.2
期末在庫量	291.6	280.1	267.5	0.7	▲ 4.5
期末在庫率	37.3%	35.4%	34.1%	0.2	▲ 1.3

資料:USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (12 July 2022)

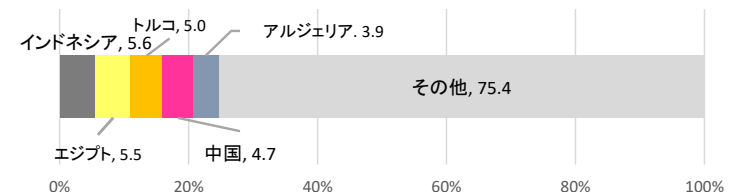
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(771.6百万トン) (単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(205.5百万トン) (単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(202.7百万トン) (単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は冬小麦が減少するものの春小麦が回復し前年度を上回る

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測に比べ1.2百万トン上方修正され、前年度に比べると8.2%増の48.5百万トンの見込み。

前年度に比べると、冬小麦は干ばつの影響による収穫面積と単収の減少から32.7百万トン(前年度34.8百万トン)と6.0%減少。一方、春小麦及びデュラム小麦は、収穫面積と単収の増加から前年度の干ばつによる減産から回復し、それぞれ13.7百万トン(同9.0百万トン、前年度対比52%増)、2.1百万トン(同1.0百万トン、同約2倍増)の見込み。

州別の冬小麦の生産状況は、ハード・レッド・ウインター(HRW)の産地である中央プレーンズのカンザス州、オクラホマ州では厳しい干ばつの影響で単収が減少したため、それぞれの生産量が前年度を26.6%、36.6%下回った。またホワイト小麦(WW)の産地である北部のワシントン州、オレゴン州等では前年度からの干ばつが緩和し単収が増加したため、生産量がそれぞれ同84.1%、46.5%上回った。なお、ノースダコタ州では史上最高の単収となる見込み。

「Crop Progress」(2022.7.18)によれば、冬小麦の収穫が進展しているものの、収穫進捗率は70%と、前年度同期及び5年平均の71%を下回った。

州別には、プレーンズ中央部のカンザス州で収穫がほぼ終了、オクラホマ州で終了した一方、米国北部のワシントン州、オレゴン州等では収穫が開始されたばかりである。他方、プレーンズ北部の雨がちな天候から遅れたミネソタ州、ノースダコタ州の春小麦の播種は、6月の数週間で急速に進展した。春小麦の出穂が進展しているものの、出穂進捗率は68%と前年度同期91%、5年平均90%を下回っている。また、春小麦の作柄評価(良からやや良の割合)は71%と、干ばつの影響を受けた前年度同期(11%)を60ポイント上回っている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は生産量の引き上げと輸出価格の低下による輸出競争力の上昇から、前月予測から0.7百万トン上方修正され21.8百万トンとなるものの、2016/17年度以降最低の見込み。7月8日時点の輸出価格(FOB:HRW)は、播種面積が若干下方修正されたものの、冬小麦の急速な収穫の進展から388ドル/トンと、例外的な高価格となった6月8日の483ドル/トンから低下した。

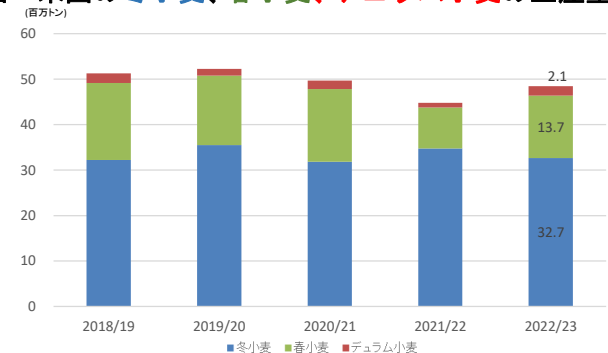
小麦一米国 (冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (予測値)	2022年6月～23年5月 前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	49.8	44.8	48.5	1.2	8.2
消 費 量	30.5	30.5	30.3	0.1	▲ 0.9
うち飼料用	2.6	2.7	2.2	-	▲ 19.9
輸 出 量	27.0	21.9	21.8	0.7	▲ 0.5
輸 入 量	2.7	2.6	3.0	▲ 0.3	15.4
期末在庫量	23.0	18.0	17.4	0.3	▲ 3.2
期末在庫率	40.0%	34.3%	33.4%	0.2	▲ 0.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.04	15.23	0.23	1.3
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.18	0.03	6.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(12 July 2022)

図 米国の冬小麦、春小麦、デュラム小麦の生産量の推移



資料: USDA「Crop production」(2019.4 2020.4 2021.4 2022.7)

表 米国の小麦輸出先国別輸出品(輸出検証高)

(万トン)

2022年6月			2022年1月～6月		
国名	検証高	シェア(%)	国名	累積検証高	シェア(%)
メキシコ	26.5	21.6	メキシコ	187.2	20.1
フィリピン	19.8	16.2	フィリピン	125.6	13.5
日本	8.3	6.8	日本	111.6	12.0
ナイジェリア	7.6	6.2	ナイジェリア	64.7	6.9
エチオピア	7.2	5.9	韓国	27.8	3.0
その他	69.4	56.6	その他	415.8	44.6
合計	122.5	100.0	合計	932.8	100.0

注1. 6月の輸出検証高は、6月9、16、23、30日の合計値

注2. 2021年累積輸出検証高は、2022年1月6日～6月30日の合計

資料: USDA Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals (2022年7月8日)より作成。

＜ カナダ ＞ 干ばつ被害から回復し、生産量は前年度に比べ5割以上増加

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2022.7.21)によれば、2022/23年度の小麦全体の生産量は、前月予測から0.6百万トン上方修正され、33.7百万トンの見込み。カナダ西部の干ばつにより減少した2021/22年度に比べ、播種面積と単収(例年の水準を仮定)の増加から、55.7%増加する見込み(過去5年平均対比1.1%増)。このうち、普通小麦は、前月予測から0.1百万トン上方修正され28.2百万トン(前年度対比48.6%増、過去5年平均対比1.1%増)。デュラム小麦は、前月予測から0.1百万トン下方修正され5.5百万トン(同183.3%、同1.0%増)。

カナダ統計局「Principal field crop areas ,June 2022」(2022.7.5)によれば、2022/23年度の播種面積は、前年度に比べ菜種、大麦、大豆等が減少し、小麦、とうもろこしが増加した。

同年度の小麦全体の播種面積は、世界需要の強さと高水準な小麦価格から、前年度に比べ8.7%増加し、ここ10年間で最高の10.28百万ヘクタールの見込み。種類別には、春小麦が同10.5%増加の7.36百万ヘクタール、カナダ東部の州で栽培される冬小麦は同12.7%減少し、0.49百万ヘクタールの見込み。一方、デュラム小麦は同8.6%増加の2.43百万ヘクタール。主産地の州別(全体)には、サスカチュワン州で同10.4%増加の5.34百万ヘクタール、アルバータ州で同9.6%増加の3.08百万ヘクタール、マニトバ州で同12.1%増の1.29百万ヘクタール。

USDAによれば、サスカチュワン州の西部の大部分では乾燥天候が続く作物に影響を与えている。一方、同州東部とマニトバ州では、降雨で前年度の干ばつで生じた土壌水分不足が改善したものの、播種が遅れた。アルバータ州では6月の降雨で土壌水分が補給され、例年並みの生育進捗となった。

【貿易情報・その他】AAFCによれば、2022/23年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から0.2百万トン上方修正され、前年度に比べ51.4%増加の22.4百万トン。そのうち、普通小麦は前月予測から0.2百万トン上方修正され、18.0百万トンの見込みで、輸出余力の増加や、世界の強い需要から前年度に比べ45.2%増加。デュラム小麦は前月予測からの変更はなく4.4百万トンで、天候により不作となった欧州や北アフリカ等の需要から前年度に比べ83.3%増加。カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission)によれば、2022年5月の輸出量は普通小麦が102.1万トン、デュラム小麦は25.1万トンの計127.2万トンで、輸出先国は、普通小麦はペルー(12.8%)、日本(9.7%)、インドネシア(9.3%)、デュラム小麦は、モロッコ(31.8%)、アルジェリア(23.8%)、イタリア(15.1%)の順。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	35.2	21.7	34.0 (33.7)	1.0	57.0
消 費 量	9.1	9.5	9.1 (9.4)	-	▲ 4.2
うち飼料用	4.2	4.5	4.0 (5.0)	-	▲ 11.1
輸 出 量	26.4	15.0	25.0 (22.4)	1.0	66.7
輸 入 量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	-
期末在庫量	5.7	3.4	3.9 (5.7)	0.5	14.6
期末在庫率	15.9%	14.0%	11.5% (17.9%)	1.2	▲ 2.5

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.02	9.25	10.00 (10.14)	0.30	8.1
単収(t/ha)	3.51	2.34	3.40 (3.33)	-	45.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 July 2022)

図 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の生産量の推移

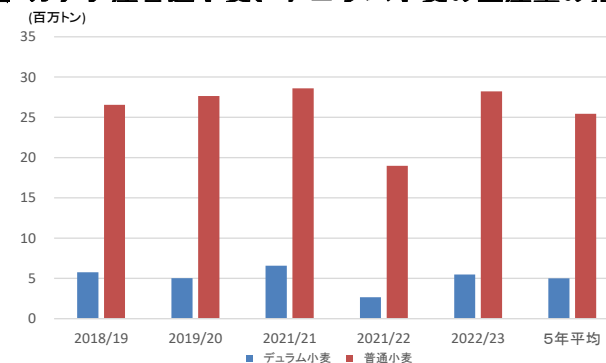
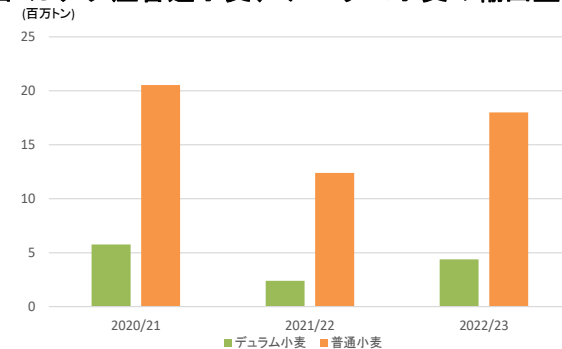


図 カナダ産普通小麦、デュラム小麦の輸出量の推移



資料：AAFC「Outlook for Principal Field Crop」(2022.7.21)のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ 豪州 ＞ 生産量は史上最高の前年度を 17.4%下回るも 30.0 百万トンの見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は前月予測からの変更はなく、30.0 百万トンの見込み。史上最高となった前年度に比べ 17.4%減少も、過去 5 年平均を 22.3%上回る。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2022.6.7)によれば、2022/23 年度の実産量は、播種面積が前年度より 1 %増加の 13.2 百万ヘクタールとなることから、30.3 百万トンと 10 年平均を 22%上回り、史上第 4 位となる見込み。主要生産州であるニュー・サウス・ウェールズ州(NSW 州)、ウェスタン・オーストラリア州(WA 州)の実産量は、それぞれ、9.9 百万トン(前年度対比 23%減)、10.3 百万トン(同 20%減)の見込み。

GIWA(西オーストラリア州穀物団体)(2022.7.8)によれば、2022/23 年度の WA 州の作付面積は 4.81 百万ヘクタールで、実産量は 10.2 百万トン(前年度 12.9 百万トン)の見込み。6 月は平年に比べ気温が高くなり、前年度より生育が促進された。同月は北部及び中央部の多くの生産地で降雨量が平均以下となり、さらに、例年を上回る日中の気温と強風から土壌水分が減少した。このため、7 月の降雨が生育にとって重要となっている。一方、南部では生育状況は良好である。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は前月予測からの変更はなく、24.0 百万トンと、前年度に比べ 12.7%減少するものの、史上第 3 番目となる。なお、7 月 8 日時点の豪州の輸出価格(FOB)は、貿易年度末に向け輸出ペースが減速したため、6 月 10 日時点の 455 ドル/トンから 403 ドル/トンに低下した。

豪州統計局によれば、2022 年 5 月の輸出量は 2.4 百万トンと、前月(2.7 百万トン)に比べ減少。また、2022 年 1 月から 5 月までの輸出量は 12.9 百万トン。輸出先国は、中国(20.2%)、インドネシア(12.1%)、フィリピン(11.6%)、ベトナム(10.7%)の順で、これらのアジア諸国への輸出量計が全体の約 55%を占める。現地情報会社によれば、ロシアによるウクライナ侵攻等の影響に関しては、これまで安価な黒海諸国産を輸入していた資金力の弱い国にとっては豪州産の価格水準は高い状況で、豪州産小麦への需要は、豪州と距離的に近く輸送費用の面で有利なアジアを中心に堅調に推移する見込み。また、前年度の北米産小麦の減産やカナダ産菜種の不作により、豪州産穀物等の需要が高まっており、輸出施設使用枠を含む穀物等輸出のサプライチェーンの状況や豪州産穀物等の作柄について引き続き注視が必要。

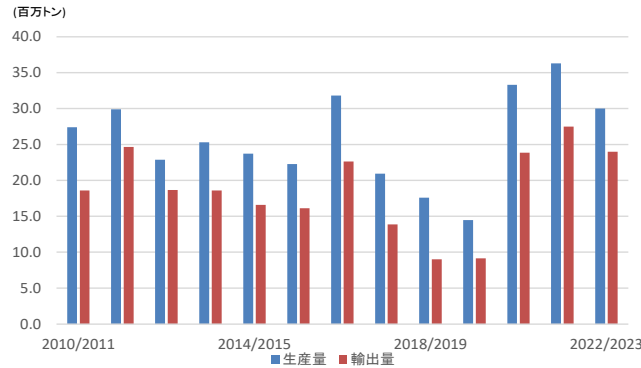
小麦－豪州 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	33.3	36.3	30.0 (30.6)	-	▲ 17.4
消 費 量	8.0	8.5	7.6 (8.8)	-	▲ 11.2
うち飼料用	4.5	5.0	4.0 (5.0)	-	▲ 20.0
輸 出 量	23.9	27.5	24.0 (24.7)	-	▲ 12.7
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.4)	-	-
期末在庫量	4.3	4.8	3.5 (3.9)	-	▲ 28.0
期末在庫率	13.6%	13.4%	11.0% (11.7%)	-	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	12.90	13.00	13.20 (13.2)	-	1.5
単収(t/ha)	2.58	2.79	2.27 (2.32)	-	▲ 18.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC「Grain Market Report」(23 June 2022)

図 豪州産小麦の実産量、輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2022.7.12)をもとに農林水産省にて作成

表 豪州産小麦の輸出先国別輸出量

2022年5月			2022年1月～5月		
国名	輸出量(万トン)	シェア(%)	国名	累積輸出量(万トン)	シェア(%)
中国	40.5	16.8	中国	261.3	20.2
ベトナム	31.5	13.0	インドネシア	156.3	12.1
インドネシア	28.5	11.8	フィリピン	149.7	11.6
スーダン	24.7	10.2	ベトナム	137.8	10.7
イエメン	17.7	7.3	韓国	87.2	6.7
その他	98.7	40.9	その他	501.8	38.8
合計	241.5	100.0	合計	1,294.1	100.0

資料:豪州統計局のデータをもとに農林水産省にて作成

＜ EU27+英国 ＞EU27の生産量は前月予測に比べ5.8百万トン下方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2022.6.30)によれば、EU27の2022/23年度の生産量は、前月予測に比べ5.8百万トン下方修正され、前年度に比べ4.1%減少の133.3百万トンの見込み。そのうち、普通小麦は、イタリア等で上方修正されたものの、ルーマニア、フランス、スペイン等で下方修正されたため、前月予測に比べ5.4百万トン下方修正され、126.0百万トン。また、デュラム小麦はギリシャ等で上方修正されたものの、イタリア等で下方修正されたことから同0.4百万トン下方修正され7.2百万トン。また、USDAによれば、英国の生産量は前月予測からの変更はなく、14.6百万トン。

USDAによれば、ヨーロッパの多くの国で収穫が進行中であるが、バルト海沿岸のラトビア、リトアニアや、スウェーデン、デンマークでは降雨が十分にあったものの、フランス、ドイツ、イタリア等では乾燥状態となった。フランスでは6月に一時降雨があり、長期間の干ばつ状態は緩和されたものの、単収の改善には遅すぎた。更に、フランス、スペインでは乾燥に加え、気温が40度以上に達し更に作物に影響を与えた。ドイツでは6月に干ばつが強まり、成熟に影響を与え単収を引き下げた。イタリアでは、特に北部の主要生産地のポー川流域で降雨量が例年の半分以下の状況。

フランスアグリメール(2022.7.4)によれば、フランスでは収穫期を迎えており、収穫進捗率は15%と前年度同時期(1%)を上回っている。また、フランス産小麦の生育状況を示す「とても良いから良い」の割合は、乾燥天候の影響で、普通小麦は前月の66%から63%に低下し、前年度同期の79%を下回っている。また、デュラム小麦も前月の62%から56%に低下し、前年度同期の66%を下回っている。なお、収穫が進展していることから、乾燥の影響はある程度免れたと見られている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度のEU27の輸出量は、生産量の引き下げから前月予測から0.5百万トン下方修正され35.5百万トンとなるものの、前年度に比べ20.9%増加する見込み。また、輸出価格(FOB)は、冬小麦の収穫の進行とユーロ安から前月から62ドル/トン低下し357ドル/トンとなり、主要輸出6ヶ国の中で最も競争力がある。

なお、欧州委員会によれば、4月の輸出量は、普通小麦が2.1百万トン、デュラム小麦が0.1百万トン。輸出先国は、普通小麦がアルジェリア(29.5%)、モロッコ(16.8%)、スーダン(9.8%)、デュラム小麦がチュニジア(79.6%)、コートジボワール(5.3%)、リビア(3.9%)の順であり、ともにアフリカ諸国が中心となっている。

小麦－EU27+英国（冬小麦を主に栽培）

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	136.4	152.4	148.7 (152.0)	▲ 2.0	▲ 2.4
消費量	118.2	125.1	123.1 (121.0)	▲ 1.0	▲ 1.6
うち飼料用	48.5	53.9	51.1 (48.8)	▲ 1.0	▲ 5.1
輸 出 量	30.2	30.2	36.5 (35.3)	▲ 0.5	20.9
輸 入 量	8.6	6.8	7.5 (7.2)	0.5	10.3
期末在庫量	12.1	16.1	12.7 (14.0)	-	▲ 21.2
期末在庫率	8.2%	10.3%	7.9% (9.0%)	▲ 0.1	▲ 2.4

(参考)

収穫面積(百万ha)	22.98	26.02	25.90 (25.61)	-	▲ 0.5
単収(t/ha)	5.93	5.86	5.74 (5.94)	▲ 0.09	▲ 2.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)
表内及び()内のデータはEU27ヶ国+英国のデータ

図 フランス、ドイツの小麦生産量の推移

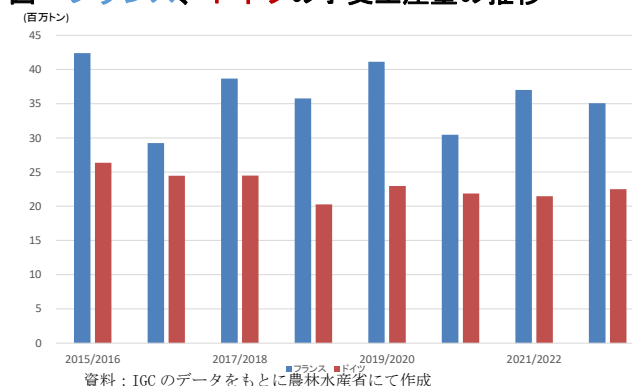


写真 フランス小麦圃場 イル・ド・フランス地域(7月8日)



当該圃場では、小麦の生育は良く、例年と比較して2週間程度早く進んでいる。
5月から6月にかけて深刻な降雨不足だったが、土壌水分が保持されており、生育への被害はない。
収穫は7月下旬予定。

< 中国 > 冬小麦は収穫が終了。生産量は対前年度 0.4%増の 131.9 百万トン

【生育・生産状況】中国糧油情報センター(2022.7.15)によれば、2022/23 年度の実産量は、単収が引き下げられたことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、前年度に比べ 1.1%増加の 138.4 百万トンの見込み。作期別には、冬小麦は前月予測に比べ、1.0 百万トン下方修正され 131.9 百万トン(対前年度 0.4%増)、春小麦が同 0.9 百万トン上方修正され 6.5 百万トン(同 17.7%増)の見込み。

なお、省別の生産量のシェアは、冬小麦が、河南省(28.5%)、山東省(20.0%)、安徽省(12.4%)、河北省(10.2%)。一方、春小麦は冬小麦に比べ少ないものの、新疆地区、内モンゴル地区で生産されている。

中国中央气象台(2022.7.4)によれば、2022/23 年度の冬小麦は中国全土で収穫が終了した。一方、春小麦は、新疆地区で出穂から乳熟期、内モンゴル地区で開花期から乳熟期に入っている。

なお、今年度の冬小麦は、秋に洪水に見舞われ播種に遅れが発生し、その影響が懸念されたものの、多くの生産地で増産傾向となった。中国糧油情報センターによれば、生育が改善し豊作となった主要因は、①天候に恵まれたこと、②殺虫剤、殺菌剤、植物生長調整剤の散布、専門家による技術支援等で播種遅れの影響を積極的に減らしたこと等である。

また、全体的な小麦生産量向上について、①政府最低買付価格を上げる等の政策支援強化による、農家の栽培意欲の向上②各省、市、県の長の責任を問うことで生産量確保を期す省長責任制の確実な実施、③良好な土壌で、干ばつ・水害に強く、収穫等の機械化ができる農地開発の推進等の施策を実施。

【貿易情報・その他】中国糧油情報センターによれば、2022/23 年度の消費量は前年度(146.4 百万トン)に比べ 12.8%減少の 127.8 百万トンで、そのうち飼料等用はとうもろこしとの価格の逆転が解消されたため、同 35.8%減少の 34.0 百万トン。輸入量は前月からの変更はなく、前年度(9.6 百万トン)から 18.4%減少の 7.8 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2022 年 5 月の輸入量は、前年度同期(78.5 万トン)を 15.0 %下回る 66.7 万トン。また、2022 年 1 月～5 月は、同(459.2 万トン)を 4.3%下回る 439.6 万トン。同期間中の輸入先国は、豪州、フランスで 91.3%を占め、一方前年同期のシェアが 26.2%の米国の輸入実績はほぼない。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022 年 5 月号」によれば、新穀小麦の収穫進展に伴い、市場への出荷量が徐々に増加している一方、新麦の品質が良好で市場売買の割合が高まったため、国内卸売価格の変動は大きくなると見られる。

小麦—中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	135.0	(135.0)	-	▲ 1.4
消 費 量	150.0	148.0	144.0	(141.0)	-	▲ 2.7
うち飼料用	40.0	35.0	30.0	(26.5)	-	▲ 14.3
輸 出 量	0.8	0.9	0.9	(1.0)	-	5.9
輸 入 量	10.6	9.7	9.5	(9.4)	-	▲ 2.1
期末在庫量	144.1	141.9	141.5	(135.5)	-	▲ 0.3
期末在庫率	95.6%	95.3%	97.7%	(95.4%)	-	2.3
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.40	(23.5)	-	▲ 0.7
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.77	(5.74)	-	▲ 0.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

図 中国産小麦の生産量、収穫面積、単収の推移

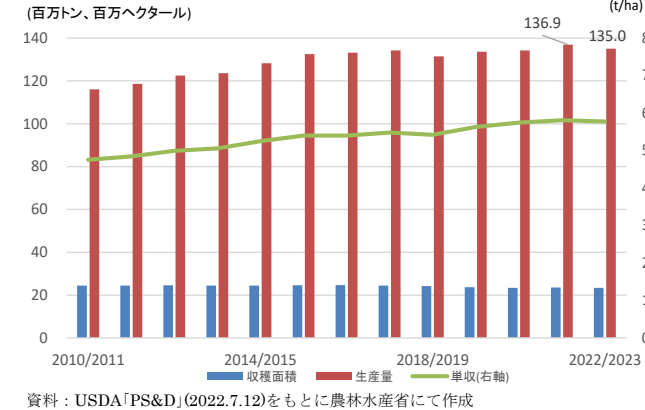


表 中国の小麦輸入先国

(2022 年 5 月、2022 年 1 月～2022 年 5 月、2021 年 1 月～2021 年 5 月)

(輸出量万トン、シェア%)							
2022年5月			2022年1月～2022年5月			2021年1月～2021年5月	
国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量	シェア	国 名	輸入量
豪州	47.8	71.6	豪州	256.7	58.4	カナダ	127.5
フランス	11.6	17.3	フランス	144.5	32.9	豪州	124.5
カナダ	6.9	10.3	カナダ	36.9	8.4	米国	120.3
カザフスタン	0.5	0.8	カザフスタン	1.3	0.3	フランス	65.4
ロシア	0.0	0.0	ロシア	0.2	0.0	カザフスタン	12.0
—	—	—	米国	0.0	0.0	リトアニア	6.6
その他	0.0	0	その他	—	—	その他	2.9
計	66.7	100	計	439.6	100.0	計	459.2

資料：中国海関統計(2022. 6. 20)をもとに農林水産省にて作成

＜ ロシア ＞ 輸出関税がルーブル建てに変更され、関税額は実質低下

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測から0.5百万トン上方修正され、前年度に比べ8.4%増加の81.5百万トンの見込み。

作期別の生産量は、冬小麦は前月予測からの変更はなく59.5百万トン(前年度52.2百万トン)、春小麦は収穫面積が引き上げられたことから、前月予測から0.5百万トン上方修正され22.0百万トン(同23.0百万トン)の見込み。前年度に比べ、冬小麦は冬期の枯死も少なく生育状況が良好であったため14%増加した一方、春小麦は4.2%減少した。

ロシア気象センターによれば、2022/23年度の冬小麦の生育状況は、ロシア・ヨーロッパ部では北部で開花期から登熟期で作柄は概ね良好、南部では概ね黄熟期となり一部で収穫が開始されている。また春小麦はロシア・アジア部では茎立期から開花期。同部では、シベリア地区の一部で降雨不足であるが、全体として作柄は並から良好となっている。

ロシア農業省によれば、冬小麦の収穫は南部のクラスノダール地方等から開始され、収穫された小麦は7月12日時点で12.6百万トンである。他方、同省の速報値によれば、6月24日時点の春小麦の播種面積は、播種予定面積(13.01百万ヘクタール)の97.9%に当たる12.73百万ヘクタールに達しほぼ終了した。前年度同期(13.10百万ヘクタール)に比べると2.8%減少している。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ21.2%増加の40.0百万トンの見込み。

7月1日にロシア政府は小麦等の輸出関税額の計算式の修正に関する政府決定文書を公表。これにより、可変関税額がドル建てではなくルーブル建てとなった。この計算方法による便宜的なドル換算による輸出関税額は現在のルーブル高では下がる。このため、7月中旬時点の便宜的なドル建ての関税額は90.5ドル/トンとなり6月より低下し、輸出に追い風となっている。

現地情報会社によれば、2021/22年度(2021年7月～2022年6月)の小麦の輸出量(速報値)は32.6百万トン。6月の輸出量は前年度同時期に比べ55.6%減の1.1百万トン。

輸出先国は、トルコ(31.8%)、エジプト(14.4%)、イラン(12.0%)の順で中東、アフリカ諸国向けが多い。穀物輸出者同盟によれば、輸出枠(2022年2月～6月)の消化率は90%以上に達したが、対ロシア制裁の影響(決済、保険等の問題)から終盤に輸出量が落ちこんだ。

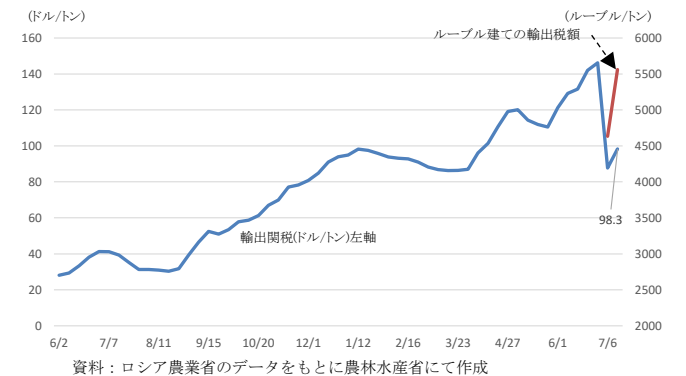
小麦－ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培) (単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	85.4	75.2	81.5 (84.7)	0.5	8.4
消費量	42.5	41.8	42.3 (44.3)	-	1.2
うち飼料用	19.0	18.5	19.0 (19.4)	-	2.7
輸 出 量	39.1	33.0	40.0 (37.1)	-	21.2
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.2)	-	-
期末在庫量	11.4	12.1	11.6 (14.7)	0.5	▲ 3.7
期末在庫率	13.9%	16.2%	14.2% (18.0%)	0.6	▲ 2.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	27.80 (28.2)	0.30	0.6
単収(t/ha)	2.98	2.72	2.93 (3.00)	▲ 0.02	7.7

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

図:ロシア産小麦の輸出関税額とその推移 (ドル/トン、ルーブル/トン) (2021年6月～2022年7月)

2022年7月6日以降のドル建ての値は、発表日前の5営業日平均レートから算出した便宜的な数値



《輸出関税額の変更(ルーブル建て)と計算方法》

小麦の関税が発生する価格が200ドル/トンから1万5000ドル/トンに変更になる。これは1年前の可変関税導入時の基準となる為替レートが75ドル/ドルとされていたため。

税額は、第1段階はこれまでと同様に1万5000ドルの超過分の70%、第2段階は2万8125ドル(375ドル/トン)の超過分の80%、第3段階は3万ドル(400ドル/トン)の超過分の90%であり、ルーブル換算であること以外の変更はない。

試算では、為替レートが75ドル/ドルよりルーブル高に振れている場合、関税額は旧方式より低くなり、ルーブル安に振れている場合は反対に高くなる。

現在はルーブル高なので、便宜的にドル建てで算出すると、関税額は実質的に下がる。

＜ウクライナ＞ 小麦の生産量は、前月予測から2.0百万トン下方修正の19.5百万トン

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、ロシアの侵攻による収穫面積の引き下げから、前月予測から2.0百万トン下方修正され、19.5百万トンの見込み。前年度に比べ、ロシアの侵攻により、収穫面積と単収が減少し、生産量は史上最高だった前年度(33.0百万トン)に比べ40.9%減少する見込み。

ウクライナ国家統計局(2022.6.16)によれば、2022/23年度の小麦の播種面積は6.73百万ヘクタールで、冬小麦が6.54百万ヘクタール(クリミア等を含まず、現在の紛争地域のデータを含む)、春小麦が0.19百万ヘクタール。6月は全国的に気温が高く、特に西部地域では気温上昇により登熟が早まり、冬・春小麦の生育は例年に比べ2～3週間早まっている。6月時点の生育状況は、冬小麦は大部分の地域で乳熟期から黄熟期となり、オデッサ州では収穫が開始された。また、春小麦は大部分の地域で開花期から乳熟期の段階となっている。

ウクライナ穀物協会によれば、2022/23年度の小麦生産量は20.8百万トンの見込み。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ46.8%減少の10.0百万トンの見込み。また、現地情報会社によれば、当初22.5百万トンと予測された2021/22年度の輸出量は、ロシアによるウクライナ侵攻により18.7百万トンと17%減少するものの、前年度に比べ13%増加する見込み。6月の小麦輸出量は13.8万トンであった。例年、小麦輸出量は9月にピークを迎え年度末に向かうにつれ減少するが、ロシアのウクライナ侵攻による黒海の港湾の閉鎖等により、2022年3月から大幅に減少した。

輸送手段については、ウクライナ鉄道(2022.7.7)によれば、6月の鉄道での穀物全体の輸出量は、5月(80.7万トン)と同程度の80.5万トン。またウクライナ海洋港湾管理局によれば、ドナウ川経由の穀物輸出量は、4月は80万トン、5月は130万トンになり、6月末には150万トンになる見通し。

今後のウクライナ産穀物の輸出再開に向け、7月13日、ウクライナ、ロシア、トルコ、国連の代表者が会談をし、関係国が参加する枠組みの設置や輸出航路の安全確保で大筋合意した。7月22日には、輸出航路の安全確保で合意し、今後、オデーサ港など3港からの輸出が再開されることになっている。穀物輸出再開の合意がされても、ロシアの侵攻により穀物輸出にかかるインフラが被害を受けているため、実際の穀物の輸出再開までには相当程度の時間がかかると見られている。

小麦－ウクライナ (主に冬小麦を栽培) (単位:百万トン)

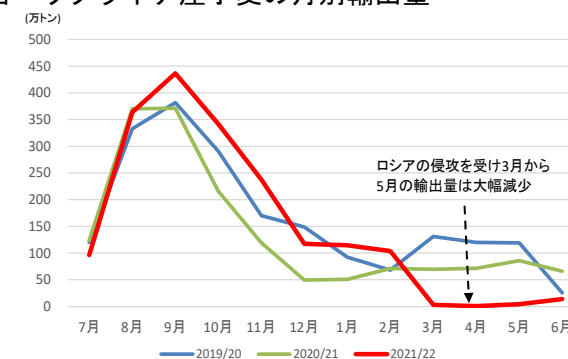
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	25.4	33.0	19.5 (19.4)	▲ 2.0	▲ 40.9
消 費 量	8.7	10.0	10.2 (8.3)	▲ 1.0	2.0
うち飼料用	2.6	4.0	5.0 (2.8)	▲ 1.0	25.0
輸 出 量	16.9	18.8	10.0 (10.0)	-	▲ 46.8
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	▲ 23.1
期末在庫量	1.5	5.8	5.2 (8.3)	▲ 0.8	▲ 10.3
期末在庫率	5.9%	20.3%	25.9% (45.3%)	▲ 2.4	5.7

(参考)

収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.25 (5.03)	▲ 0.60	▲ 29.1
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.71 (3.86)	0.03	▲ 16.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

図 ウクライナ産小麦の月別輸出量



資料: ウクライナ税関統計、農業政策食料省のデータをもとに農林水産省にて作成

写真: 登熟期を迎えた冬小麦(ポルタヴァ州)



播種面積が1000haを超えた冬小麦は、現在、登熟期を迎えている。今のところ、生育状況は良好。肥料価格が倍以上に高騰し、現状でも入手も困難なため、来年は、穀物への施肥基準量は大幅に減少する見込み。また、燃料の価格上昇も考慮する必要がある。

(2022年7月10日)

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↑

・ロシア、EU 等で下方修正も、米国等で上方修正され、前月から上方修正された。

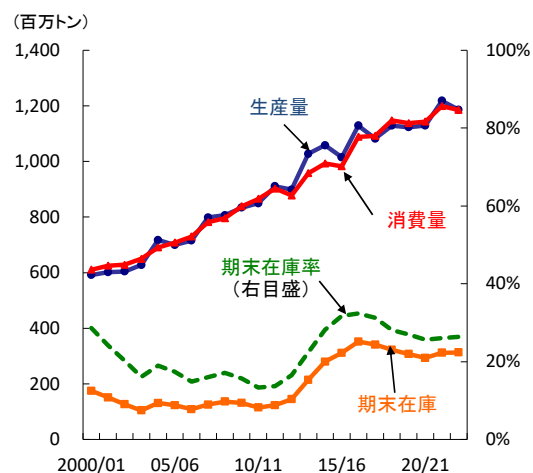
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・フィリピン等で上方修正も、ロシア、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出货量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・パラグアイで上方修正も、ロシアで下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」(2022. 7. 12)をもとに農林水産省にて作成

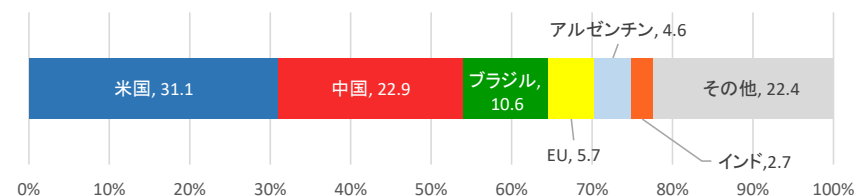
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

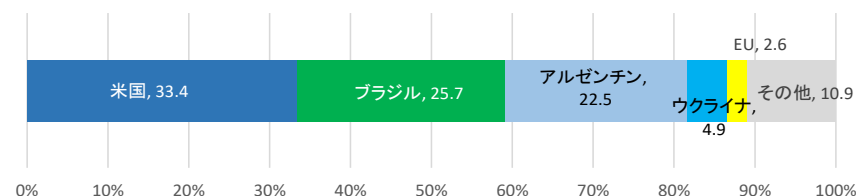
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.0	1,217.9	1,185.9	0.1	▲ 2.6
消費量	1,143.2	1,198.9	1,185.2	▲ 1.0	▲ 1.1
うち飼料用	723.4	746.3	747.2	▲ 0.7	0.1
輸出货量	182.8	199.2	182.6	▲ 0.1	▲ 8.4
輸入量	185.2	179.2	177.1	0.4	▲ 1.2
期末在庫量	293.3	312.3	312.9	2.5	0.2
期末在庫率	25.7%	26.0%	26.4%	0.2	0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(12 July 2022)

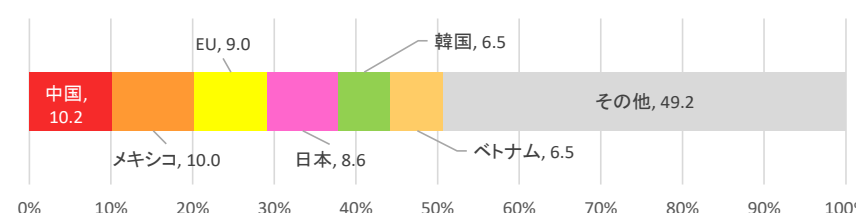
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,185.9百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出货量(182.6百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(177.1百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 生産量は主に収穫面積減少により減産、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、「作付面積調査」（2022.6.30）でミネソタ州やウィスコンシン州などの面積が上方修正されたことから前月予測から 1.1 百万トン上方修正されたものの、前年度より 4.0%減の 368.4 百万トンの見込み。肥料価格高騰の影響から中西部の主要生産州で作付けが肥料の投入量のより少ない大豆等へシフトしたことが要因。

USDA「Crop Progress」（2022.7.18）によれば、主要 18 州におけるシルキング進捗率は 37%と前年度同期（52%）及び過去 5 年平均（48%）より遅れている。ドウ進捗率は 6 %と前年度同期（7 %）及び過去 5 年平均（7 %）より遅れている。作柄評価は、良からやや良が 64%と前年度同期（65%）をやや下回っている。7 月上旬に降雨があったものの、今後、受粉期を迎えるが、受粉期の高温乾燥に注意が必要。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、エタノール用需要が前年度から横ばいの一方、生産量の減少による国内価格の上昇等から飼料用需要が減少することから、前年度より 2.0%減の 309.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少、世界的な価格高騰による需要の抑制、エタノール向け等一定の国内需要があること等から、前年度より 2.0%減の 61.0 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高（2022 年 1 月 6 日～6 月 30 日）は、34.9 百万トンであり、内訳は中国（9.5 百万トン）、メキシコ（8.1 百万トン）、日本（6.8 百万トン）、コロンビア（2.7 百万トン）の順である。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、生産量の上方修正と前年度の飼料・その他消費量の下方修正により前月予測から 1.8 百万トン上方修正されたものの、前年度より 2.7%減の 37.3 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 10.1%で、前年度より低下し、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生 産 量	358.5	383.9	368.4	1.1	▲ 4.0
消 費 量	306.5	315.4	309.1	-	▲ 2.0
うち飼料用	142.2	142.3	135.9	-	▲ 4.5
エタノール用等	127.8	136.5	136.5	-	-
輸 出 量	69.9	62.2	61.0	-	▲ 2.0
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	-	-
期末在庫量	31.4	38.4	37.3	1.8	▲ 2.7
期末在庫率	8.3%	10.2%	10.1%	0.5	▲ 0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	33.31	34.56	33.16	0.10	▲ 4.1
単収(t/ha)	10.76	11.11	11.11	-	-

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（12 July 2022）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出増の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 8.6% 増の 126.0 百万トンで史上最高の見込み。

なお、ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2022.7.7）によれば、2021/22 年度の収穫が終了した夏とうもろこしの生産量は、2020/21 年度比 0.3% 増の 24.8 百万トンの見込み。

一方、主産地で収穫期を迎えた冬とうもろこしの生産量は、生育期にマット・グロッソ州など中西部の主産地では乾燥が続いたものの、パラナ州など南部産地では良好な天候に恵まれ、大幅な増産となり、干ばつ・霜害で減産となった 2020/21 年度に比べ 45.7% 増の 90.9 百万トンの見込み。

夏作・冬作の合計では 2020/21 年度比 32.8% 増の 115.7 百万トンで史上最高の見込み。
（P.23 大豆－ブラジルのクロップカレンダー参照）。

冬とうもろこしの主産地である中西部のマット・グロッソ州で 7 月 15 日現在、収穫率は 85% で前年度同期より 33 ポイント進んでいる。南部のパラナ州で 7 月 11 日現在、収穫率は 20% となっている。収穫最盛期は 8 月まで続く見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 5.5% 増の 77.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.6% 増の 47.0 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～6 月の輸出量は 6.3 百万トンで、前年同期（3.6 百万トン）と比べ 1.7 倍となっている。内訳は、1 位がイラン 1.6 百万トン、2 位がエジプト 1.5 百万トン、3 位が韓国 0.6 百万トン。ロシアのウクライナ侵攻により、輸出が影響を受けており、代替としてブラジル産の上記の中東向け輸出が大幅に増加した。なお、5 月 23 日、ブラジル農務省は中国政府とブラジル産とうもろこしについて検疫問題をクリアし対中輸出の合意に至ったと公表した。

とうもろこし－ブラジル

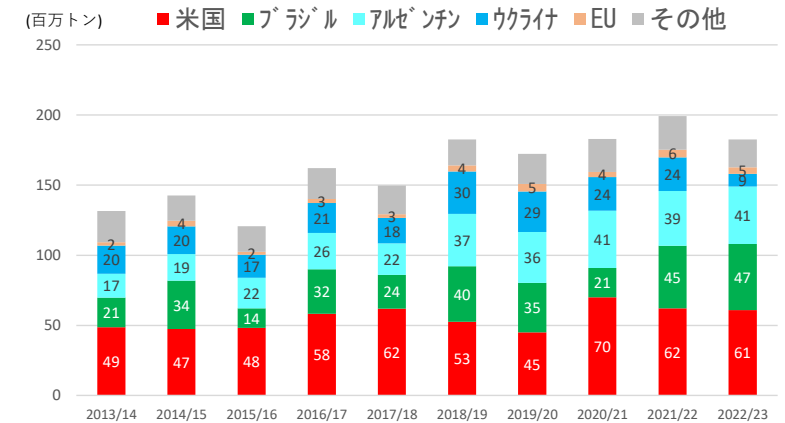
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが 3/4 を占め、夏とうもろこしは 1/4）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	87.0	116.0	126.0	(123.1)	－	8.6
消 費 量	70.0	73.0	77.0	(78.6)	－	5.5
うち飼料用	59.5	62.0	65.5	(56.5)	－	5.6
輸 出 量	21.0	44.5	47.0	(43.6)	－	5.6
輸 入 量	2.9	2.0	1.3	(0.5)	－	▲ 35.0
期末在庫量	4.2	4.7	8.0	(8.5)	－	71.0
期末在庫率	4.6%	4.0%	6.4%	(7.0%)	－	2.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	19.90	21.80	22.70	(21.80)	－	4.1
単収(t/ha)	4.37	5.32	5.55	(5.65)	－	4.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA 「PS&D」(2022.7.12) のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 2021/22 年度、生産量史上最高、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 9 月以降作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加により、前年度より 3.8%増の 55.0 百万トンで史上最高の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2022.7.14）によれば、2021/22 年度の収穫進捗率は 58%で、霜害の影響を受けやすい大豆の収穫作業を優先させたため過去 5 年平均より 12 ポイント遅れている。作柄は良からやや良が 74%と前週（73%）から改善。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加に伴い、前年度より 2.2%増の 14.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より 5.1%増の 41.0 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022 年 1～5 月の輸出量は 14.8 百万トンで、前年同期（13.4 百万トン）より 11.1%増。内訳は、1 位がベトナム 2.2 百万トン、2 位がペルー 1.3 百万トン、3 位が韓国 1.3 百万トン。なお、ロシアのウクライナ侵攻の影響は少なく、従来からの輸出先国への輸出が継続しているとみられる。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、その後継続している。

2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧漁業大臣がとうもろこしと小麦の輸出に関し、輸出上限数量を設定することを表明。7 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2020/21 年度 4,160 万トン、2021/22 年度 3,600 万トンと設定されている。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、() はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	52.0	53.0	55.0	(60.6)	-	3.8
消 費 量	13.5	13.7	14.0	(21.2)	-	2.2
うち飼料用	9.5	9.8	10.0	(16.3)	-	2.0
輸 出 量	40.9	39.0	41.0	(41.0)	-	5.1
輸 入 量	0.0	0.0	0.0	(0.0)	-	-
期末在庫量	1.2	1.5	1.5	(2.5)	-	-
期末在庫率	2.2%	2.8%	2.7%	(4.0%)	-	▲ 0.1
(参考)						
収穫面積(百万ha)	6.55	7.20	7.00	(8.00)	-	▲ 2.8
単収(t/ha)	7.94	7.36	7.86	(7.58)	-	6.8

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

写真：北部サンタフェ州の遅植えとうもろこしの生育風景 (7月1日撮影)

1月上旬に作付けされ、完熟期を迎えている。

収穫作業は7月末～8月上旬を予定。



< 中国 > 生産量減少、消費量史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府補助金による大豆奨励策により作付けが大豆にシフトし、収穫面積が減少することから、前年度より0.6%減の271.0百万トンの見込み。

中国中央气象台週報(2022.7.4)によれば、東北地区の春とうもろこしは6月の日照不足により生育に不利となったものの、おおむね七葉期から節間伸長期に入っている。一方、河南省等の夏とうもろこしは6月の適度な降雨により土壌水分不足が改善し、三葉期から七葉期に入っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より1.4%増の295.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、主要な輸入先であるウクライナの輸出減少に伴い、前年度より21.7%減の18.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～5月の輸入量は11.4百万トンで、前年同期比で2.9%減。内訳は、米国産6.4百万トン(56%)、ウクライナ産4.8百万トン(42%)。

5月23日には、中国政府は、ブラジル産とうもろこしについても検疫問題をクリアし輸入の合意に至ったと公表した。しかし、遺伝子組み換えの承認手続き等に相当時間を要するとみられ、当面は米国産を手当てしている模様である。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年5月号」によると、5月の国内流通価格は、2,940元/トンと前月(2,900元/トン)から上昇した。主な要因は、中国東北地区における新型コロナウイルス感染が効果的に抑制されたことで、主産地の物流は徐々に正常に戻り、加工業者の稼働率の高まりにより取引業者の仕入れと在庫補充の意欲が高まったことである。また、5月の輸入価格は、3,280元/トンと前月(3,220元/トン)から上昇し、国内価格を上回り、内外価格差は拡大している。他の穀物の代替輸入等も含め、今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

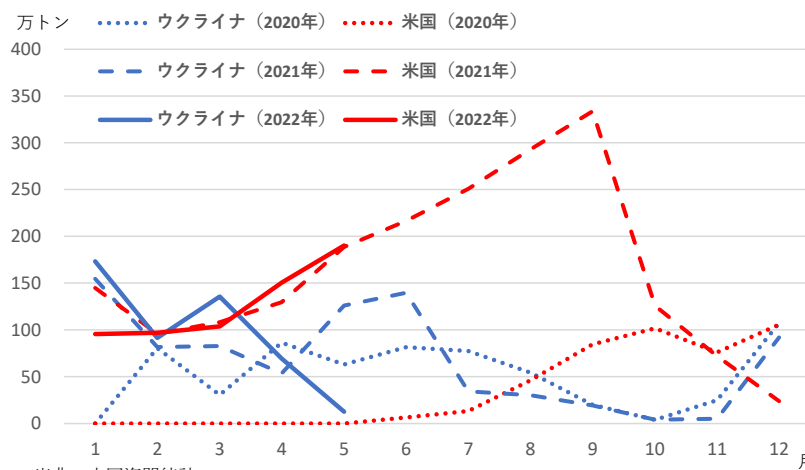
とうもろこしー中国

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	271.0 (273.0)	-	▲ 0.6	
消 費 量	285.0	291.0	295.0 (305.2)	-	1.4	
うち飼料用	203.0	209.0	214.0 (203.0)	-	2.4	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	23.0	18.0 (19.0)	-	▲ 21.7	
期末在庫量	205.7	210.2	204.2 (175.0)	-	▲ 2.9	
期末在庫率	72.2%	72.2%	69.2% (57.3%)	-	▲ 3.0	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.00 (42.50)	-	▲ 0.7	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.30 (6.42)	-	0.2	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC「Grain Market Report」(23 June 2022)

図：中国におけるウクライナ、米国産とうもろこしの輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< ウクライナ > ロシアの侵攻の影響等で生産量・輸出量が大幅に減少見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、ロシアによるウクライナ侵攻の影響で、燃料や肥料等の生産資材不足もあり、史上最高の生産量となった前年度より40.7%減の25.0百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省によれば、2022/23年度の作付面積は4.6百万ヘクタールで前年度(5.5百万ヘクタール)より減少している。

作付けは終了し、6月末時点で子葉形成期にある。作柄はおおむね平年並みから良好だが、西部及び南部の一部では降雨不足により葉の変色などがみられる。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の大幅な減少に伴い、前年度より12.3%減の10.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、ロシアの侵攻以降黒海の港の封鎖が継続していることから、前月予測からの変更はなく、前年度より62.5%減の9.0百万トンの見込み。なお、2021/22年度の輸出は、黒海の港の封鎖により鉄道、トラック、バージを用いたEU経由の輸出しかできないが、欧米諸国の支援もあり輸出拡大の努力を行った。その結果、輸出量は、事前予想を超える5・6月の輸出実績に基づき前月予測から1.0百万トン上方修正され、2020/21年度より0.5%増の24.0百万トンの見込み。

7月5日付けウクライナ農業政策食料省発表によれば、6月の輸出量は101万トンで、前年同月(170万トン)より40.3%減となっているものの、前月(96万トン)より5.7%増。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より78.3%増の12.1百万トンと史上最高の見込み。

今後のウクライナ産穀物の輸出再開に向け、7月13日、ウクライナ、ロシア、トルコ、国連の代表者が会談をし、関係国が参加する枠組みの設置や輸出航路の安全確保で大筋合意した。7月22日には、輸出航路の安全確保で合意し、今後、オデーサ港など3港からの輸出が再開されるとみられる。穀物輸出再開の合意がされても、港湾、物流インフラの破壊状況、機雷の除去等の問題が残っており、実際の穀物の輸出までには相当程度の時間がかかるとみられている。

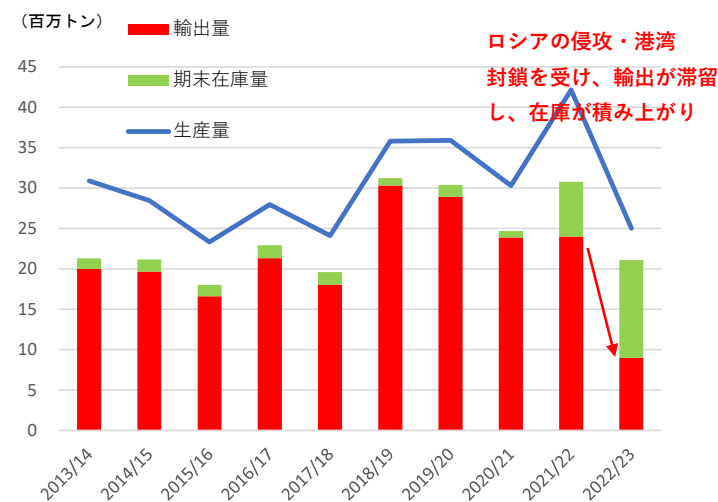
とうもろこしーウクライナ

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	25.0 (25.1)	-	▲ 40.7
消 費 量	7.1	12.2	10.7 (10.7)	-	▲ 12.3
うち飼料用	5.9	11.0	9.5 (5.5)	-	▲ 13.6
輸 出 量	23.9	24.0	9.0 (12.0)	-	▲ 62.5
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	6.8	12.1 (10.3)	-	78.3
期末在庫率	2.7%	18.7%	61.3% (45.4%)	-	42.6
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.50 (4.59)	-	▲ 18.0
単収(t/ha)	5.62	7.68	5.56 (5.47)	-	▲ 27.6

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料: USDA 「PS&D」 (2022.7.12) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

生産量 前年度比 ↑ 2022/23 年度 前月比 ↓

- ・EU、米国等で下方修正され、前月から下方修正されるも、史上最高の見込み。

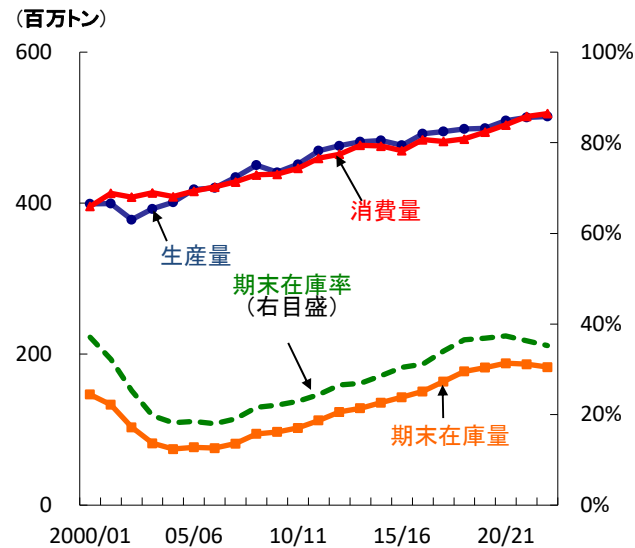
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

- ・フィリピン、ベトナムで上方修正も、パキスタン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

- ・米国で下方修正されたものの、パキスタン、カンボジアで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



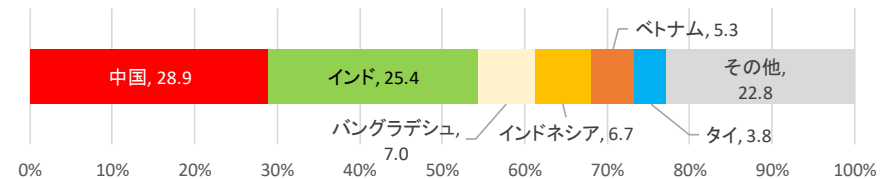
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

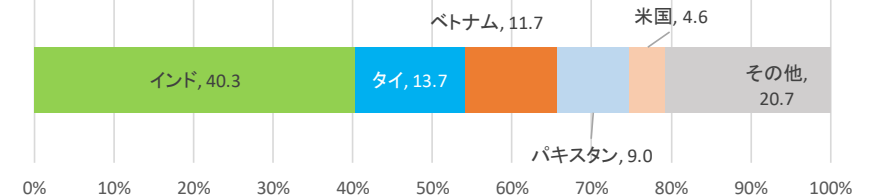
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	513.6	514.8	▲ 0.6	0.2
消 費 量	503.6	514.8	518.6	▲ 0.6	0.7
輸 出 量	50.9	54.1	54.6	0.4	0.9
輸 入 量	46.5	53.3	53.1	0.7	▲ 0.4
期末在庫量	187.9	186.6	182.8	▲ 0.7	▲ 2.1
期末在庫率	37.3%	36.3%	35.2%	▲ 0.1	▲ 1.0

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 July 2022）

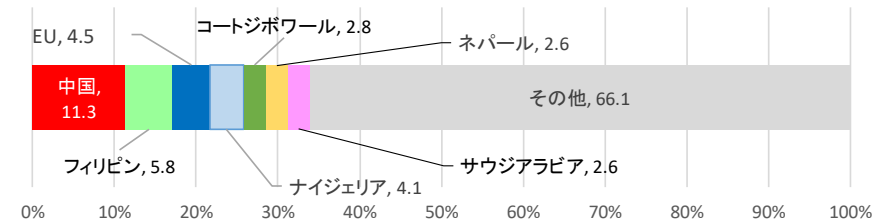
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(514.8百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(54.6百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(53.1百万トン)（単位：%）



(2) 国別のコメの需給動向

< 米国 > 収穫面積が減少。中・短粒種は1985/86年度以来の生産量に

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、収穫面積の減少と単収のわずかな引き下げにより、前月予測から0.3百万トン下方修正され、対前年度比9%減の5.5百万トンと、1996/97年度以来の低水準の見込み。特にカリフォルニア州（中・短粒種の国内生産の75%を占める）で、作付面積が減少し、1958/59年度以来の水準となった。一方ミシシッピ下流域では、農業資材の高騰に比べて米価の上昇幅が少なく、大豆やとうもろこしの方が収益性が高いことから、南部4州でも作付面積が減少し、アーカンソー州（国内最大の産地）では2018/19年度以来の低水準となった。

同「Crop Progress」(2022.7.18)によると、主要6州における出穂率は28%と前年同期(29%)及び過去5年平均(31%)を下回っている。作柄評価は、やや良から良が72%と、前年同期と同水準。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、輸入の増加により前月予測から0.1百万トン上方修正されたものの、対前年度比2.5%減の4.6百万トンの見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測から0.2百万トン上方修正されて、対前年度比12.3%増の1.4百万トンの見込み。なお中・短粒種の生産が対前年度比25%減少する見込みから、中・短粒種の輸入量が対前年度比43%増の0.5百万トンとなる見込み。

2022/23年度の輸出量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、対前年度比5.3%減の2.5百万トンと、1996/97年度以来の低水準となる見込み。

同「Rice Outlook」(2022.7.14)によれば、長粒種の価格はここ数か月間上昇しており、7月5日までの週のイラク向け長粒種(2等、砕米4%混入)は705ドル/トンと、2008年10月以来の高値となった(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。また中・短粒種の価格は、7月5日までの週の地中海向けカリフォルニア米(1等、砕米4%混入)で1,410ドル/トンと、引き続き過去最高となった。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約2割

(単位: 百万精米トン)

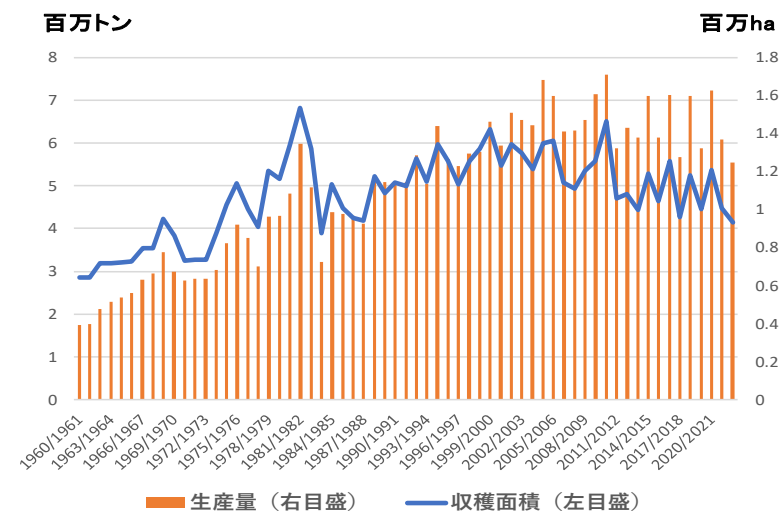
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月~23年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.2	6.1	5.5	▲ 0.3	▲ 9.0
消 費 量	4.9	4.7	4.6	0.1	▲ 2.5
輸 出 量	3.0	2.7	2.5	▲ 0.1	▲ 5.3
輸 入 量	1.1	1.2	1.4	0.2	12.3
期末在庫量	1.4	1.3	1.1	0.0	▲ 15.0
期末在庫率	17.8%	18.0%	15.9%	0.6	▲ 2.2

(参考)

収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.93	▲ 0.04	▲ 7.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.48	▲ 0.04	▲ 1.9

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)

図: 収穫面積と生産量(精米ベース)の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.7.12)をもとに農林水産省にて作成

< インド > 7年連続史上最高を更新見込みも作付け遅れ

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.6%増の130.5百万トンと7年連続で史上最高を更新見込み。

インド地球科学省気象部及びUSDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.7.6, 7.12)によると、コメの主要産地で、6月初めから半ばにかけて、平年と比べて降雨が大幅に少ない状況が続いたものの、その後降雨量が増加し、カリフ作の播種と発芽が促された。7月3日～9日にかけて多くの地域で降雨があり、土壌水分が改善され灌漑用水に供給された。カリフ米の作付が進行しているものの、作付進捗率は7月15日時点で平年に対し32.4%と、前年度の39.2%より遅れている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.5%増の107.5百万トンと史上最高の見込み。政府は小麦の供給逼迫を受け、低所得世帯向け食料配給プログラム等で、対象穀物を小麦からコメへシフトさせている。

USDAによれば、2022/23年度の輸出量は前月予測からの変更はなく、史上最高の生産量や価格競争力から22.0百万トンと前年度を2.3%上回り史上最高の見込み。

同「Grain: World Markets and Trade」(2022.7.12)及び「Rice Outlook」(2022.7.14)によると、2021/22年度のコメ輸出量は、豊富な供給量と価格競争力から、特に中国、サブサハラ・アフリカ、中東、ベトナム向けの輸出増加により、前月から0.5百万トン上方修正され21.5百万トンと、過去最高の見込み。

USDAによると2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から0.5百万トン下方修正されたものの、対前年度比2.6%増加し、39.2百万トンと史上最高の見込み。

インド産米(碎米5%混入)の7月5日までの週の価格は、350ドル/トンに上昇したものの、依然としてアジアの主要輸出国の中で最も低い価格となっている(P.20の「長粒種のFOB価格の推移」を参照)。

コメ・インド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ(小麦)の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

(単位:百万精米トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	124.4	129.7	130.5 (131.0)	-	0.6	
消 費 量	101.1	107.0	107.5 (108.5)	-	0.5	
輸 出 量	20.2	21.5	22.0 (19.3)	-	2.3	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	38.2	39.2 (41.1)	▲ 0.5	2.6	
期末在庫率	30.5%	29.7%	30.3% (32.2%)	▲ 0.4	0.5	

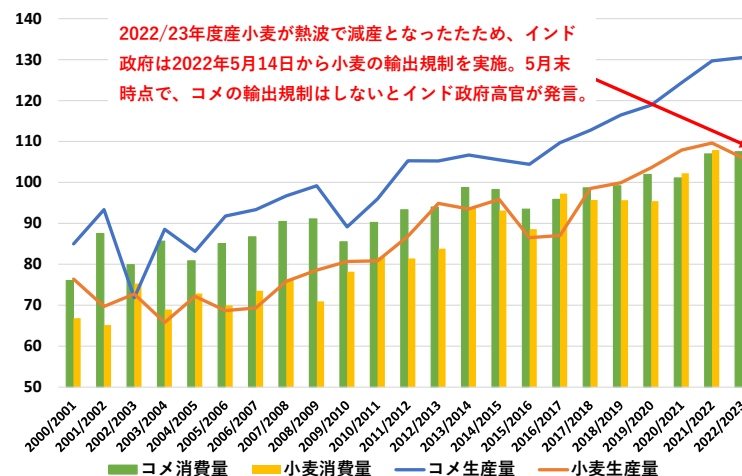
(参考)

収穫面積(百万ha)	45.77	47.00	47.00 (46.75)	-	-
単収(もみt/ha)	4.08	4.14	4.17 (2.80)	-	0.7

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)

IGC「Grain Market Report」(23 June 2022) (単収は精米t/ha)

図: コメ・小麦の消費量・生産量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.7.12)をもとに農林水産省にて作成

< 中国 > 1～5月の輸入量は、飼料用を含め対前年同期比3割増

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度をわずかに上回って149.0百万トンと、史上最高の見込み。

中国中央气象台（2022.7.5）によれば、6月上旬から中旬にかけて、早稲産地の大部分は大雨に見舞われ、早稲の一部に冠水被害が発生したため、出穂・開花期の受粉に影響し、生産に悪条件となった。6月下旬にはほとんどの産地の天候が改善し、早稲の生産に好条件となった。

また、黒竜江省等東北地区でも、6月上旬から中旬にかけて大雨が降ったため、一期作稲の移植・活着と分けつに影響した。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2022.7.12, 7.19）によると、7月上旬以降は、高温・乾燥となっている地域があり、生育への影響が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比0.2%増の156.6百万トンと、史上最高の見込み。

2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比1.7%増の6.0百万トンと史上最高の見込み。とうもろこしなど飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の碎米をインドやパキスタン等から輸入している。

中国海関統計によれば、2022年1～5月の輸入量は、対前年同期の2.2百万トンから約30%増加し、2.9百万トンとなった。輸入先はインドが0.9百万トン、パキスタンが0.7百万トン。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量と輸入を上回る消費の増加により、前年度末から4.0百万トン減少して、109.0百万トンとなる見込み。なお、世界の期末在庫量のうち、中国が6割弱を占める見通し。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位: 百万精米トン)

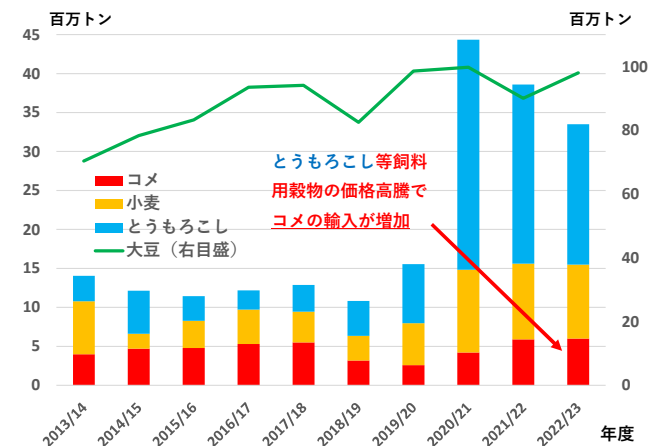
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	148.3	149.0	149.0	(149.0)	-	0.0
消 費 量	150.3	156.3	156.6	(153.4)	-	0.2
輸 出 量	2.2	2.1	2.4	(2.4)	-	14.3
輸 入 量	4.2	5.9	6.0	(5.0)	-	1.7
期末在庫量	116.5	113.0	109.0	(105.6)	-	▲ 3.5
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.6%	(67.8%)	-	▲ 2.8
(参考)						
収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	30.00	(30.03)	-	0.3
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.10	(4.96)	-	▲ 0.1

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 July 2022)

IGC「Grain Market Report」(23 June 2022) (単収は精米t/ha)

図： 中国のコメ、小麦、とうもろこし、大豆の輸入量の推移



資料: USDA「PS&D」(2022.7.12)をもとに農林水産省にて作成

< タイ > 主要生産地である北東部の土壌水分量は改善

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 0.8%増の 19.8 百万トンの見込み。

2021/22 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 4.2%増の 19.7 百万トンの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.7.6, 7.12, 7.19)によると、6 月から 7 月中旬にかけて、北東部の主要産地で降雨があり、土壌水分量は良好な状態となっている。また、北部および中央部の産地では、当初、降水量が平均を下回ったものの、7 月中旬以降の降雨で土壌水分量は改善された。ただし、コメの生育には更なる降雨が必要。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、対前年度比 7.1%増の 7.5 百万トンの見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 7.1%増の 7.0 百万トンとなる見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2022 年 1～4 月の輸入量は、対前年同期の 1.5 百万トンから約 53%増加し、2.3 百万トンとなった。輸入先はイラクが 0.4 百万トン（対前年度比 6.4 倍）、米国が 0.3 百万トン（対前年度比 1.5 倍）、中国が 0.2 百万トン（対前年度比 2.2 倍）。

USDA「Rice Outlook」(2022.7.14)によれば、7 月 5 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、バーツ安により、6 月 7 日までの週の価格から 28 ドル下落し、428 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

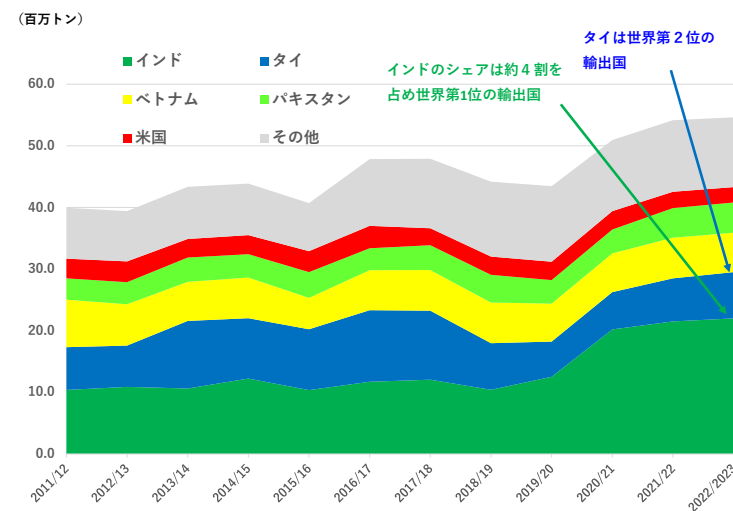
コメ・タイ

夏期の雨季作と冬期の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

(単位：百万精米トン)						
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	18.9	19.7	19.8	(20.0)	-	0.8
消 費 量	12.7	13.0	13.1	(12.3)	-	0.8
輸 出 量	6.1	7.0	7.5	(7.9)	-	7.1
輸 入 量	0.2	0.2	0.2	(0.3)	-	-
期末在庫量	4.3	4.1	3.5	(6.9)	-	▲ 14.5
期末在庫率	22.8%	20.7%	17.1%	(34.3%)	-	▲ 3.5
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.51	10.59	10.70	(10.70)	-	1.0
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.80	(1.87)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC「Grain Market Report」(23 June 2022)（単収は精米t/ha）

図：世界のコメの主要輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2022. 7. 12)をもとに農林水産省にて作成

< ベトナム > 国内価格の高騰により、輸入量が上方修正

【生育・生産動向】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が 6.01 トン/ヘクタールと過去最高になることから、対前年度比 0.3%増の 27.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収・収穫面積ともわずかに減少したことから、対前年度比 0.4%減の 27.3 百万トンの見込み。

一方、ベトナム農業・農村開発省によれば、2021/22 年度の収穫面積は 7.28 百万ヘクタール、生産量は 27.1 百万トンの見込み。これは、極度の寒波や季節外れの降雨、まちだった降水量、農業資材高騰等により減少したためとのこと。

USDA 「Weekly Weather and Crop Bulletin」(2022.7.19) 及び現地報道によると、降雨により乾燥気味だった土壌水分量が改善したものの、7 月前半にメコンデルタで発生した豪雨が、夏秋作と作付け準備中の秋冬作の圃場に被害をもたらしたとみられる。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 3.0%減の 6.4 百万トンの見込み。

2021/22 年度の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、対前年度比 4.8%増の 6.6 百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2022 年 1～5 月の輸出量は 2.8 百万トンで、上位からフィリピン (1.2 百万トン)、中国 (0.4 百万トン)、コートジボワール (0.3 百万トン) となっている。うちジャポニカ米は 0.09 百万トン。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、国内価格の高騰により、カンボジアやインドからの輸入増加が見込まれることから、0.2 百万トン上方修正され、0.8 百万トンとなった。

USDA 「Rice Outlook」(2022.7.14) によれば、ベトナム産米 (長粒種、5%碎米混入) の 7 月 5 日までの週の価格は、新規需要がほとんどなかったことから、前月から 5 ドル/トン下落して 420 ドル/トンとなった。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位: 百万精米トン)

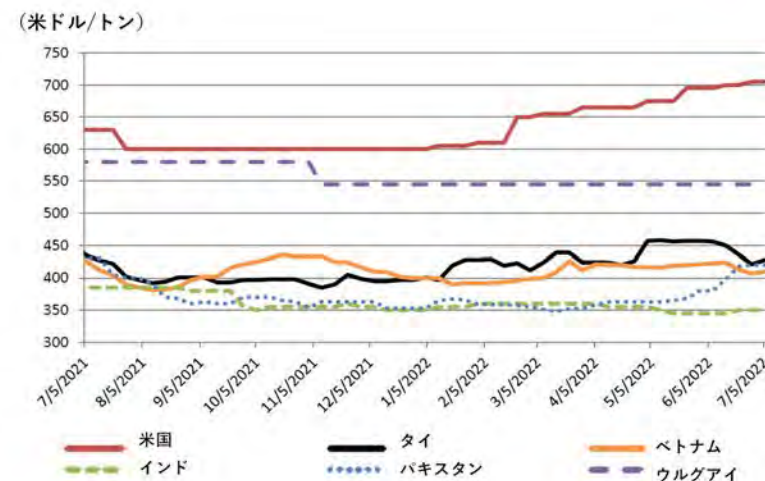
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	27.4	27.3	27.4 (28.9)	-	0.3	
消 費 量	21.5	21.5	21.7 (23.6)	0.1	0.9	
輸 出 量	6.3	6.6	6.4 (6.5)	-	▲ 3.0	
輸 入 量	1.8	1.1	0.8 (1.0)	0.2	▲ 27.3	
期末在庫量	2.6	3.0	3.1 (3.0)	0.3	3.4	
期末在庫率	9.5%	10.6%	10.9% (10.0%)	0.8	0.4	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.31	7.30	7.29 (7.28)	-	▲ 0.1	
単収(もみt/ha)	6.00	5.99	6.01 (3.98)	-	0.3	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(12 July 2022)

IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022) (単収は精米t/ha)

図: 長粒種の FOB 価格の推移



資料: USDA 「Grain: World Markets and Trade」(2022.7.12)

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国、カナダで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

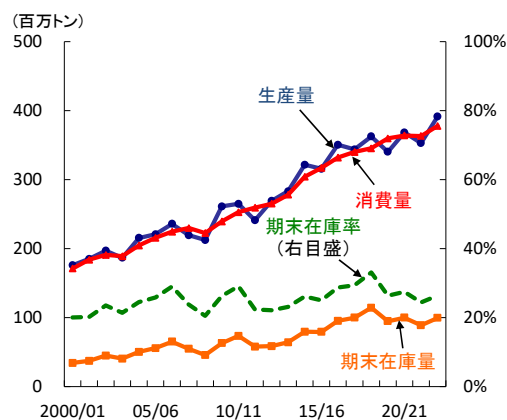
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジル等で上方修正も、米国、インド等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ブラジルで上方修正も、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2022.7.12）をもとに農林水産省で作成

◎ 世界の大豆需給

（単位：百万トン）

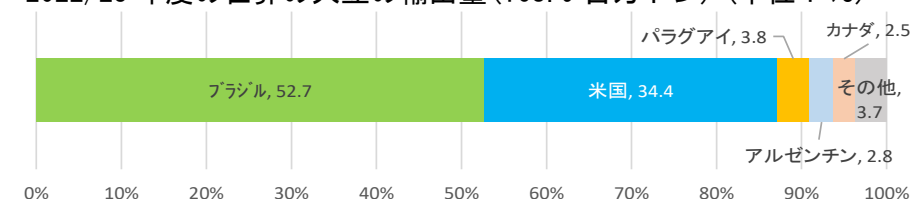
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	368.1	352.7	391.4	▲ 4.0	11.0
消費量	363.9	363.1	377.8	▲ 0.1	4.0
うち搾油用	315.1	313.7	327.1	▲ 0.1	4.3
輸出量	164.5	154.2	168.9	▲ 1.4	9.6
輸入量	165.5	153.4	166.1	▲ 1.0	8.3
期末在庫量	99.8	88.7	99.6	▲ 0.8	12.3
期末在庫率	27.4%	24.4%	26.4%	▲ 0.2	1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（12 July 2022）

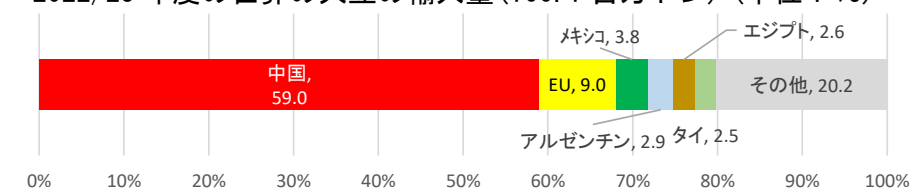
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (391.4 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (168.9 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (166.1 百万トン) (単位：%)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 収穫面積は下方修正されたものの、生産量は史上最高、輸出減の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の実産量は、「作付面積調査」(2022.6.30)で面積が下方修正されたことから前月予測から 3.7 百万トン下方修正されたものの、肥料価格高騰による作付けのとうもろこしからのシフトを背景に収穫面積の増加から、前年度より 1.6%増の 122.6 百万トンと史上最高の見込み。

USDA「Crop Progress」(2022.7.18)によれば、主要 18 州における開花進捗率は 48%と、前年度同期 (61%) 及び過去 5 年平均 (55%) より遅れている。着莢進捗率は 14%と、前年度同期 (21%) 及び過去 5 年平均 (19%) より遅れている。作柄評価は良からやや良が 61%と前年度同期 (60%) をやや上回っている。7 月上旬に降雨があったものの、7 月から 8 月にかけての開花期から着莢期の高温乾燥に注意が必要。

【需要状況】USDAによれば、2022/23 年度の実消費量は、大豆粕輸出の下方修正により前月予測から 0.3 百万トン下方修正されたものの、前年度より 2.0%増の 64.5 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正と南米からの大豆輸出の増加見通しから前月予測から 1.8 百万トン下方修正され、前年度より 1.6%減の 58.1 百万トンの見込み。

USDAによれば、2022 年輸出検証高 (2022 年 1 月 6 日～6 月 30 日) は、20.9 百万トンであり、内訳は中国 (8.7 百万トン)、メキシコ (2.5 百万トン)、エジプト (2.3 百万トン)、インドネシア (1.1 百万トン)、日本 (1.0 百万トン) の順。

USDAによれば、2022/23 年度の期末在庫量は、生産量の下方修正等により、前月予測から 1.3 百万トン下方修正されたものの、前年度より 7.2%増の 6.3 百万トンの見込み。なお、期末在庫率は 5.1%で、前年度を上回るものの、依然として低水準の見込み。

大豆－米国

(単位：百万トン)

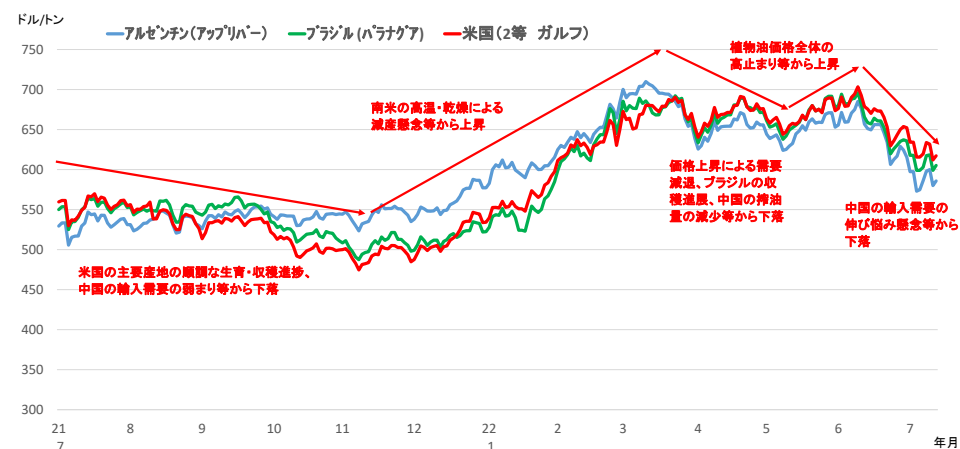
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	114.8	120.7	122.6	▲ 3.7	1.6
消 費 量	61.1	63.2	64.5	▲ 0.3	2.0
うち搾油用	58.3	60.0	61.1	▲ 0.3	1.8
輸 出 量	61.5	59.1	58.1	▲ 1.8	▲ 1.6
輸 入 量	0.5	0.4	0.4	－	－
期末在庫量	7.0	5.9	6.3	▲ 1.3	7.2
期末在庫率	5.7%	4.8%	5.1%	▲ 1.0	0.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	33.43	34.94	35.41	▲ 1.05	1.3
単収(t/ha)	3.43	3.45	3.46	－	0.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)

図：米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格 (FOB) の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

< ブラジル > 2021/22 年度の収穫終了、高温・乾燥で減産見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、本年 10 月以降に作付けが開始される 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、前年度より 18.3%増の 149.0 百万トンと史上最高の見込み。

また、ブラジル食料供給公社(CONAB)月例報告 (2022.7.7) によれば、2021/22 年度の実産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受け、前年度より 10.2%減の 124.0 百万トンの見込み。収穫作業は終了している。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度より 0.7%増の 52.9 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の消費量は、大豆油及び大豆粕価格の上昇から国内の搾油マージンが好調のため、旺盛な搾油用需要により前月予測から 0.8 百万トン上方修正され、2020/21 年度より 5.3%増の 52.5 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前年度の期末在庫の上方修正 (0.6 百万トン) に伴う輸出可能量の増加により前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、生産量の増加に伴い、前年度より 9.9%増の 89.0 百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22 年度の輸出量は、輸出ペースの減速により前月予測から 1.3 百万トン下方修正され、2020/21 年度より 0.8%減の 81.0 百万トンの見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2022 年 1～6 月の輸出量は 53.1 百万トンで、前年同期 (57.5 百万トン) に比べ 7.8%減となっている。内訳は、1 位が中国 35.2 百万トン、2 位がスペイン 2.4 百万トン、3 位がオランダ 1.7 百万トンとなっている。なお、6 月の輸出量は 10.1 百万トンで前年同月 (11.1 百万トン) と比べ、9.2%減となっている。

大豆—ブラジル

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	139.5	126.0	149.0 (143.0)	-	18.3	
消 費 量	49.9	52.5	52.9 (51.0)	0.5	0.7	
うち搾油用	46.7	49.3	49.5 (48.2)	0.5	0.5	
輸 出 量	81.7	81.0	89.0 (88.2)	0.5	9.9	
輸 入 量	1.0	0.6	0.8 (0.2)	-	36.4	
期末在庫量	29.4	22.5	30.4 (6.0)	▲ 0.4	35.2	
期末在庫率	22.4%	16.8%	21.4% (4.3%)	▲ 0.4	4.6	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	39.20	41.00	42.00 (41.75)	-	2.4	
単収(t/ha)	3.56	3.07	3.55 (3.43)	-	15.6	

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」(23 June 2022)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2021/22年度	2021年												2022年								
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等 作付 4.5(百万ha)												収穫 24.8(百万t) → 収穫夏冬計 115.7百万t								
冬とうもろこし	作付面積夏冬計 21.7百万ha ←												作付 17.1(百万ha) → 収穫 90.9(百万t)								
大豆	マト・グロッソ州、パラナ州等 作付 41.0(百万ha)												大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし播種 収穫 124.0(百万t)								

資料: CONAB穀物レポート (2022. 7. 7)

< アルゼンチン > 2021/22 年度は高温・乾燥で減産見通し、輸出税は継続

【生育・生産状況】USDAによれば、本年11月以降作付けが開始される2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加から、高温・乾燥の影響を受けた前年度より15.9%増の51.0百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の実生産量は、単収の上方修正により前月予測から0.6百万トン上方修正されたものの、生育期の高温・乾燥の影響で、2020/21年度より4.8%減の44.0百万トンの見込み。

6月末までに2021/22年度の収穫はほぼ終了した。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より1.3%増の48.3百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加に伴い、前年度より2.1倍の4.7百万トンの見込み。なお、2021/22年度の輸出量は、輸出ペースの減速により前月予測から0.5百万トン下方修正され、2020/21年度より56.7%減の2.3百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2022年1～5月の輸出量は23.8万トンで、前年同期（136.6万トン）より82.5%減。内訳は、1位が中国14.0万トン、2位がチリ2.1万トン、3位がフィリピン2.1万トンとなっている。

アルゼンチンは、丸大豆より搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第1位の輸出国である。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021年1月以降、輸出税を大豆最大33%、大豆油及び大豆粕31%に設定。さらに、2022年3月19日付けアルゼンチン農牧漁業省プレスによれば、大豆油及び大豆粕の輸出税について2022年末まで2%引き上げ、大豆と横並びの33%に変更した。

大豆ーアルゼンチン

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	46.2	44.0	51.0	(48.0)	-	15.9
消 費 量	47.4	47.6	48.3	(48.1)	-	1.3
うち搾油用	40.2	40.4	41.0	(42.1)	-	1.5
輸 出 量	5.2	2.3	4.7	(4.2)	-	108.9
輸 入 量	4.8	2.9	4.8	(4.8)	-	65.5
期末在庫量	25.1	22.1	25.0	(2.6)	1.5	12.9
期末在庫率	47.6%	44.3%	47.1%	(5.0%)	2.7	2.8
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	16.00	17.00	(16.65)	-	6.3
単収(t/ha)	2.81	2.75	3.00	(2.88)	-	9.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(12 July 2022)

IGC「Grain Market Report」(23 June 2022)

写真：北部サンタフェ州の大豆の保管風景

(7月1日撮影)

農家が自らの農場内に最近建設した小型の金属製サイロ



< 中国 > 増産見通し、消費量・輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、政府の補助金による大豆奨励策から主に収穫面積の増加により、前年度より6.7%増の17.5百万トンの見込み。

中国中央气象台週報(2022.7.4)によれば、6月の黒竜江省等東北地区は低温・日照不足、安徽省等では高温・乾燥のため、それぞれ生育に不利となった。7月上旬現在、三葉期から開花期に入っている。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、国内大豆粕需要の回復による搾油用消費量の増加から、前年度より8.3%増の115.6百万トンと史上最高の見込み。なお、2021/22年度の消費量は、新型コロナウイルス関連の制限や経済成長の減速などを背景とする搾油用消費量の減退により前月予測から2.0百万トン下方修正され、2020/21年度より5.3%減の106.7百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、輸入需要の減退から前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、前年度より8.9%増の98.0百万トンの見込み。なお、2021/22年度の輸入量は、搾油用消費量の下方修正に伴い前月予測から2.0百万トン下方修正され、2020/21年度より9.8%減の90.0百万トンの見込み。

中国の貿易統計によれば、2022年1～5月の輸入量は38.0百万トンと、前年同期比で0.5%減。内訳は、ブラジル産20.5百万トン(54%)、米国産16.8百万トン(44%)。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2022年5月号」によると、5月は、農家の大豆在庫の減少と春の耕作に伴う取引の減少により、5月の国内価格(山東省の国産大豆工場渡し価格)は、前月(6,500元/トン)から横ばいの6,500元/トンで、依然として高水準で推移している。主産地における農家の在庫は底を打ち、今後、新穀大豆が市場に出荷されるまで、国内価格は高値を維持するとみられる。5月の輸入価格(山東省の輸入大豆価格)は、5,400元/トンと前月(5,240元/トン)から上昇した。今後の中国の輸入動向に注視が必要である。

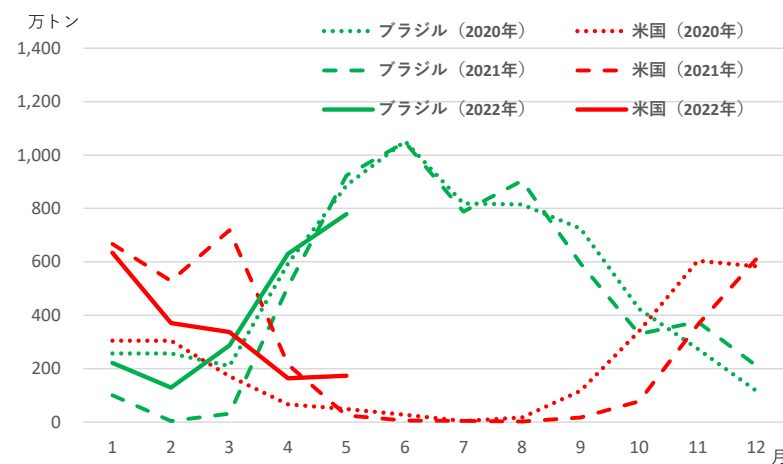
大豆—中国

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	17.5 (19.5)	-	6.7
消 費 量	112.7	106.7	115.6 (115.1)	-	8.3
うち搾油用	93.0	87.0	95.0 (96.4)	-	9.2
輸 出 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	-
輸 入 量	99.8	90.0	98.0 (97.5)	▲ 1.0	8.9
期末在庫量	31.2	30.7	30.6 (31.9)	▲ 1.0	▲ 0.6
期末在庫率	27.6%	28.8%	26.4% (27.7%)	▲ 0.9	▲ 2.4
(参考)					
収穫面積(百万ha)	9.88	8.40	8.90 (9.90)	-	6.0
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.97 (1.97)	-	1.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (12 July 2022)
IGC 「Grain Market Report」 (23 June 2022)

図：中国におけるブラジル、米国産大豆の輸入状況



出典：中国海関統計

注：2020年1月分と2月分は合計で公表されたため、便宜上1/2で按分

< カナダ > 収穫面積・単収の減少により減産、輸出量は増加見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、以下のカナダ統計局の面積発表を受けて収穫面積が下方修正されたため、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、収穫面積及び単収の減少から、前年度より 4.3%減の 6.0 百万トンの見込み。

カナダ統計局「Principal field crop areas, June 2022」（2022.7.5）によれば、世界的に大豆需要は旺盛であるものの、カナダ南東部のオンタリオ州に次ぐ第2位の生産州のカナダ西部のマニトバ州で洪水等による作付けの大幅な遅れにより一部の農家が他の生育期間の短い作物に作付けを切り替えたことから、作付面積は前年度より 0.9%減の 2.13 百万ヘクタールの見込み。

USDA「Weekly Weather and Crop Bulletin」（2022.7.19）によれば、主産地のカナダ南東部では、6 月上旬以降乾燥傾向が続いているものの、高温のストレスを受けることなく順調に生育。

なお、カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2022.7.21）によれば、2022/23 年度の実産量は、マニトバ州などカナダ西部での作付面積の減少の一方、前年度から回復する過去 5 年平均単収を前提とすれば、前年度より 1.3%増の 6.4 百万トンの見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から 0.1 百万トン下方修正され、前年度より 5.2%減の 2.3 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、前年度より 2.4%増の 4.3 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2021/22 年度（2021 年 8 月～2022 年 7 月）のうち、2021 年 8 月～2022 年 5 月の輸出量は 280.9 万トンで、国別では、イラン（53.7 万トン）、イタリア（39.2 万トン）、バングラデシュ（26.2 万トン）、オランダ（22.6 万トン）、中国（22.2 万トン）の順。

大豆－カナダ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	6.4	6.3	6.0 (6.4)	▲ 0.3	▲ 4.3
消費量	2.7	2.4	2.3 (2.4)	▲ 0.1	▲ 5.2
うち搾油用	1.6	1.9	1.8 (1.9)	-	▲ 5.4
輸 出 量	4.5	4.2	4.3 (4.3)	▲ 0.2	2.4
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 2.0
期末在庫量	0.3	0.4	0.3 (0.5)	▲ 0.1	▲ 28.0
期末在庫率	4.1%	6.4%	4.7% (7.5%)	▲ 1.3	▲ 1.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	2.04	2.13	2.10 (2.13)	▲ 0.10	▲ 1.4
単収(t/ha)	3.12	2.94	2.86 (2.98)	-	▲ 2.7

資料：USDA「PS&D」

「World Agricultural Production」(12 July 2022)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(21 July 2022)

写真：カナダ平原部マニトバ州の大豆の生育風景 (7月3日撮影)



(参考)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。

例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。

なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

第13号特別分析トピック：我が国と世界の肥料をめぐる動向

肥料について

- 肥料の三要素は、窒素(N)、りん酸(P)、加里(K)である。
- 二次要素としてカルシウム、マグネシウム等、微量元素としてホウ素、マンガン等がある。

〔三要素〕

	各成分の働き
窒素(N)	植物(特に葉)の成長を促す。
りん酸(P)	開花結実を促す。
加里(K)	根の発育を促す。

〔二次要素〕

	各成分の働き
カルシウム(石灰)	植物による肥料成分の吸収を容易にする。
マグネシウム(苦土)	植物の新陳代謝を活発にする。
硫黄	葉緑素の生成に資する。

〔微量元素〕

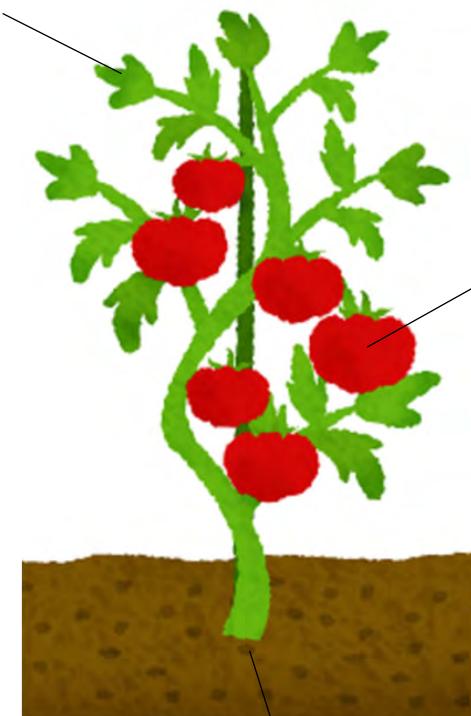
	各成分の働き
ホウ素、マンガン、鉄、銅、亜鉛、モリブデン、塩素、ニッケル	植物の細胞膜などの形成維持やタンパク質の生成を助けるなど植物の健全な成長に資する。

注:上記の各要素は、いずれも欠乏による生理病と過剰障害に注意が必要。

肥料の三要素の役割

窒素：葉・茎

りん酸：花・果実



カリ：根・植物全体

肥料の種類

○ 肥料は、化学肥料と有機質肥料に大別される。

〔主な肥料の種類〕

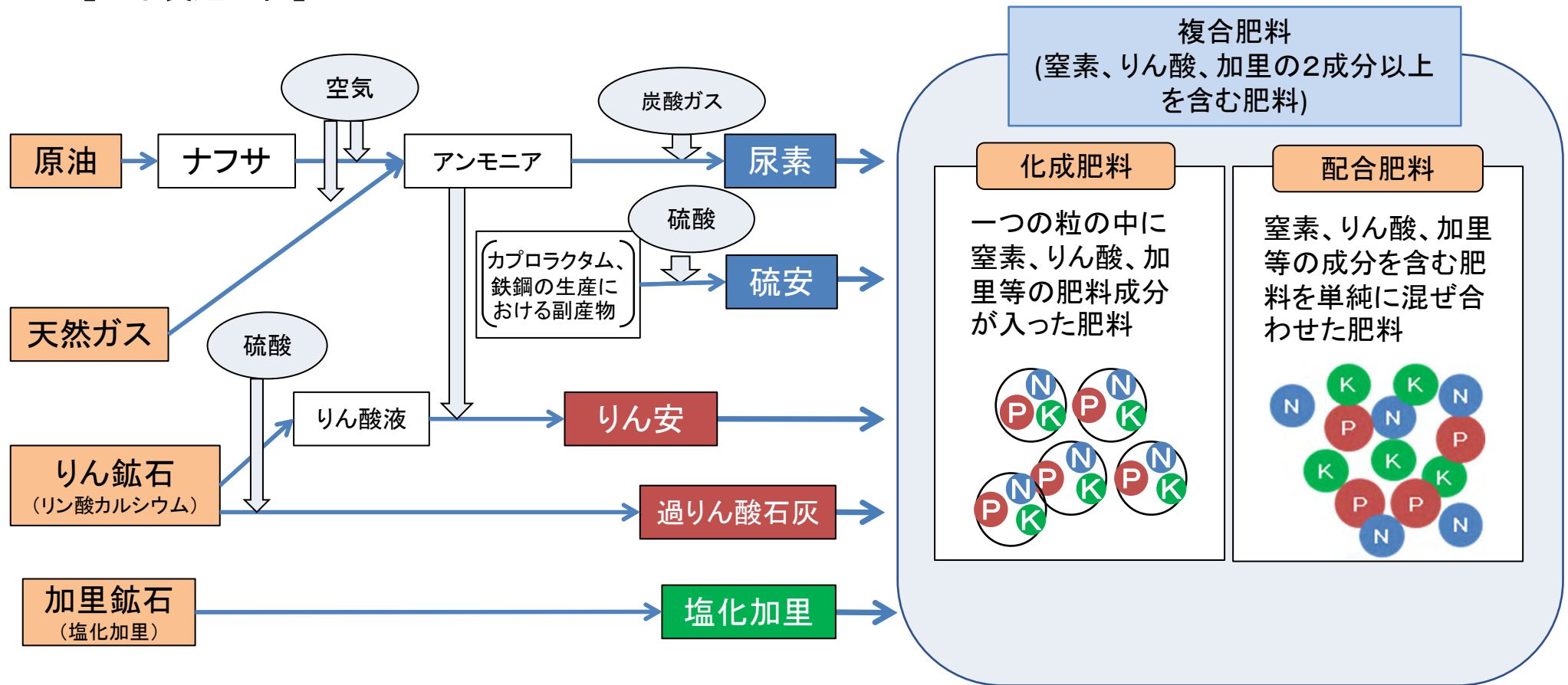
	分 類	主な肥料	参考
化学肥料 (化学的に製造)	窒素質肥料	尿素、硫安、塩安、石灰窒素	石灰窒素は、農薬効果も期待できる。
	りん酸質肥料	過りん酸石灰、熔成りん肥	熔成りん肥は、りん成分が土壌中に緩やかに溶出することなどから土づくりに利用しやすい。
	加里質肥料	塩化加里、硫酸加里	速攻性の肥料であり、単肥よりも化成肥料や配合肥料の原料となる。
	複合肥料	高度化成肥料、普通化成肥料、配合肥料	N、P、Kのうち2成分以上の肥料成分を含む。
	石灰質肥料	炭酸カルシウム肥料、消石灰	主に土壌の酸度矯正を目的とするアルカリ性の肥料。
	その他肥料	ケイ酸質肥料、苦土肥料	ケイ酸質肥料は、イネ科の植物の耐病、耐虫性等を高める。
有機質肥料 (動植物性の有機物が原料)	堆肥	牛ふん堆肥、豚ふん堆肥、鶏ふん堆肥	土づくりににも使用される。
	動植物質肥料	魚粕粉末、菜種油粕、骨粉	動物の肉・骨や魚、草木性植物の種子等から、圧搾等により水分・脂肪・油を搾った後の粕やその粉末。
	有機副産物肥料	汚泥肥料	下水道処理場等から回収した有機副産物を基に生産。

注：家畜ふん堆肥の中で最も肥料成分が高い鶏ふん堆肥で、N:3%、P:7%、K:4%(千葉県農業総合研究センター調べ)。
一般的な化学肥料である高度化成肥料は、N:14%、P:14%、K:14%。

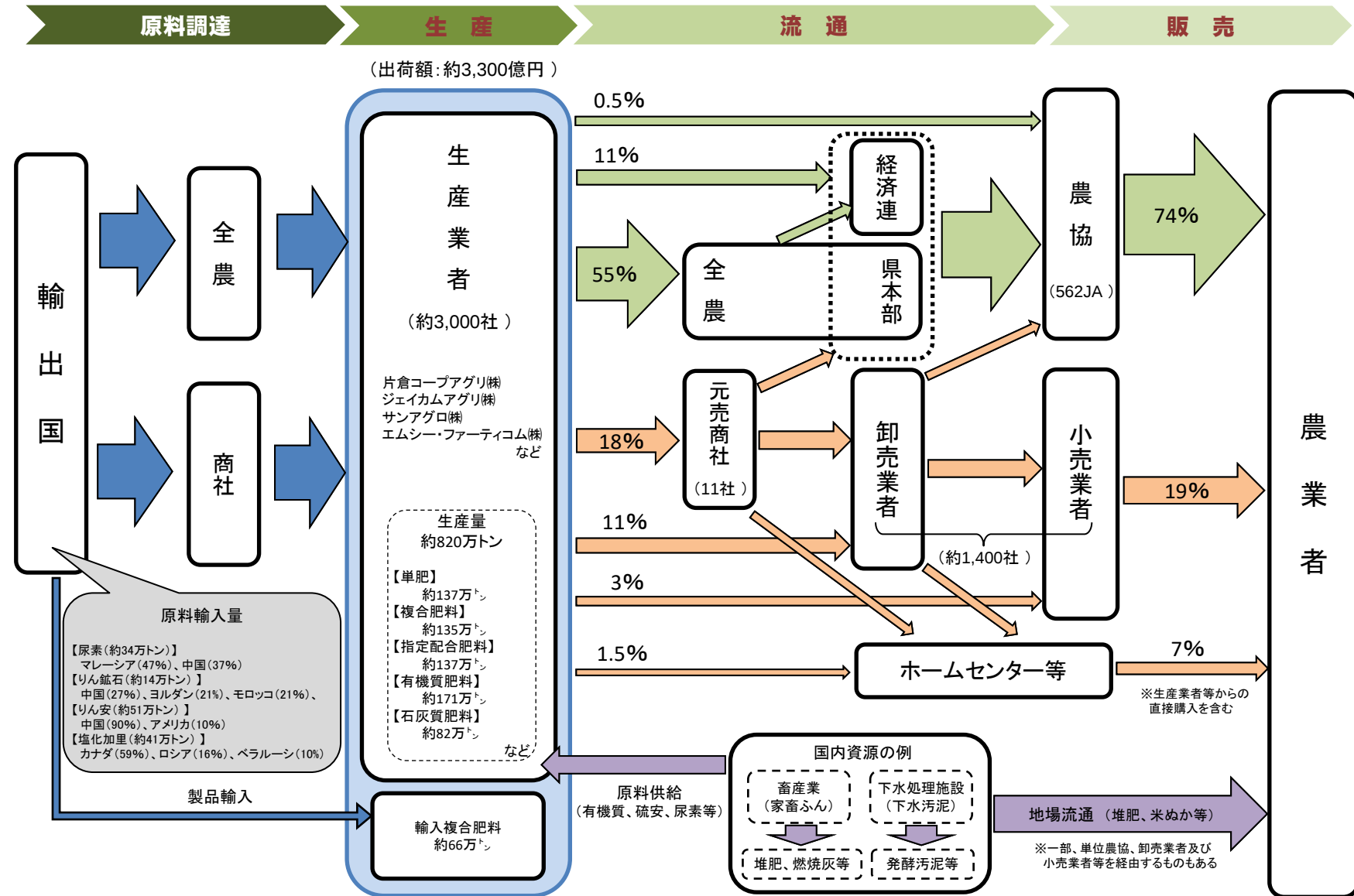
主要化学肥料の製造工程

○ 化学肥料は、化石燃料(原油、天然ガス)や鉱物資源(りん鉱石、加里鉱石等)が原料である。

【主な製造工程】



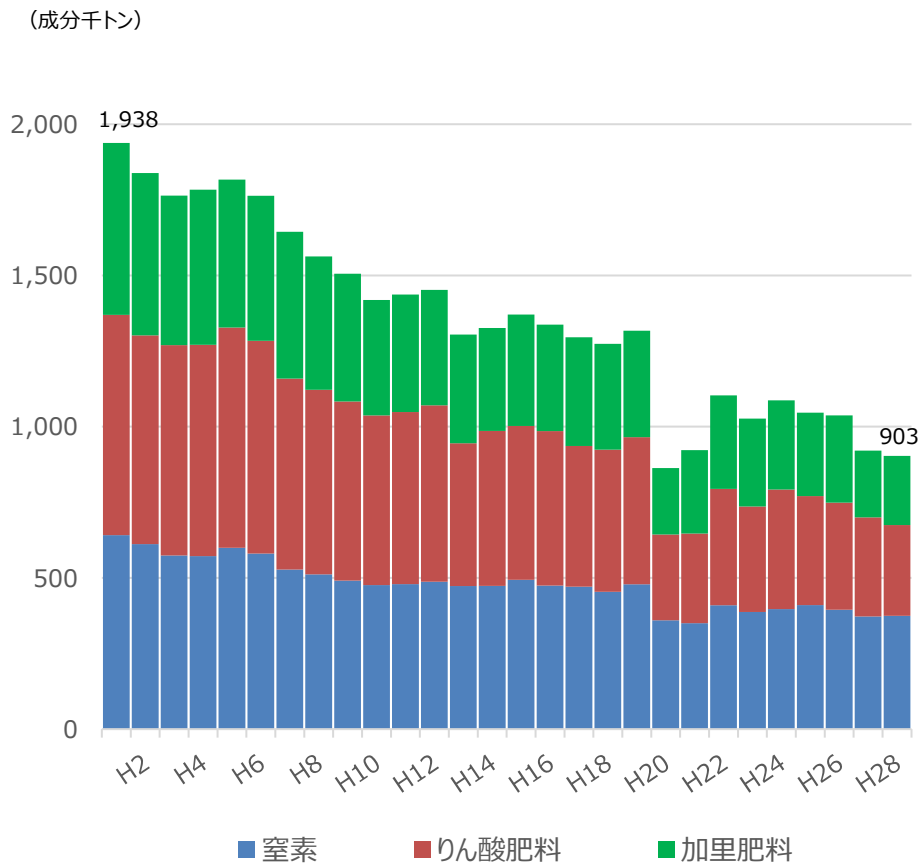
肥料の流通構造（商流）



化学肥料の国内動向

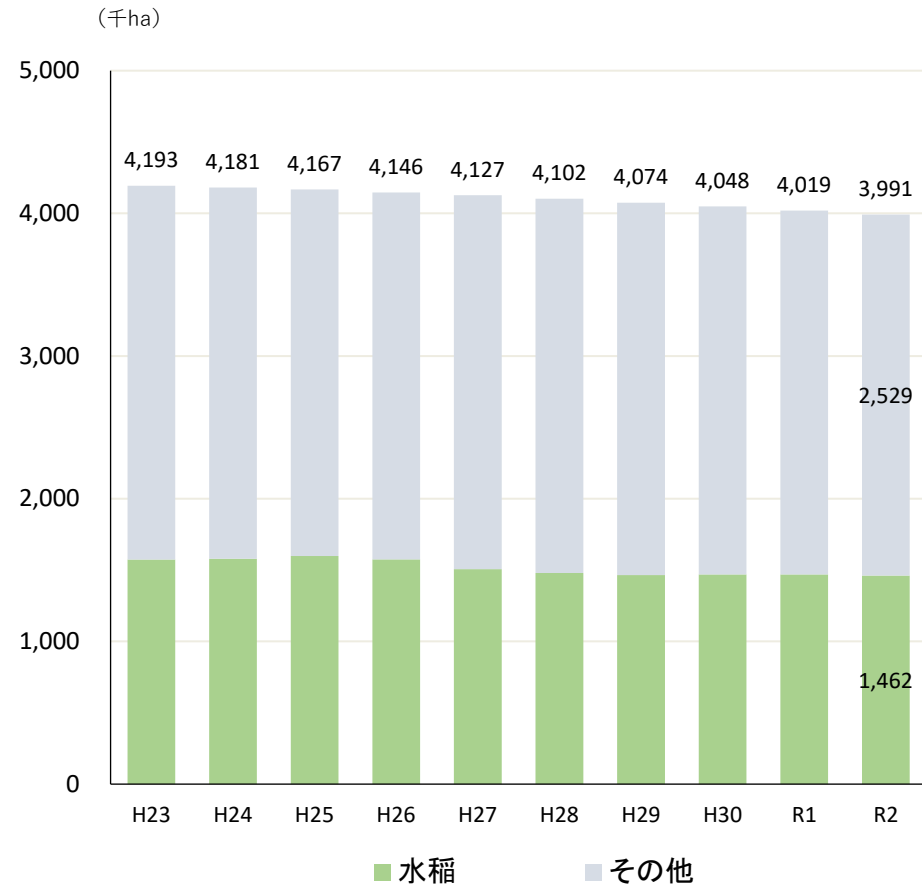
○ 化学肥料の国内需要量は、減少傾向（農作物の作付(栽培)延べ面積も減少傾向）。

化学肥料の国内動向（肥料年度）



資料：農林統計協会「ポケット肥料要覧」を基に作成
 注：数値は成分換算（窒素、りん酸、加里成分の合計）
 肥料年度（7月1日から6月30日）
 注：りん酸肥料についてはH13年肥料年度から統計手法の変更有り。

農作物の作付（栽培）延べ面積

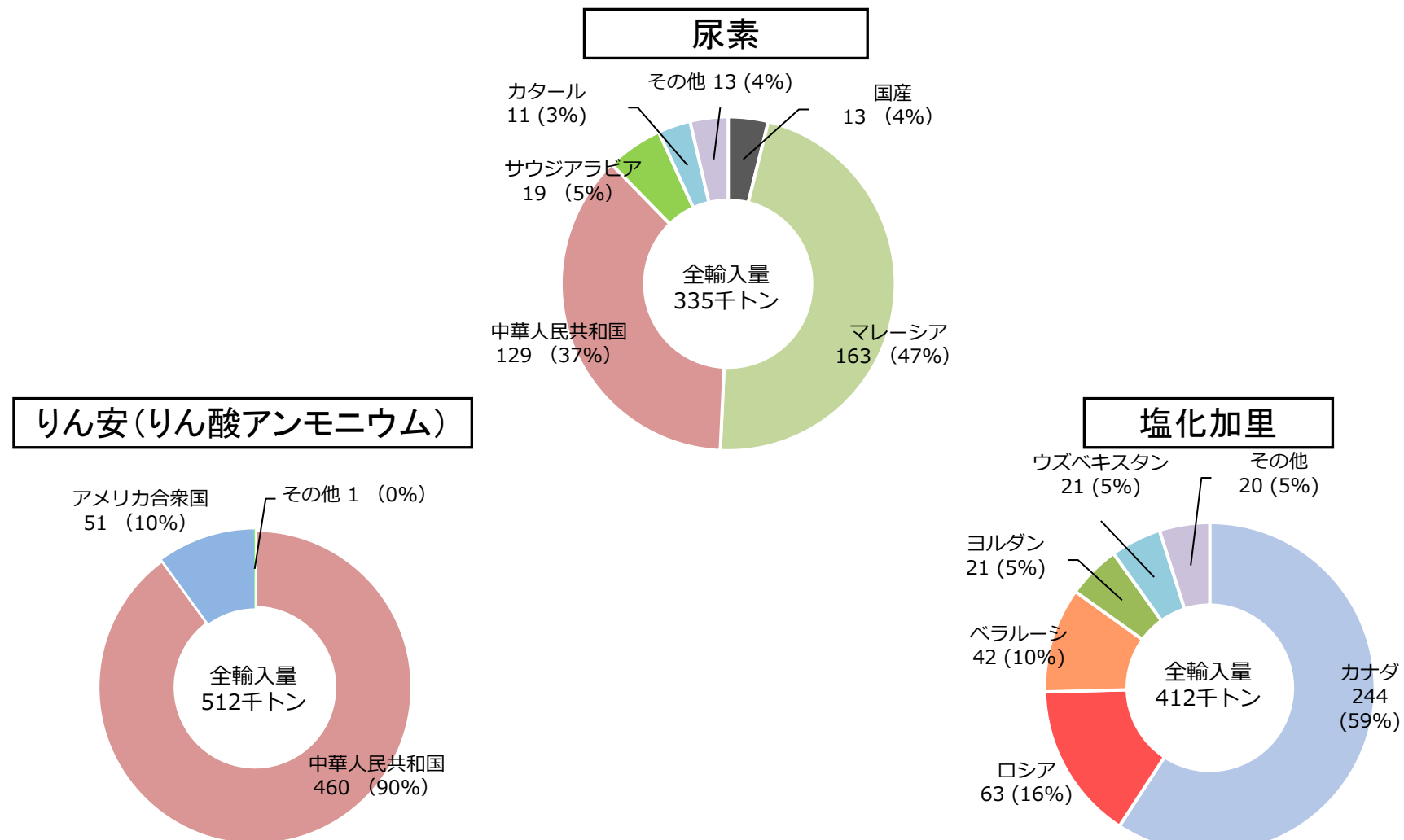


資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」を基に作成

化学肥料原料の輸入状況

- 化学肥料原料の大半を輸入依存している。特に、尿素を除き、りん安(りん酸アンモニウム)、塩化加里はほぼ全量を輸入依存している。世界的に資源が偏在しているため、輸入相手国も偏在している。
- 尿素はマレーシア、中国、りん安は中国、塩化加里はカナダが主な輸入相手国となっている。

我が国の肥料原料の輸入相手国(令和2肥年)

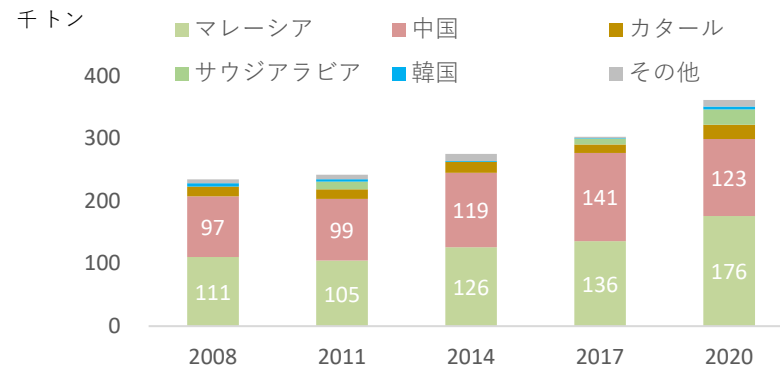


※ 資料：財務省「貿易統計」等を基に作成（令和2年7月～令和3年6月）

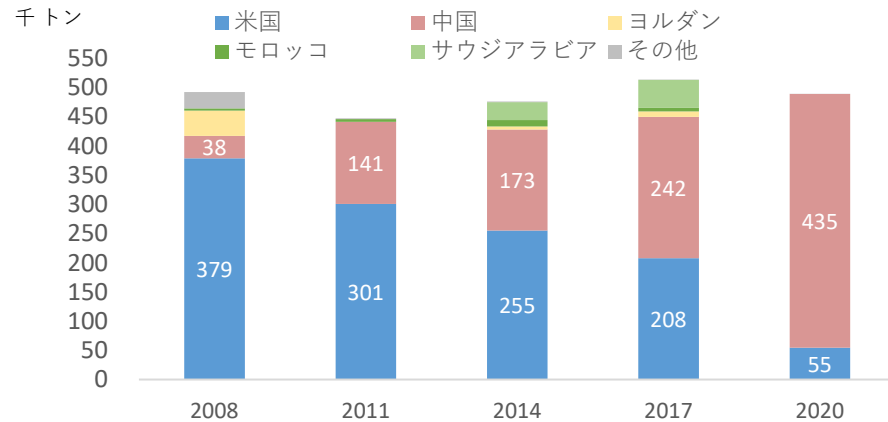
化学肥料原料における輸入の推移

- 塩化加里は輸入量が減少傾向にある。一方で、尿素は輸入量が増加傾向にある。
- りん安(りん酸アンモニウム)は中国への依存度が高まっている。

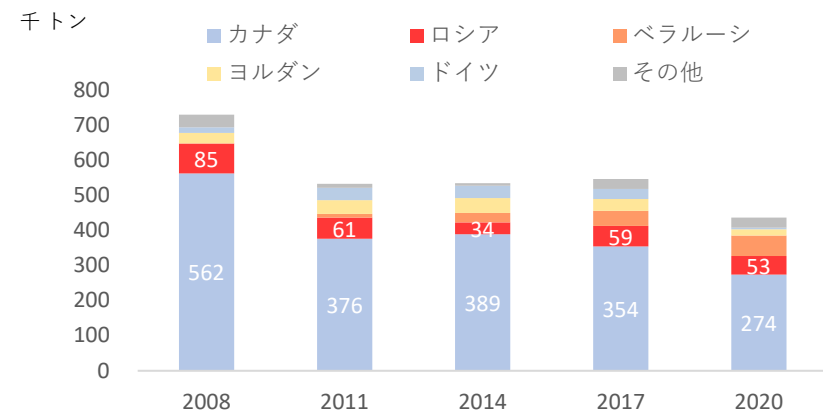
尿素



りん安(りん酸アンモニウム)



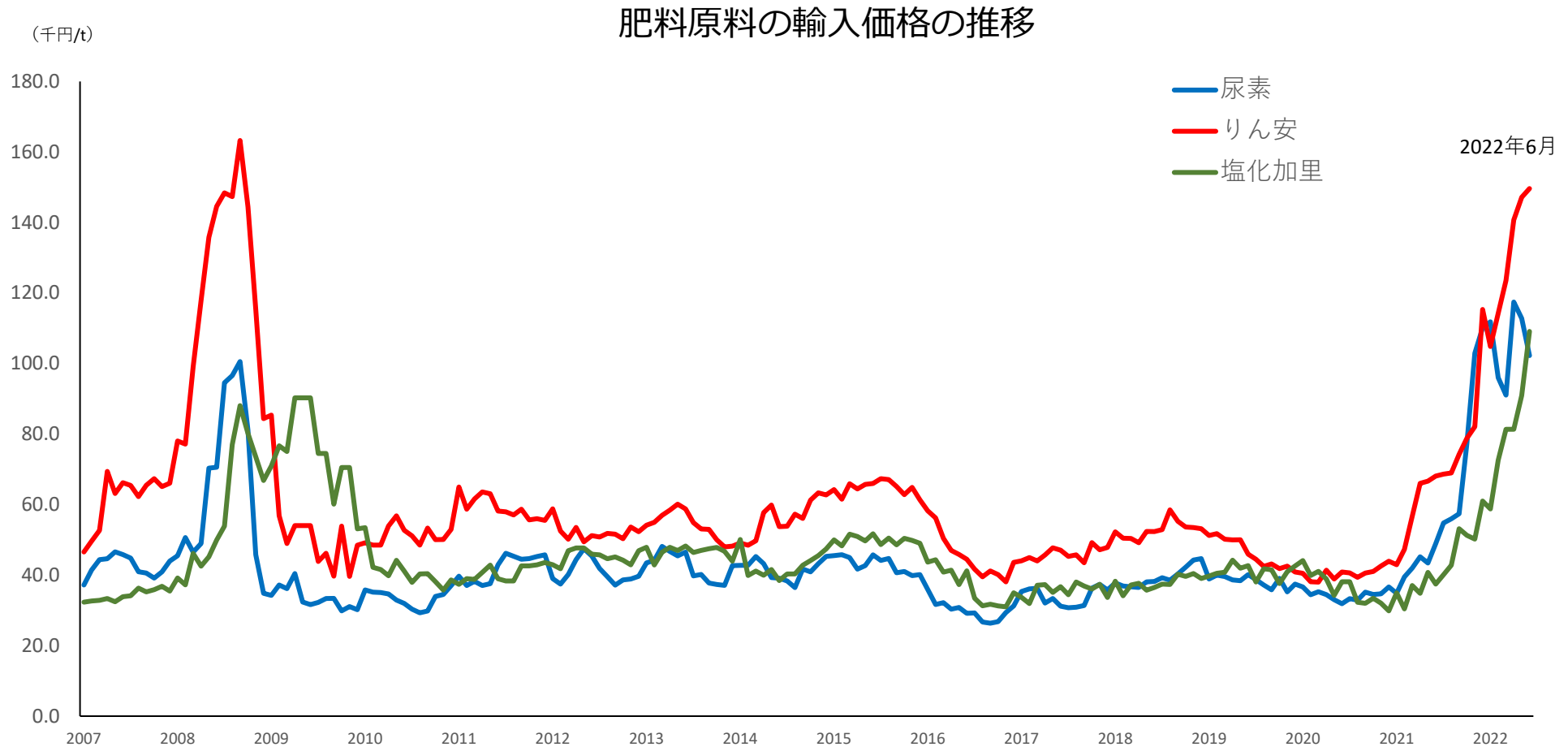
塩化加里



資料:財務省「貿易統計」等を基に農林水産省が作成

肥料原料の価格推移

○ 肥料原料の輸入価格は、2021年（令和3年）以降、上昇傾向。

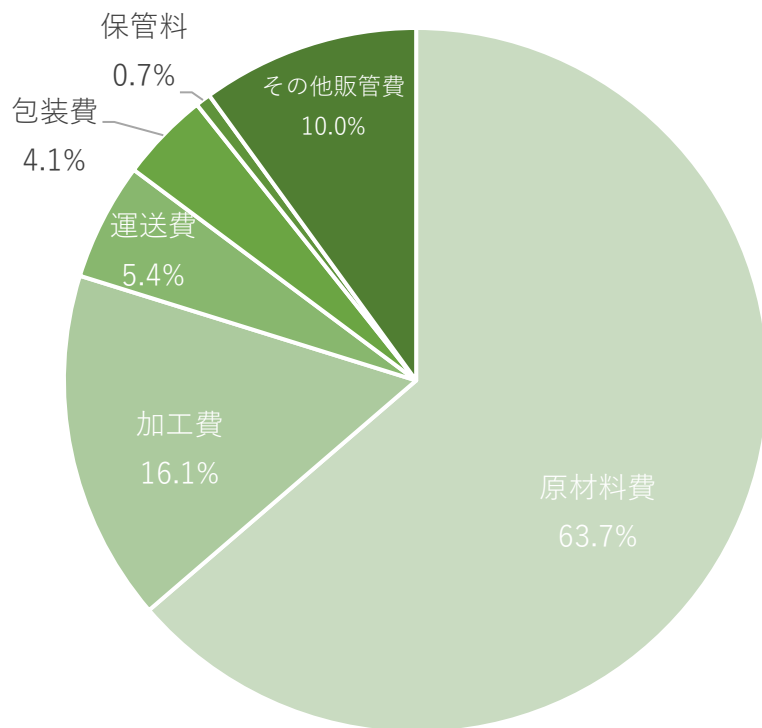


※ 農林水産省調べ
財務省貿易統計における各原料の輸入額を輸入量で除して算出。
ただし、月当たりの輸入量が5,000t以下の月は前月の価格を表記。

肥料原料のコスト構造及び農業経営費に占める肥料費

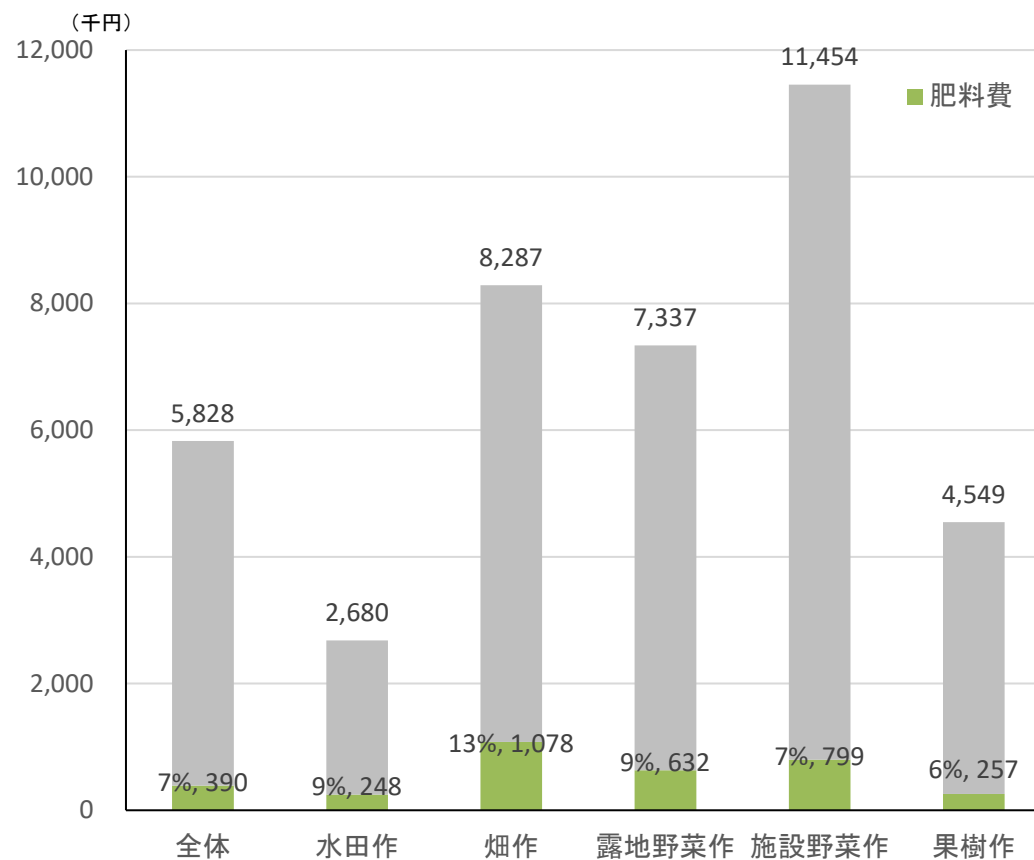
- 肥料は、製造コストの約6割を原材料が占めており、国内肥料価格は肥料原料価格の影響を大きく受ける。
- 営農類型別の経営費に占める肥料費の割合は、全体で7%、経営別で約6～13%となっている。

高度化成肥料のコスト構造



資料：経済産業省「平成24年度中小企業支援調査
化学肥料製造における実態調査」

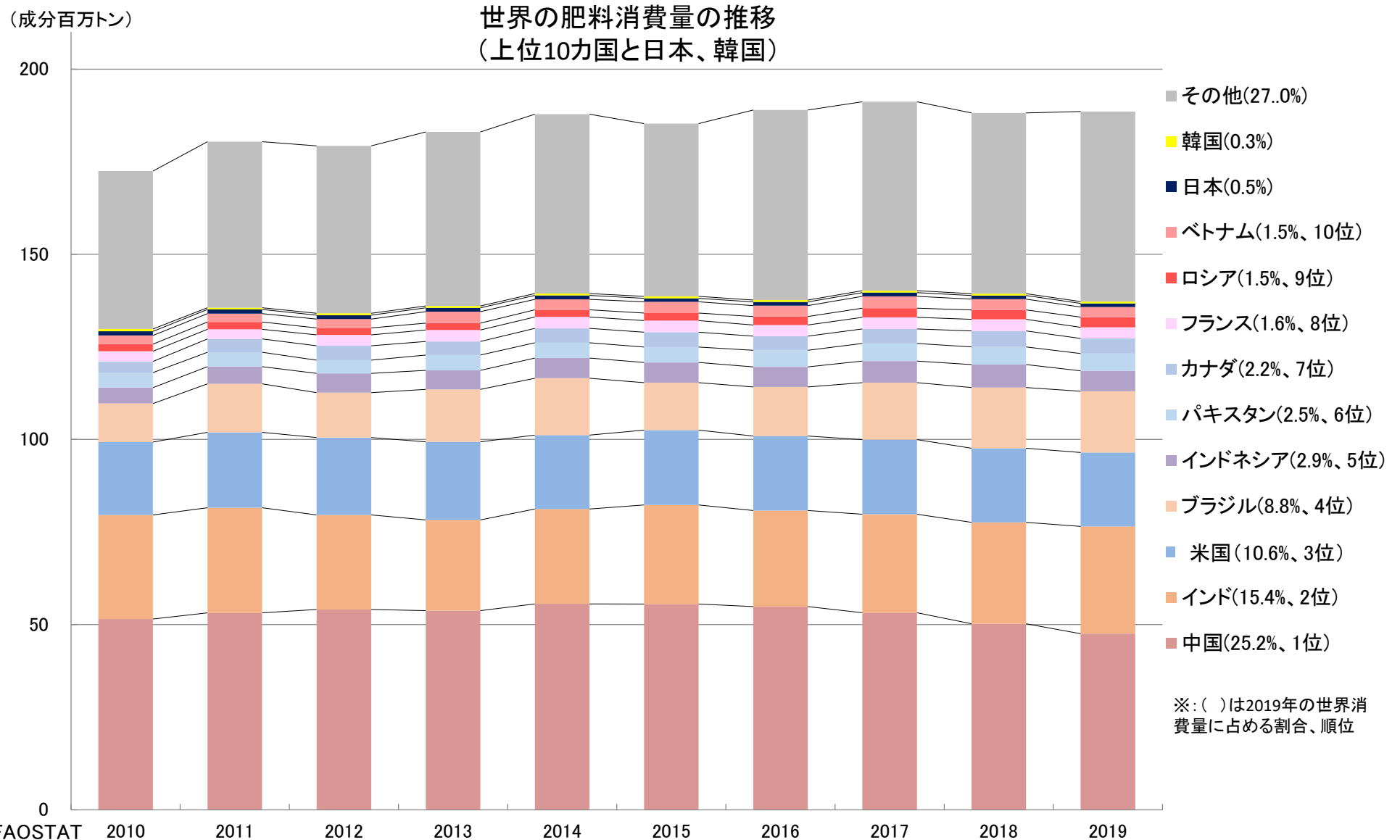
経営体当たりの経営費に占める肥料費の割合



資料：農林水産省「令和2年営農類型別経営統計（個人経営体）」を基に作成

世界の肥料の消費量の動向

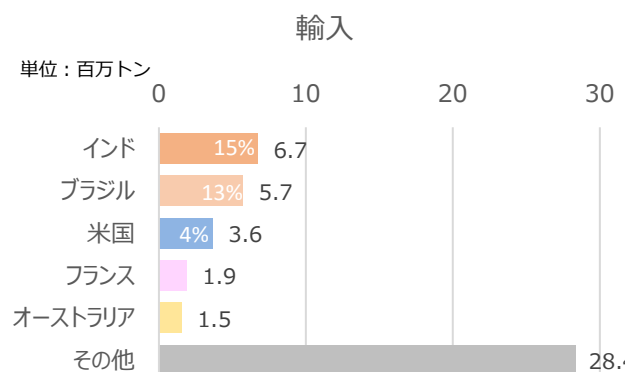
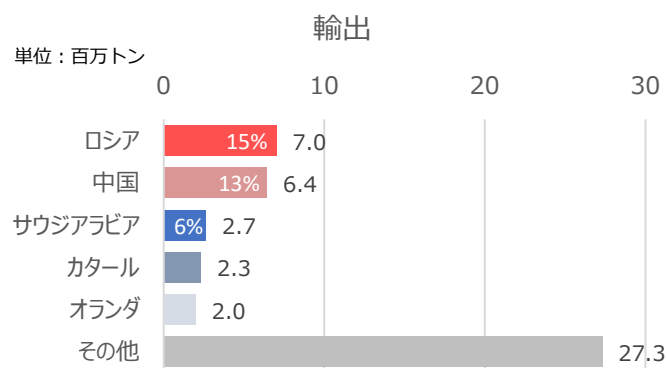
- 肥料の主要消費国は中国、インド、米国となっている。
- 我が国の肥料消費量は、世界全体の消費量の1%以下である。



世界の肥料原料の輸出入動向（2021年）

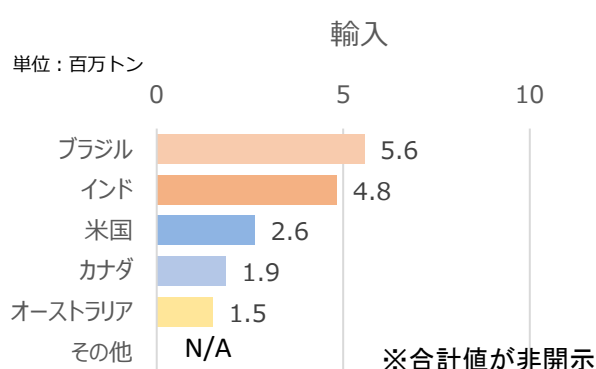
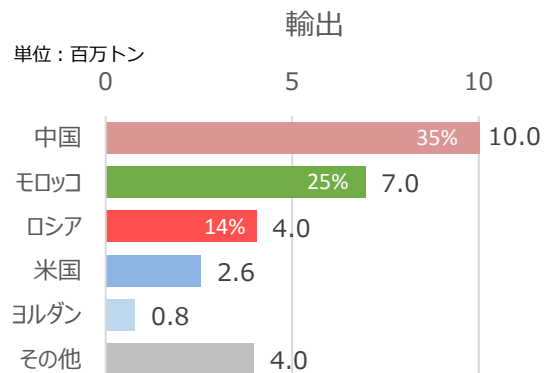
- 窒素肥料の主な輸出国はロシア、中国、主な輸入国はインド、ブラジル。
- リン安の主な輸出国は中国、モロッコ、主な輸入国はブラジル、インド。
- 塩化加里の主な輸出国はカナダ、ロシア、主な輸入国は米国、ブラジル。

窒素肥料



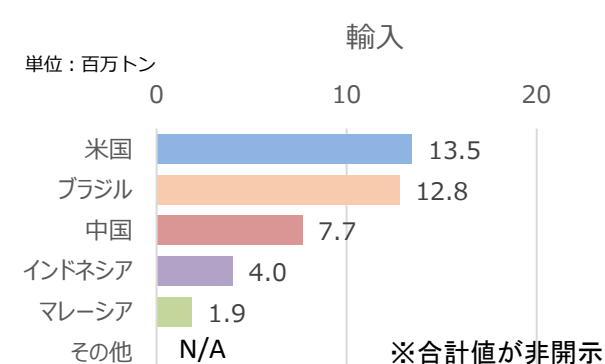
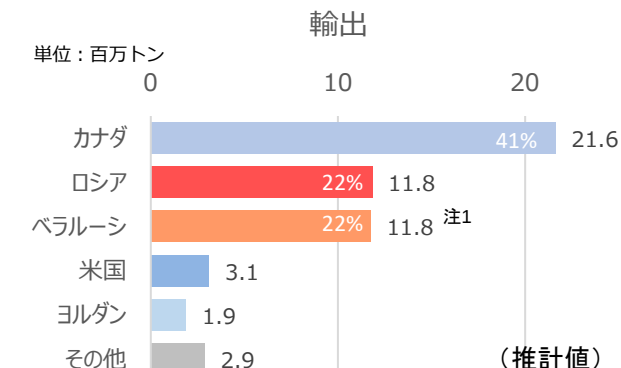
資料：FAO STATを基に農林水産省が作成
窒素肥料はFAOのItem Code
3102「Nutrient nitrogen N (total)」を利用。
(尿素、硫安等を含む)

りん安



資料：ITC Trade Mapを基に農林水産省が作成

塩化加里



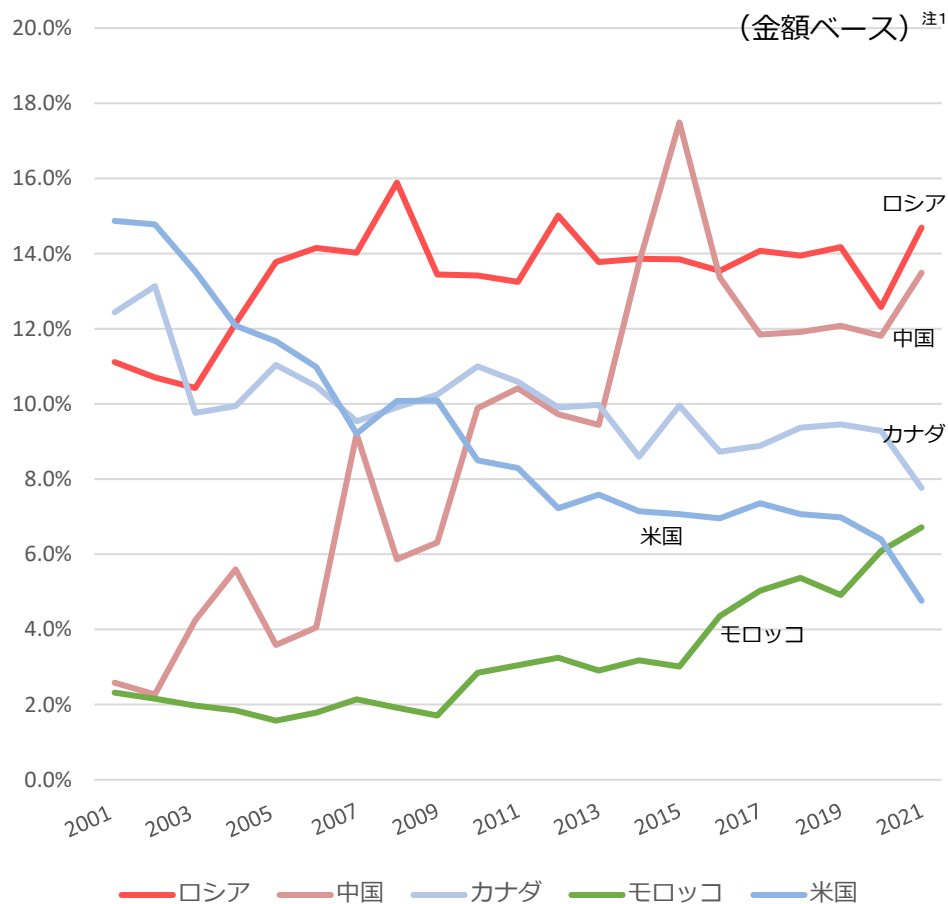
資料：ITC Trade Mapを基に農林水産省が推計

注1：ベラルーシは2020年のデータを採用（2021年のデータはN/A）

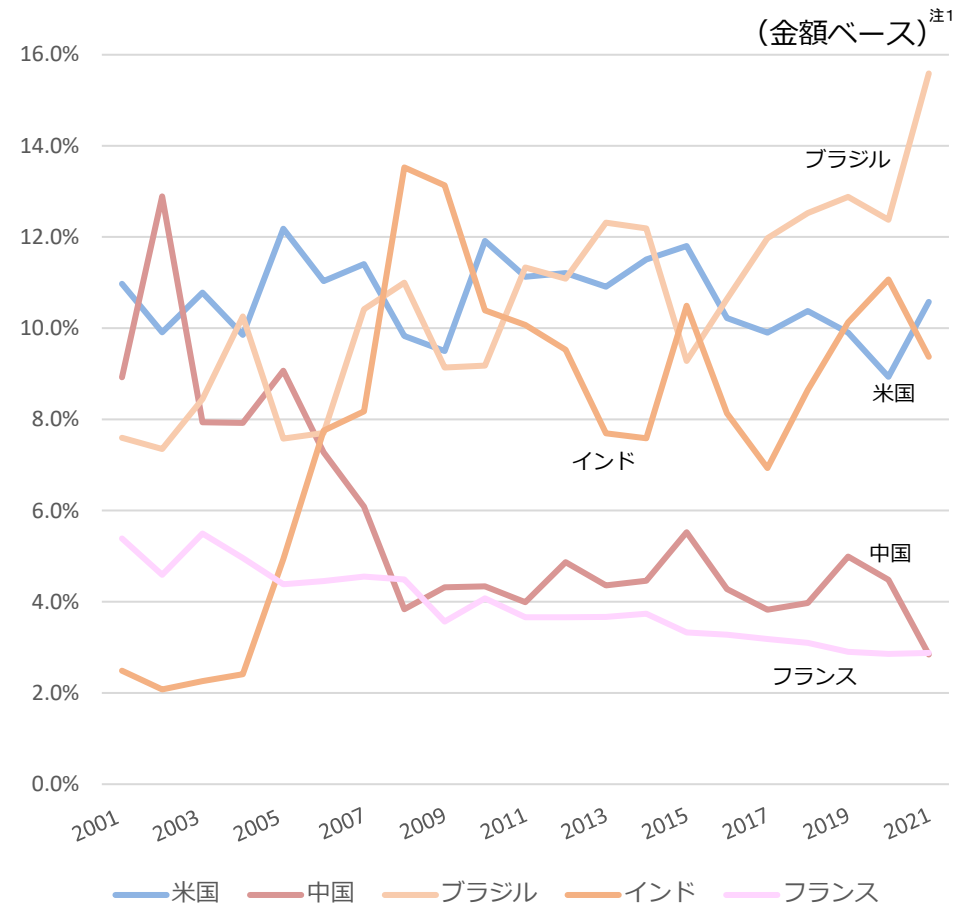
世界の肥料原料の輸出入シェアの推移

- 輸出シェアは、中国、モロッコが増加傾向、カナダ、米国は減少傾向。ロシアは高位安定で推移。
- 輸入シェアは、ブラジルが増加傾向。中国は減少傾向（一方、中国は輸出シェアが増加傾向）。

輸出シェア



輸入シェア



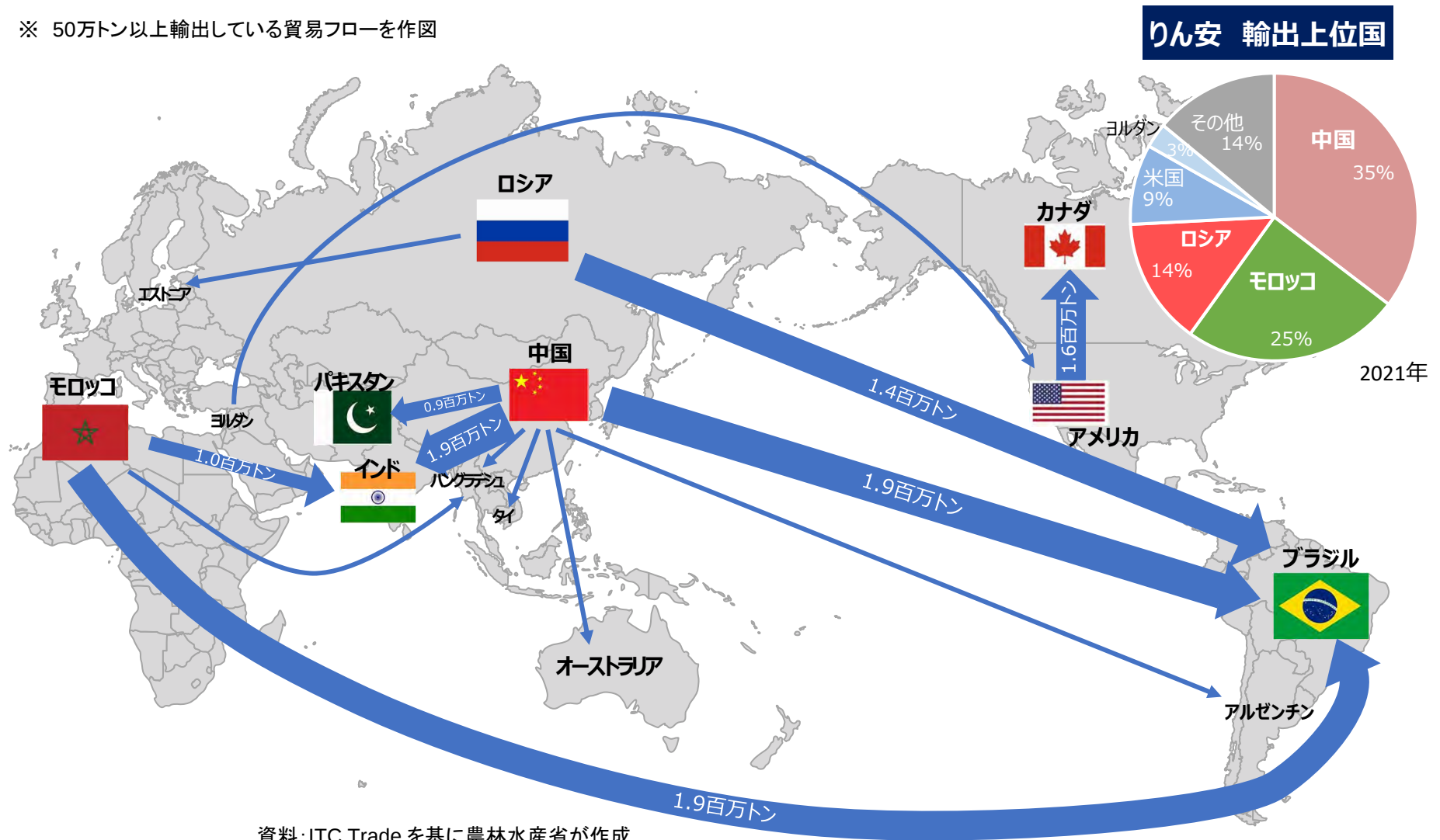
資料: ITC Trade Mapを基に農林水産省が作成

注1: 窒素、りん、加里をすべて含む金額ベースの肥料の輸出入シェア。

りん安の貿易フロー（2021年）

○ りん鉱石の産地が偏在しており、りん安の輸出は、中国、モロッコ、ロシアの3カ国で7割以上を占める。

※ 50万トン以上輸出している貿易フローを作図



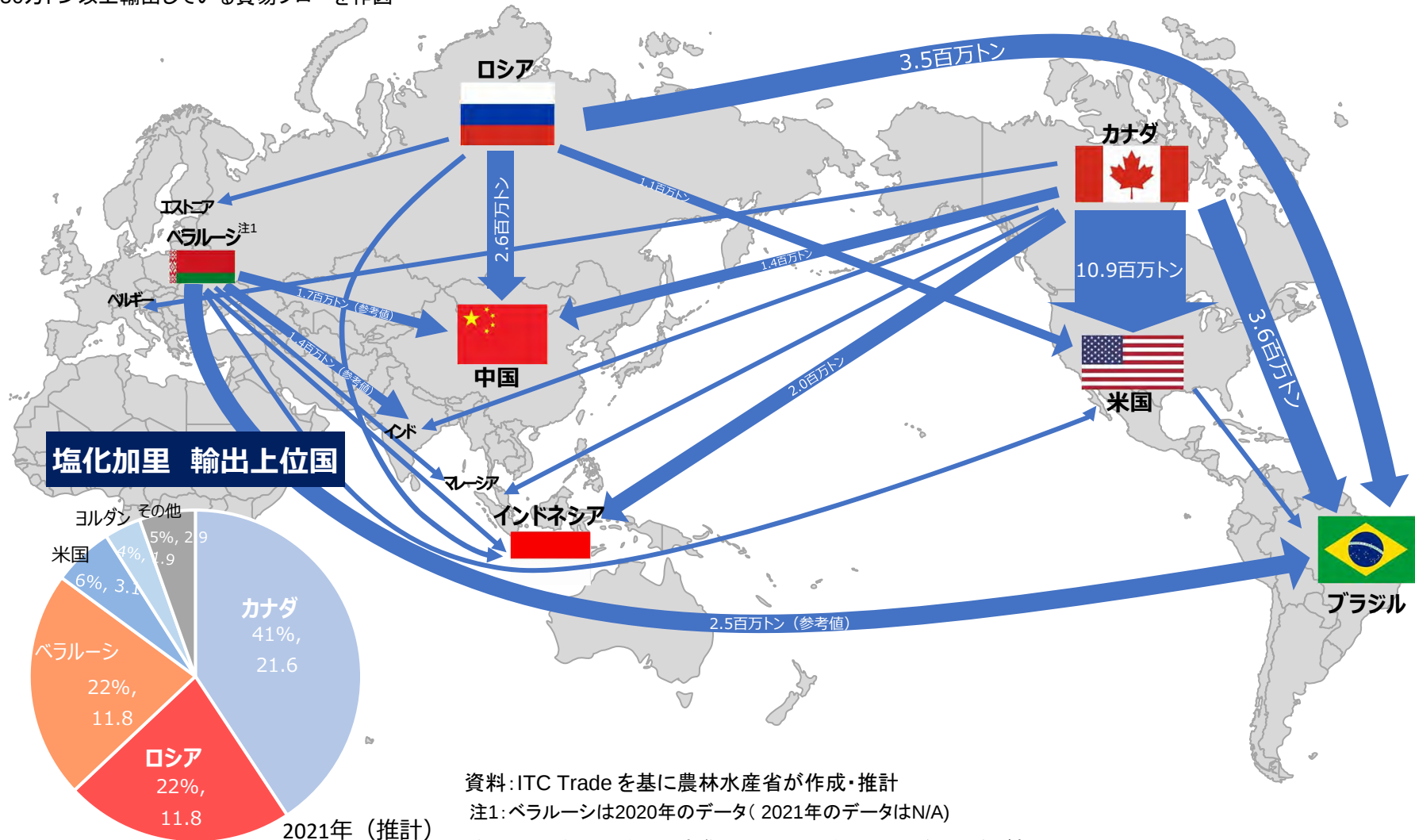
資料: ITC Trade を基に農林水産省が作成

注: レイアウトの関係から実際の国の地理上位置とは異なる場合がある

塩化加里の貿易フロー（2021年）

○ 加里鉱石の産地が偏在しており、塩化加里の輸出は、カナダ、ロシア、ベラルーシで8割以上を占める。

※ 50万トン以上輸出している貿易フローを作図



りん鉱石、塩化加里の産出量及び経済埋蔵量

- りん鉱石は、中国、モロッコ・西サハラ及び米国の3か国で世界の産出量の約7割、塩化加里は、カナダ、ロシア、ベラルーシ及び中国の4か国で約8割を占めている。
- 経済埋蔵量と2020年産出量から可採年数を推定すると、りん鉱石で約320年、塩化加里で約250年となる。

りん鉱石の産出量及び経済埋蔵量

(単位: 鉱石千トン)

国名	産出量(2020)		経済埋蔵量	
		割合		割合
中国	90,000	40%	3,200,000	5%
モロッコ及び西サハラ	37,000	17%	50,000,000	70%
米国	24,000	11%	1,000,000	1%
ロシア	13,000	6%	600,000	1%
ヨルダン	9,200	4%	800,000	1%
サウジアラビア	6,500	3%	1,400,000	2%
ブラジル	5,500	2%	1,600,000	2%
エジプト	5,000	2%	2,800,000	4%
ベトナム	4,700	2%	30,000	0%
ペルー	4,000	2%	210,000	0%
チュニジア	4,000	2%	100,000	0%
セネガル	3,500	2%	50,000	0%
イスラエル	2,800	1%	57,000	0%
オーストラリア	2,700	1%	1,100,000	2%
南アフリカ	2,100	1%	1,400,000	2%
インド	1,500	1%	46,000	0%
カザフスタン	1,500	1%	260,000	0%
アルジェリア	1,300	1%	2,200,000	3%
フィンランド	1,000	0%	1,000,000	1%
ウズベキスタン	900	0%	100,000	0%
トーゴ	800	0%	30,000	0%
メキシコ	600	0%	30,000	0%
シリア	360	0%	1,800,000	3%
その他	1,100	0%	840,000	1%
世界計	223,000	100%	71,000,000	100%

資料: USGS 「Mineral Commodity Summaries」2021報告書

注1: 経済埋蔵量は、現在のコスト水準、技術レベルで採掘が可能な量

経済埋蔵量から推定した可採年数

71,000百万トン÷223百万トン≒320年

加里鉱石(塩化加里)の産出量及び経済埋蔵量

(単位: 鉱石千トン)

国名	産出量(2020)		経済埋蔵量	
		割合		割合
カナダ	14,000	33%	4,500,000	42%
ロシア	7,600	18%	—	—
ベラルーシ	7,300	17%	3,300,000	31%
中国	5,000	12%	—	—
ドイツ	3,000	7%	—	—
イスラエル	2,000	5%	—	—
ヨルダン	1,500	3%	—	—
チリ	900	2%	—	—
スペイン	470	1%	—	—
米国	470	1%	970,000	9%
ラオス	400	1%	500,000	5%
ブラジル	250	1%	10,000	0%
その他	300	1%	1,500,000	14%
世界計	43,000	100%	—	—

資料: USGS 「Mineral Commodity Summaries」2021報告書

注1: 経済埋蔵量は、現在のコスト水準、技術レベルで採掘が可能な量

注2: 経済埋蔵量の割合は表中の合計より算出

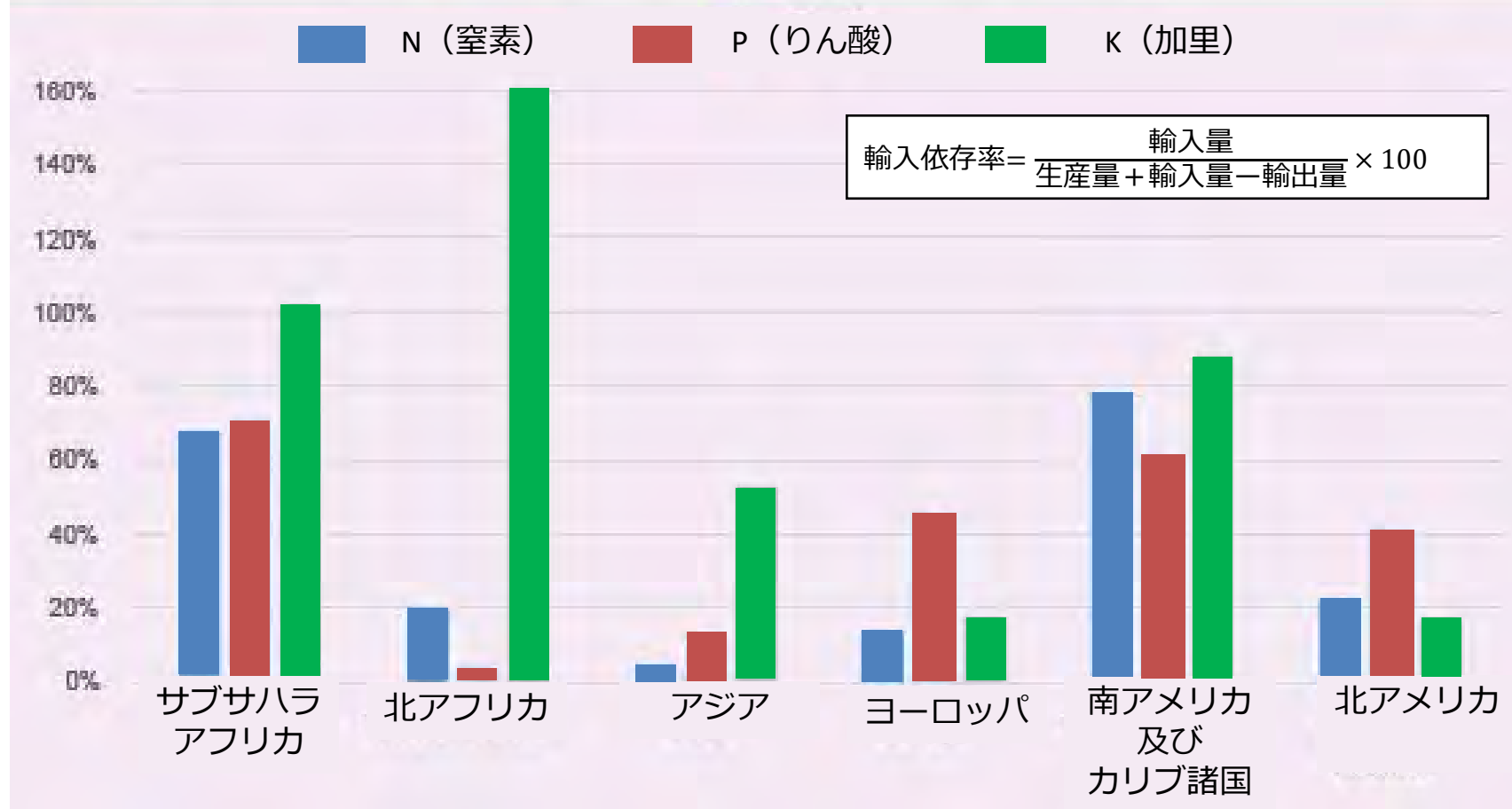
経済埋蔵量(表中の合計)から推定した可採年数

10,780百万トン÷43百万トン≒250年

世界の肥料輸入依存の割合

- FAO(国際連合食糧農業機関)の発表によれば、各種肥料の輸入依存度は、特にアフリカや南米等の開発途上国で依存度が高く、価格高騰は農業生産の負担となっている。

2017年～2019年の各地域の肥料輸入依存率の比較



（参考）肥料コスト低減に向けた取組み（肥料コスト低減体系緊急転換事業）

肥料コスト低減体系緊急転換事業

<対策のポイント>

化学肥料の原料に係る国際市況の影響を受けにくい生産体制づくりを早急に進めるため、慣行の施肥体系から、肥料コスト低減体系への転換を進める取組を支援します。

<事業目標>

次期作以降の肥料コスト又は施肥量低減計画の策定〔令和4年度まで〕

<事業の内容>

1. 肥料コスト低減体系への転換確立に向けた検討会の開催
肥料コスト低減体系への転換を各地域で検討する場づくりを支援します。

2. 肥料コスト低減体系への転換
肥料コスト低減体系への転換を進める取組（「土壌診断」や「肥料コスト低減に資する技術」）を各地域で支援します。

【①土壌診断】

土壌診断及び診断結果に基づく施肥設計の見直しに必要な取組を支援します。

【②肥料コスト低減に資する技術】

新たに実施する「肥料コスト又は施肥量を低減する技術」を活用した取組の実証を支援します。

※①のみ又は②のみの取組でも対象（令和3年度補正予算事業の運用改善）

3. 肥料コスト低減効果の情報発信

肥料コスト低減体系の効果の情報発信を支援します。

<事業の流れ>



<事業イメージ>

慣行の施肥体系 → 地域に適した肥料コスト低減体系の計画を策定

①土壌診断

【支援対象取組】

- * 土壌診断
- * 診断結果に基づく処方箋の作成（施肥設計）
- * 適正施肥の指導



②肥料コスト低減に資する技術

【支援対象取組】

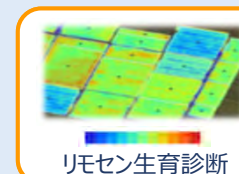
- * 新たに実施する肥料コスト低減に資する技術
- （取り組む技術に応じて、公募審査時にポイントを加算）

◆ プレミアムポイント加算技術



堆肥施用

◆ ポイント加算技術



リモセン生育診断



ドローン追肥



局所施肥技術



可変施肥技術

等

※①のみ又は②のみの取組でも対象

肥料コスト低減体系に転換！

肥料コスト低減体系の効果の情報発信

【お問い合わせ先】 農産局技術普及課（03-6744-2435）

（参考）肥料コスト低減に向けた取組み（事例集の作成・提示）

肥料のコスト低減事例集（令和3年11月）（抜粋）

土壌診断に基づく施肥の適正化

- 土壌診断を行うことにより、土壌中の肥料成分の過不足等が見える化することができ、施肥の適正化（施肥設計の効果的な見直し）や減肥、作物の収量安定化が期待できる。

〔実証例：可給態リン酸（作物が吸収できるリン酸）が過剰で、EC（電気伝導度〔塩類濃度の目安〕）が高い土壌の場合、施肥量約5割、肥料コスト約4割削減。〕

土壌診断の重要性

= 過剰施肥が引き起こす影響 =

- * 施肥作業の負担増
- * 肥料コスト増
- * 作物の健全な生育への悪影響
（風水害への耐性阻害、病害虫の発生助長）
- * 養分の流亡による環境への負荷

= 作物の健全な生育への悪影響 =

【パターンⅠ】

- ▶ 栄養過多により徒長・軟弱化し、病害虫の発生を助長

【パターンⅡ】

- ▶ 土壌の塩基バランスの悪化が病気の発生を誘発



リン酸過剰によりハクサイの根こぶ病が発生

※ 資料：農研機構

【パターンⅢ】

- ▶ 土壌の塩基バランスが悪化し、一部の養分の吸収を阻害



カリ過剰によるマグネシウム欠乏により、ブロッコリーの花蕾黒変症が発生

※ 資料：埼玉県農林総合研究センター新技術情報

導入メリット（実証例）

- ◆ 土壌診断により、過剰施肥を減らし、施肥量と肥料コストを削減

【事例：北海道E農園】

（品目：たまねぎ、にんじん、ニンニク、ホウレンソウ）

- 可給態リン酸が過剰・高EC状態

> ホウレンソウの基肥を尿素のみに変更（たまねぎ苗床ハウス）

可給態リン酸の低減

511mg/100g → 373mg/100g

> たまねぎ畑に転炉スラグを施用

塩基バランスを改善

土壌 pH 5.7 → 土壌 pH 6.2

〔施肥量及び肥料コスト〕

		施肥量(kg/10a)			価格/10a
		N	P ₂ O ₅	K ₂ O	
実施前	たまねぎ	13	20	10	14,000
	にんじん	12	20	10	11,000
	ほうれんそう	7.2	9.6	7.2	7,650
実施後	たまねぎ	15	5	5	9,600
	にんじん	9.8	5.6	6.3	8,050
	ほうれんそう	9.6	—	—	1,580

施肥量を約5割

肥料コストを約4割

削減

(参考) 原油価格・物価高騰等総合緊急対策

化学肥料原料調達支援緊急対策事業（令和4年4月）（抜粋）

○ 化学肥料原料調達支援緊急対策事業

【令和4年度一般予備費 10,020百万円】

<対策のポイント>

世界的な穀物需要の増加やエネルギー価格の上昇に伴い化学肥料原料の価格が高騰しています。更に、中国やロシア等の特定の輸入先国からの原料調達が困難となっていることから、農業経営に必要な量の肥料を確保するため、代替国からの原料調達に要する経費の緊急的な支援を通じて、肥料の安定供給を図ります。

<政策目標>

- 需要を満たす化学肥料の供給量の確保 [令和4年度まで]

<事業の内容>

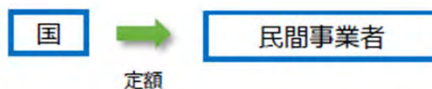
肥料製造事業者が本年秋までに調達を要する**主要な化学肥料原料**（秋用肥料原料等）について、代替国からの調達に要するコスト（輸送費・保管費）の上昇分の**掛かり増し経費**を緊急的に支援します。

<事業イメージ>



代替国からの緊急輸入等
（輸入先国の多元化）

<事業の流れ>



主要な化学肥料原料を確保



【お問い合わせ先】 農産局技術普及課（03-6744-2435）

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関（各国政府機関、FAO、IGC 等）の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

（１） 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し（農林水産政策研究所）：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

（２） 農林水産関係機関の情報（ALIC の情報サイト）：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

（３） その他海外の機関（英語及び各国語となります）

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関（FAO）：<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会（IGC）：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構（OECD）（農業分野）：<https://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム（AMIS）：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関（代表的なものです）

- ・米国農務省（USDA）：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社（CONAB）：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省（AAFC）：<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局（ABARES）：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2022 年 7 月中旬までに発表した情報を引用しています。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

http://www.usda.gov/wps/portal/usda/usdahome?navid=AGENCY_REPORTS

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds : World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

- **データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されます**ので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注：同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所（農林水産省発行「食料安全保障月報」）を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

英国については、2020 年 1 月 31 日付けで EU を離脱しました。英国の小麦に関する情報については小麦の EU27+英国のコーナーで取り扱います。

- 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

- 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先	農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室 TEL : 03-6744-2368 (直通)
------------	--